

天神北遺跡

(山梨県甲府市千塚5丁目3416番3ほか地点)

—宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2022

西甲府住宅株式会社
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社



天神北遺跡出土縄文土器「X字状把手付大甕」



東側より調査地と荒川、北西の山々を望む



2区直上より見た周溝状の溝跡

序

天神北遺跡は、甲府盆地北縁部の甲府市西部の千塚地域、荒川左岸の微高地上に位置します。千塚地域からは、西に南アルプスの山並み、南には富士山が望め、古代から人の集住が確認されています。当遺跡北側には御蔵遺跡、西側に天神西遺跡、南東側に榎田遺跡など、弥生時代から平安時代にかけての遺跡が多くみられます。特に古墳時代には集落が営まれるとともに、現在も山梨県指定文化財加牟那塚古墳、万寿森古墳など古墳時代後期の6世紀代に築かれた古墳がみられ、千塚の地名が残ることからも以前はこの地域一帯には多数の古墳が築かれていました。

天神北遺跡は古墳時代及び平安時代の遺跡として周知されていますが、本調査は初めてです。約5000年前の縄文時代中期の埋甕、消滅した古墳の痕跡、洪水で埋没した平安時代中期の住居址、荒川の氾濫の痕跡などが発見されました。この発掘調査の成果は、甲府市の歴史解明のみならず、自然環境の変化を解明する資料としても重要です。今後の研究資料としてご活用していただければ幸いです。

末筆となりましたが、このような貴重な遺跡発掘調査が実施できましたのも、開発事業者及び関係者のご理解ご協力の賜物であるとともに、発掘調査及び整理作業に従事された皆様方のご努力の成果であります。関係者皆様に感謝申し上げますとともに、今後とも甲府市の文化財保護にご協力をお願い申し上げます。

令和4年9月

甲府市教育委員会

教育長 數野 保秋

例 言

1. 本書は、山梨県甲府市千塚5丁目3416番3ほかに所在する天神北遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宅地造成工事に伴う土木工事に先立つものであり、事業者である西甲府住宅株式会社の費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、西甲府住宅株式会社、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、甲府市教育委員会の指導の下、昭和測量株式会社が調査主体となり実施した。

[調査体制]

調 査 担 当 望月健太・浅川晃一（以上、昭和測量株式会社文化財調査課）

調 査 顧 問 新津健（昭和測量株式会社文化財調査課 研究顧問）

発掘従事者 大塚悠仁、加藤俊哉、齊藤里美、佐野香織、内藤敏夫、中澤保、広瀬ありさ、横山忠以、
渡辺俊夫

整理従事者 浅川悠起子、今福ともみ、垣内律子、尾川正美、齊藤里美、佐野香織、広瀬ありさ、三木一恵

4. 試掘確認調査は、甲府市教育委員会歴史文化財課の志村憲一が担当した。本発掘調査は令和3年10月22日から12月20日まで行った。整理報告書作成業務は令和3年12月21日から令和4年9月30日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は望月健太・浅川晃一が撮影し、遺物写真は望月健太が撮影した。
6. 本書の編集は望月健太が行った。執筆分担は以下の通りである。
第1章第1節：志村憲一（甲府市教育委員会歴史文化財課 文化財保護係）
その他の執筆は望月健太が行った。
7. 発掘調査における基準点測量および空中写真撮影は昭和測量株式会社測量課が行い、基準点測量を早川徹・保坂亮太が、空中写真撮影を吉田奏司・赤池直樹がそれぞれ担当した。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたり、次の機関および諸氏から御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表する。
有限会社三双建設、河西学（公益財団法人山梨文化財研究所）、小林健二、坂本美夫、平塚洋一（順不同・敬称略）
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会で保管している。

凡例

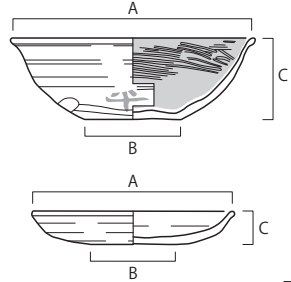
1. 本書では、国土交通省国土地理院発行の電子地形図 1/25,000 を用いた。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構平面図の X・Y 座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高 (T.P.) を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づいた。
7. 本書に掲載した絵図等の資料名は、原則として各資料に表示した。
8. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。
 竪穴建物：S I 溝：S D 土坑：S K 小穴：S P 石列・集石：S S 旧河道：N R
9. 遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
10. 遺構平面図における破線はサブトレンチ・推定線である。
11. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。

須恵器断面  焼土範囲 (遺構図)  炭化物範囲 (遺構図)  石断面 
 灰釉陶器断面・黒色処理 (遺物図)  煤 (遺物図) 

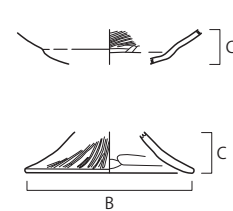
12. 遺物観察表の法量の計測方法の凡例は以下の通りである。

土師器・須恵器

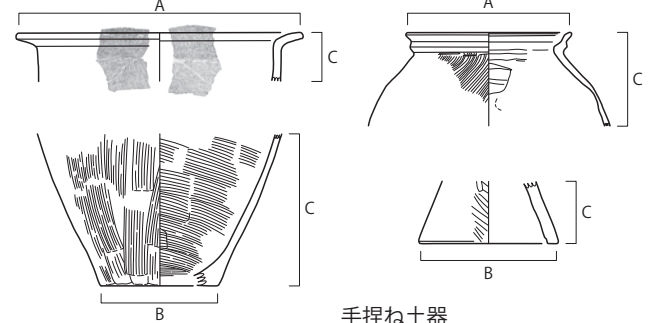
坏・皿・碗類



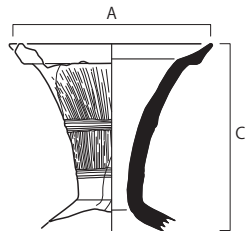
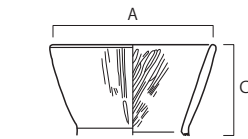
器台・高坏類



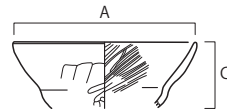
甕類



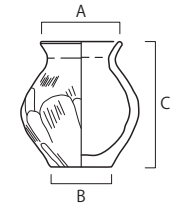
壺類



丸底鉢・埴類

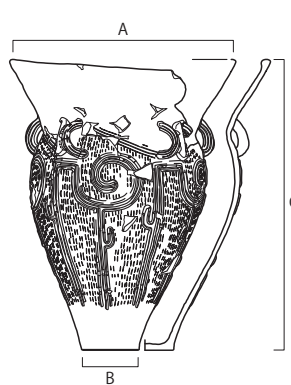


手捏ね土器

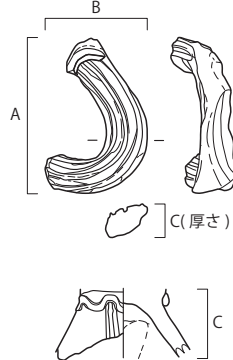


縄文土器土器

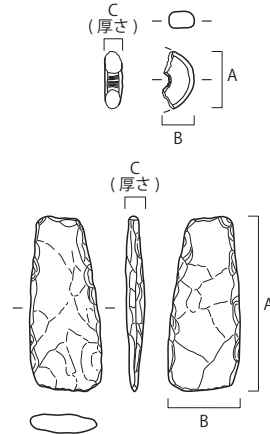
深鉢・浅鉢



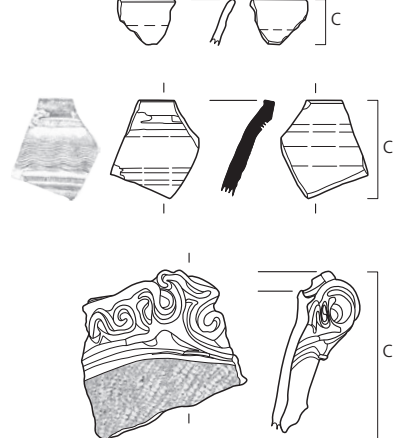
特殊系



石器類



破片類



本文目次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と層序	7
第1節 調査の方法	7
第2節 基本層序	8
第4章 調査の成果	13
第1節 1区の調査	13
第1項 第1遺構面	13
第2項 第2遺構面	15
第2節 2区の調査	19
第1項 第1遺構面	19
第2項 第2遺構面	21
第5章 総括	63
第1節 1区の調査成果と今後の課題	63
第2節 2区で確認したXI層と溝跡の関連性	64

挿図目次

第1図 本調査区と近隣調査状況	1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	6
第3図 基本層序(1)概略	8
第4図 基本層序(2)1区西壁、2区北西壁	9
第5図 遺構配置図	11
第6図 1区第1遺構面全体図	24
第7図 1区遺構図(1)S I 1	25
第8図 1区遺構図(2)S K 1～8	26
第9図 1区第2遺構面全体図(1)遺構・遺物	27
第10図 1区第2遺構面全体図(2)礫・河道	28
第11図 1区遺構図(3)S K 9～12	29
第12図 1区遺構図(4)S K 13～22、S P 1	30
第13図 2区第1遺構面全体図(1)遺構・遺物	31
第14図 2区第1遺構面全体図(2)礫	32
第15図 2区遺構図(1)S S 1～3、S K 1	33
第16図 2区遺構図(2)S K 2、S D 1～5	34
第17図 2区第2遺構面全体図	35
第18図 2区遺構図(3)S K 4～13	36
第19図 2区遺構図(4)S D 6平面図	37
第20図 2区遺構図(5)S D 6断面図	38
第21図 サブトレンチ4・5	39
第22図 1区出土遺物(1)	40
第23図 1区出土遺物(2)	41
第24図 1区出土遺物(3)	42
第25図 1区出土遺物(4)	43
第26図 1区出土遺物(5)	44
第27図 1区出土遺物(6)	45
第28図 1区出土遺物(7)	46
第29図 1区出土遺物(8)	47
第30図 1区出土遺物(9)	48
第31図 1区出土遺物(10)	49
第32図 1区出土遺物(11)	50
第33図 2区出土遺物(1)	51
第34図 2区出土遺物(2)	52
第35図 2区出土遺物(3)	53
第36図 2区出土遺物(4)	54
第37図 2区出土遺物(5)	55
第38図 埋没河道想定範囲	63
第39図 古墳の位置と推定規模	65

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	6
第2表 出土遺物観察表1(土器類)1	56
第3表 出土遺物観察表2(土器類)2	57
第4表 出土遺物観察表3(土器類)3	58
第5表 出土遺物観察表4(土器類)4	59
第6表 出土遺物観察表5(土器類)5	60
第7表 出土遺物観察表6(土器類)6	61
第8表 出土遺物観察表7(土器類)7	62
第9表 出土遺物観察表8(石製品)	62

写真図版目次

巻頭図版 1	図版 5 遺構(5)	図版 11 遺物(2)	図版 17 遺物(8)
巻頭図版 2	図版 6 遺構(6)	図版 12 遺物(3)	図版 18 遺物(9)
図版 1 遺構(1)	図版 7 遺構(7)	図版 13 遺物(4)	図版 19 遺物(10)
図版 2 遺構(2)	図版 8 遺構(8)	図版 14 遺物(5)	
図版 3 遺構(3)	図版 9 遺構(9)	図版 15 遺物(6)	
図版 4 遺構(4)	図版 10 遺物(1)	図版 16 遺物(7)	

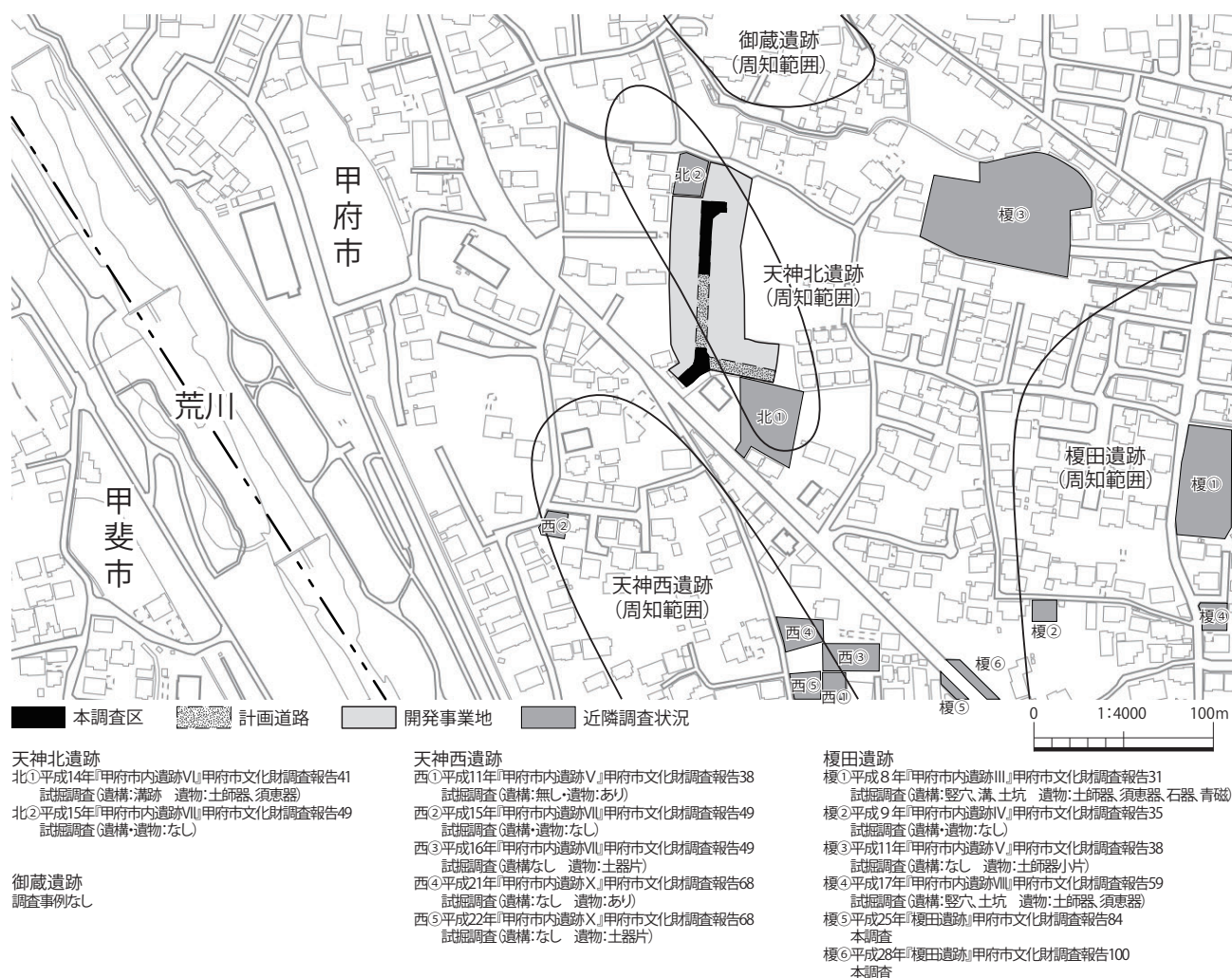
第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯（第1図）

周知の埋蔵文化財包蔵地である天神北遺跡の範囲内において、宅地造成が計画され、土木工事に先立ち令和3年7月7日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出が、事業者より甲府市教育委員会へ提出された。それに対して、令和3年7月13日付文化第1659号で山梨県知事より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について通知され、令和3年8月10日から11日にかけて甲府市教育委員会が試掘確認調査を実施した。

試掘確認調査の結果、当該地に埋蔵文化財が遺存することが確認されたため、甲府市教育委員会より事業者へ説明されるとともに、両者による協議が行われた。協議の結果、遺構および遺物が検出された道路部分予定地の北側と南側の2区域に関して、本調査を実施することとなった。

本調査に関しては、令和3年9月21日、「山梨県内の記録保存のための埋蔵文化財調査における民間調査組織の利用に関する指針」に基づき、事業者より昭和測量株式会社が発掘調査業務を請け負い、事業者、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、同日付で文化財保護法第92条第1項に基づく届出を昭和測量株式会社が提出した。令和3年10月5日付文化第2619号で山梨県知事より、埋蔵文化財発掘調査の実施について通知され、令和3年10月22日から発掘調査に着手し、記録保存を行った。



第1図 本調査区と近隣調査状況

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は令和3年10月22日から12月20日の期間で実施した。準備工を含めた調査経過は下記の調査日誌抄録の通りである。

調査日誌抄録

1区

令和3年

- 9月3日(金) 調査区周辺の既存基準点の現況、搬入路、土砂仮置き場等の確認のため踏査。
- 10月6日(月) 三者協議、着手前の確認事項と、発掘調査計画・宅地造成工事計画の情報共有を行う。
- 10月18日(月) 既存の農業用水路・擁壁の撤去(造成工事請負業者が対応)。
近隣住宅へ挨拶状を投函。
- 10月21日(木) 発掘道具搬入、消失観測点の復元と調査区1区の測り出し。
重機の搬入。調査区周辺およびヤードの除草・整地、仮設トイレ設営等の環境整備。
- 10月22日(金) 重機による表土掘削。
- 10月25日(月) 試掘トレンチ3～5埋土の除去、サブトレンチを設定し地下状況を確認。
測量基準点3点を事業地内に新設。
- 10月27～28日 人力による包含層・洪水堆積層の掘削、および遺構プラン検出作業。
遺構外出土遺物の座標計測・取り上げを開始。
- 10月29日(金) 第1遺構面の遺構プラン検出状況を撮影し、遺構の掘削・図化等記録を開始。
- 11月1日(月) 第1遺構面南側の記録を完了し、完掘状況を撮影。
宅地造成工事が事業地外周の擁壁施工から開始される。
- 11月3日(水) 第1遺構面北側の記録を完了し、完掘状況を撮影。
サブトレンチを拡張・新設し、地下状況を確認。
- 11月4日(木) 重機により旧河道および洪水堆積に伴う砂礫層を除去。
人力による第2遺構面の包含層掘削を開始。
- 11月5日(金) 包含層掘削途上に礫群2条を検出。祭祀に伴う配石の可能性を考慮し礫群の水洗を行う。
- 11月8日(月) 礫群に十字ベルトを設定し、覆土の除去・礫輪郭の露出作業を行う。
- 11月9日(火) 降雨につき午前の現場作業を中止し、石和事務所にて出土遺物の洗浄を行う。
午後より人力による包含層掘削を行う。
- 11月10日(水) 第2遺構面の遺構プラン検出状況を撮影。
- 11月11日(木) 十字ベルト層断面およびサブトレンチにより、2条の礫群はともに旧河道と判明。
- 11月12日(金) 第2遺構面の遺構の掘削を開始。西壁の堆積土層断面図を作成。
- 11月15日(月) SK9(埋甕)検出状況を撮影。遺構の図化等記録を開始。東壁の堆積土層断面図を作成。
- 11月16日(火) SK9半截状況を撮影・図化。調査区2区の測り出し。造成工事施工業者と工程打合せ。
- 11月17日(水) 第2遺構面の記録を完了し、完掘状況を撮影。
- 11月18日(木) 重機により自然流路(旧河道)を截ち割り、堆積土層断面の記録と流路内遺物を採取。
作業完了後、事業者へ調査区引き渡し。

2区

令和3年

- 11月17日(水) 調査区周辺およびヤードの除草・整地等の環境整備。造成工事施工業者と工程打合せ。
- 11月19日(金) 重機による表土掘削。仮囲いの設営と通路の視覚化。

- 11月22日(月) 人力による壁面整形と包含層掘削を開始するが、降雨につき現場作業は午前のみとなる。出土遺物の洗浄、現場図面・写真の整理を、午後より石和事務所にて行う。
- 11月23日(火) 測量基準点2点を事業地内に移設。
- 11月24日(水) 包含層掘削・遺構プラン検出作業と並行して、サブトレンチを設定し地下状況を確認。2区の旧地盤が段で分かれ、各段で堆積が異なることを把握。
- 11月25日(木) 第1遺構面西側(上段部)の遺構プラン検出状況を撮影。
- 11月26日(金) 遺構の掘削を開始するとともに、サブトレンチを新設し地下状況を確認。
- 11月29日(月) 各サブトレンチの堆積土層断面図作成。SS1礫輪郭の露出状況を撮影。
- 11月30日(火) 第1遺構面中央(中断部)の遺構プラン検出状況を撮影し、構の掘削を開始。
- 12月1日(水) 雨水の排水・現場復旧後、引き続き遺構の掘削を行う。
- 12月2日(木) SD1～4の完掘状況を撮影。SD2直下にサブトレンチを新設し地下状況を確認。新設サブトレンチにより、厚い間層を挟み第2遺構面が遺存することを把握。
- 12月3日(金) 第1遺構面の記録を完了し、完掘状況を撮影。現地にて市教委担当者と次工程の打合せ。
- 12月6日(月) 重機により第2遺構面包含層までの間層を除去。人力による包含層掘削と遺構プラン検出作業を開始。
- 12月7日(火) 雨水の排水・現場復旧後、引き続き包含層掘削と遺構プラン検出作業を行う。第2遺構面の遺構プラン検出状況を撮影し、遺構の掘削・図化等記録を開始。
- 12月8日(水) 降雨のため現場作業中止。出土遺物の洗浄、現場図面・写真の整理を石和事務所にて行う。現場状況を確認し、甲府市整理作業室にて試掘調査における出土遺物の移管を受ける。
- 12月9日(木) 雨水の排水・現場復旧後、遺構の図化等記録を行う。既存サブトレンチを拡張し、大型の溝状遺構SD6の規模や性格、作業量の把握を行う。
- 12月10日(金) SD6覆土上層を除去し、帯状礫群の検出状況を撮影。完掘作業を行う。ドローン空撮の飛行計画・予告・挨拶状を近隣住居へ投函。
- 12月13日(月) SD6堆積土層断面図の作成・完掘もって、第2遺構面の遺構の記録を完了。
- 12月14日(火) 調査区・事業地内の清掃、廃土整形等の環境整備後、ドローンによる空撮を行う。
- 12月15・16日 壁面の堆積土層断面図の作成。
- 12月20日(月) 仮囲いの撤去、重機・仮設トイレ搬出等の現場撤収作業。作業完了後、事業者へ調査区引き渡し。
- 12月23日(木) 埋蔵物発見届・保管請求書、埋蔵文化財保管証を提出。

第3節 整理等作業の経過

整理作業および報告書刊行業務は、令和3年12月21日から令和4年9月30日の期間で、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社埋蔵文化財調査課の事務所内にて実施した。なお、整理作業中は必要に応じて甲府市教育委員会歴史文化財課と連絡・打合せを行った。

整理作業は出土遺物の水洗・注記の基礎整理から始め、接合・復元ののち報告書掲載遺物を選別した。選別した遺物は原則手書きで実測したのち、デジタルトレース・写真撮影等の記録作業を行い、並行して遺物観察表の作成や、現場で記録した実測図の整理作業を行った。その後、挿図・図版の編集を行い、原稿の執筆、全体の編集と作業を進め、令和4年9月30日に発掘調査報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

山梨県の中央に位置する甲府市は、県を縦断する様な南北に長い市域をしており、東は笛吹市・山梨市、西は甲斐市・昭和町・中央市・北杜市、南は市川三郷町・富士河口湖・身延町、北は長野県川上村と多くの市町村と接している。天神北遺跡の所在する千塚地域は甲府盆地北縁にあたり、甲府市西端を南流する荒川の中流域左岸に位置する。荒川は秩父山地西部の朝日岳（標高 2,581m）、金峰山（標高 2,595m）、国師ヶ岳（標高 2,592m）などを水源とする一級河川で、景勝地として知られる御岳昇仙峡（日本遺産）を経て、甲府盆地底部で笛吹川に合流する。周辺には荒川によって開削された河岸段丘、沖積台地、自然堤防状の微高地が多く見られ、段丘面や微高地上に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数確認されている。天神北遺跡はこの様な地形のうち、荒川に沿って南北に長く形成された自然堤防状の微高地上に展開し、遺跡の標高は 308～311mを測る。千塚地域は、『甲斐国志』によると古墳が多く存在したという「千の塚」がその名の由来であるとされ、加牟那塚古墳、万寿森古墳といった大型の横穴式石室を持つ円墳が現存するほか、慶長 6 年（1601）の検地帳には「金井塚」の小字名が見られる。このほか『西山梨郡志』には「手塚」の誤記が千塚になったという説も記載される。

第2節 歴史的環境（第2図・第1表）

旧石器時代

周辺で周知されている遺跡は無いが、三光寺山（標高 365m）東麓の相川扇状地西縁を南流する相川中流域（42 付近）の河床より、ナウマンゾウの臼歯の化石が発見されており、地層の年代研究から、8 万年以前のもものと推定されている。

縄文時代

調査地周辺では数少なく、西大坂 A 遺跡（20）、西河原遺跡（67）、居村村上遺跡（69）、米草遺跡（251）のように、周知されている遺跡の大半は散布地と位置づけられる小規模の遺跡で、盆地北縁という立地上、広域な平坦地に乏しく、継続的な大規模集落を形成し難いと考えられる。このうち米草遺跡では平成 12 年の調査で遺構に伴い諸磯 b 式の土器が出土したことから縄文時代前期末を主体とする集落であることが判明し、遺跡自体も片山南斜面の舌状台地に沿って広がりを持つ可能性が得られた。比較的広域に展開する遺跡としては緑が丘二丁目遺跡（42）が挙げられる。甲府市立北中学校構内より諸磯 b 式や曾利 I 式の土器や石棒が出土しているが、遺構は未確認である。このほか榎田遺跡（17）、塚本遺跡（19）、緑が丘一丁目遺跡（43）で前期後葉から後期の遺物が確認されるものの、ローリングによる摩滅が顕著であり洪水等による流入遺物である可能性が高い。第 2 図北側図外の荒川上流域（能泉湖〔荒川ダム〕周辺）には宝町遺跡、草鹿沢町遺跡などの縄文時代中期の遺跡が分布する。

弥生時代

この時期より、稲作の普及とともに狩猟・採集を中心とした縄文時代以前の山間地を離れ、居住域が平坦地の多い盆地底部へ移り変わる。周辺では早期、前期の遺跡は確認されていないものの、八幡東遺跡（27）では平成 26 年の調査で弥生時代後期の竪穴住居 18 基が確認されている。居住域が平坦地となったことから、平安時代まで継続する遺跡が多く見られ、特に榎田遺跡は 14 世紀前葉の中世まで、緑が丘二丁目遺跡は 10 世紀前葉の平安時代までと中世、音羽遺跡（28）は奈良時代まで、塩部遺跡（74）は 10 世紀の平安時代までと、広域かつ長期間営まれた集落遺跡が知られる。

古墳時代

先述のように、弥生時代後期より続く遺跡が多い。緑が丘二丁目遺跡では平成 29 年の調査で、弥生時代後期から中世までの 8 時期に分けられる遺構の変遷が確認された。塩部遺跡では平成 7 年の調査で、方形周溝墓の周溝から 4 世紀後半とされる家畜としては日本最古級のウマの歯が出土している。また、平成 28 年

の調査では古墳時代後期の流路から多数の木製品が出土しており、織機の部材と推定される木製品も報告されている。

6世紀になると、盆地北縁の山麓や山頂に古墳が築造され始め、湯村山（標高446m）の山麓には横穴式石室の円墳としては本県第2・3位の規模を誇る加牟那塚古墳（25）や万寿森古墳（35）をはじめ、積石塚である湯村山古墳群西支群（29～31）東支群（32・34・36～39）と多くの古墳が分布する。また、羽黒山（標高490m）山頂には本県最大規模を誇る積石塚である天狗山（山梨県史では「おてんぐさん」）古墳が所在する。千塚の名が示すように、現存する以外にも多数の古墳が存在したとされ、古い地籍図から古墳の形跡を窺うこともできるが、昭和29年以降の開発により消失したものも多い（参1～15）。平成27年に跡部遺跡（18）で実施された発掘調査では、現在墓地となっている円形を呈す高まり付近より、大型の溝と円筒埴輪片が確認されたことから、古墳の可能性が考察されている（参7）。

奈良・平安時代

荒川左岸は平安時代中期の承平年間（931－938）に編纂された『和名類聚抄』にみえる巨麻郡9郷の一つ、青沼郷に属すると推定される地域である。正倉院宝物には「巨麻郡青沼郷物部高嶋調耆匹」と墨書された調繩があり、これは天平勝宝4年（752）に行われた奈良東大寺大仏開眼供養に用いられた伎楽面の袋の裏裂として使用されたという。このことから、奈良時代には青沼郷が成立しており、物部連に関連する人物が居住したことが明らかとなっている。弥生時代後期から続く塩部遺跡では、平成7年の調査で検出された溜池跡から木製の斎串や人型などの祭祀に纏わる遺物が出土している。塚本遺跡では、平成22年の調査で埋没河道より銅製巡方や緑釉陶器が出土しており、付近に公的施設が存在した可能性が指摘されている。また、平成27年の跡部遺跡の調査で古代瓦が出土したことは、現在の攀桂寺の前身となる古代寺院の存在を窺わせるものである。

中・近世

『甲斐国志』によると、千塚地域は甲府市西部から甲斐市東部にかけて鎌倉期より営まれた志摩荘に属するとされる。志摩荘の成立時期は不明であるが、文献史料としては鎌倉時代の建久7年（1196）6月17日付の源頼朝書状（松尾神社〔京都府〕文書『鎌倉遺文』）が初出とされる。しかしながら、松ノ尾遺跡（山梨県甲斐市）で出土した9世紀から10世紀の土器に「島□」「嶋西」と読める墨書が認められたことから、平安時代末期には既に志摩荘が成立していた可能性もあり、在地領主としては甲斐源氏一族の武田有義や、安田忠義（志摩四郎）などの平安後期から鎌倉時代初期の人物が考えられている。また、『一蓮寺過去帳』によると永享から文安年間（1429～1449）に供養された衆一坊の注記に「千塚」と認められることから、室町時代後期には既に千塚の名が用いられていたことが判明している。

源義光（新羅三郎義光）を祖とする甲斐武田氏は、甲斐国内外の諸勢力や一族との対立・抗争を繰り返しつつも、18代信虎が甲斐国内を掌握すると、永正16年（1519）に甲府盆地北縁の躑躅ヶ崎の地へ居館（躑躅ヶ崎館）を移すとともに、城下町を整備することで甲斐国の新たな府中とした。扇状地帯に築かれた躑躅ヶ崎館は、3方を山に囲われた天然の要害を呈し、北方に詰城としての要害城・熊城、西方に湯村山城（33）、南方の一条小山に砦が築かれるとともに、各地に烽火台が設置（33・263・264）された。躑躅ヶ崎館は、信虎・信玄・勝頼の3代の居館となったが、勝頼による天正9年（1581）の新府（山梨県韮崎市）移転後間もなく織田信長の甲州征伐により、天正10年（1582）3月に甲斐武田氏は滅亡することとなる。

調査区西側を南北に延伸する都市計画道路高畑町昇仙峡線は中・近世における金峰山信仰に伴う参道（登拝路）「御嶽道（古道）」の一つである吉沢筋とされており、吉沢筋の起点が接続する穂坂路の延長線上には『古事記』『日本書紀』のヤマトタケル伝承にみられる東海道から東山道への連絡路の変換点である酒折宮や笛吹市春日居所在する初期甲斐国府に通じる。また、吉沢筋の起点付近に所在する跡部遺跡は、武田信虎・晴信（信玄）に仕えた跡部伊賀守信秋が元亀2年（1571）に屋敷地を寄進し再建させたと伝わる曹洞宗寺院の攀桂寺の旧境内域であり、攀桂寺は境内規模を縮小しながらも現存している。なお攀桂寺は元は穀蔵寺といい、跡部信秋が攀桂斎と号したことから文禄3年（1594）に攀桂寺と寺号を改めたと伝わる。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧 *番号は『甲府市遺跡地図』に準じ、「参」は消滅古墳等の参考地を示す。

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	米草古墳 (消滅)	古墳	古墳	27	八幡東遺跡	弥生・古墳	散布地	56	穴塚	古墳	古墳	参1	夫婦塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
2	山之神遺跡	中世	城館跡	28	音羽遺跡	弥生・古墳	散布地	67	西河原遺跡	縄文・平安	散布地	参2	天神塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
3	若宮前遺跡	平安	散布地	29	大平1号墳	古墳	古墳	68	平石遺跡	平安	散布地	参3	無名一号墳 (消滅)	古墳	古墳
4	天狗山古墳	古墳	古墳	30	塩沢寺裏無名墳 (碁石塚)	古墳	古墳	69	居村村上遺跡	縄文・平安	散布地	参4	子泣塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
13	鴨塚遺跡	平安	散布地	31	大平2号墳	古墳	古墳	70	前田遺跡	中世	散布地	参5	猪塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
14	御蔵遺跡	古墳・平安	散布地	32	湯村山6号古墳	古墳	古墳	71	豆田遺跡	平安	散布地	参6	無名二号墳 (消滅)	古墳	古墳
15	天神北遺跡	古墳・平安	散布地	33	湯村山城跡	中世	城館跡	72	前田遺跡	平安	散布地	参7	跡部塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
16	天神西遺跡	古墳	散布地	34	湯村山5号古墳	古墳	古墳	73	富士見遺跡	古墳・平安	散布地	参8	蛇塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
17	榎田遺跡	弥生~平安	散布地	35	万寿森古墳	古墳	古墳	74	塩部遺跡	弥生~平安	集落跡	参9	証文塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
18	跡部遺跡	古墳	散布地	36	湯村山4号古墳	古墳	古墳	251	米草遺跡	縄文	散布地	参10	風塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
19	塚本遺跡	古墳	散布地	37	湯村山3号古墳	古墳	古墳	253	甲府城下町遺跡	近世	城下町	参11	薬師塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
20	西大坂A遺跡	縄文	散布地	38	湯村山2号古墳	古墳	古墳	259	法泉寺遺跡	中世	散布地	参12	大塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
21	西大坂B遺跡	平安	散布地	39	湯村山1号古墳	古墳	古墳	262	八幡前遺跡	中世	散布地	参13	早乙女塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
22	天神平遺跡	平安	散布地	40	三光寺山遺跡	古墳・平安	祭祀跡	263	和山の城山	中世	城館跡	参14	鶴塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
23	羽黒無名墳 (消滅)	古墳	古墳	41	和田無名墳	古墳	古墳	264	法泉寺山の烽火台	中世	城館跡	参15	荒神塚古墳 (消滅)	古墳	古墳
24	金塚西遺跡	縄文・古墳	散布地	42	緑が丘二丁目遺跡	縄文~平安	集落跡	273	荒川屋敷	中世	城館跡				
25	加牟那塚古墳	古墳	古墳	43	緑が丘一丁目遺跡	古墳	集落跡	274	金竹氏屋敷	中世	城館跡				
26	神田遺跡	弥生~平安	散布地	46	村之内遺跡	古墳~平安	散布地	275	横田氏屋敷	中世	城館跡				

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法（第5図）

本調査に先がけ甲府市教育委員会が実施した試掘確認調査では、宅地造成に伴い新設される幅6mの道路部分に対し、9か所の試掘トレンチが設定された。このうち北部に設定された3か所の試掘トレンチ（3～5）からは10世紀前半の遺構・遺物ないし縄文時代中期の遺物が、南西部に設定された2か所の試掘トレンチ（8・9）からは古墳時代または平安時代の遺物を含む堆積層が確認された。一方、中央部に設定された2か所の試掘トレンチ（6・7）は遺構・遺物は皆無であるとともに、北側に設定された試掘トレンチ5と堆積に連続性が認められなかった。また、南東部の2か所に設定された試掘トレンチ（1・2）からは土師器細片が数点出土したもののローリングによる摩滅が著しいことから、埋蔵文化財が遺存する可能性が否定された。以上のことから、試掘トレンチ6・7付近を除外し北側の1区（約330㎡）と南西側の2区（約165㎡）に分けられた約495㎡が発掘調査による記録保存対象となった。

事業地内で調査と工事を並行して行うことから、事業者・造成工事請負業者（以下工事者）と事前に打合せ、現況の擁壁・農業用水路の撤去や掘削土の運搬を工事者が行うこと、北側の1区から調査に着手すること、調査終了後に即時着工するため埋め戻しは行わないことなどを取り決めた。調査期間中は標識ロープ、コーン・コーンバー、警告灯により通路や作業エリアを明示し、調査区へはネットフェンスで仮囲いするなど転落防止や視認性向上を図る等の保安対策を講じるほか、工事者の現場責任者と作業工程の打ち合わせを適時行った。このほか、表土掘削等の各種調査工程毎に教育委員会担当者の確認を受け、作業工程の打合せを行った。

重機による表土掘削は、甲府市教育委員会の立会いのもと部分的に深掘りにより堆積土層を観察しつつ掘り下げ、1区については包含層に相当する遺構確認面直上層を約10cm残す深さである現地地表下40～50cmまで、2区についても包含層を約10cm残す深さである現地地表下60～70cmまで行った。人力で残る包含層を除去したのち、鋤簾・両刃三角鎌を用い精査し遺構プランの検出を行った。検出した土坑状・小穴状の遺構については、半截し土層の撮影と実測図作成ののち完掘した。また、溝状や竪穴住居状の遺構については、覆土をベルト状に残し、同じく土層の記録ののち完掘した。掘削土は調査区脇に仮置き後、工事者が事業地内低地側に適時運搬し、盛土造成に用いた。

現場での記録は、遺構の土層断面図については原則手書き実測を行い作成した。平面図についてはSOKKIA社製トータルステーション「CX-105」・Panasonic社製屋外型ノートパソコン「TOUGHBOOK CF-19」・cubic社製遺構実測支援ソフト「遺構くん」による電子平板測量と、SONY社製ミラーレス一眼カメラ「α5100 + E 20mm F2.8 SEL20F28」・高所撮影用ポール・Agisoft社製画像処理ソフト「PhotoScan Professional」による写真測量を併用し作成した。遺構や調査経過の写真はNikon社製デジタル一眼レフカメラ「D7100 + AF-S DX NIKKOR 18-105mm F3.5-5.6G ED VR」とRICOH社製デジタル一眼レフカメラ「PENTAX KP + HD PENTAX-DA 15mm F4 ED AL Limited」を用い撮影した。また、DJI社製無人航空機「Phantom 4 Pro」により全体完掘状況および立地環境・景観を撮影した。

整理・報告書作成では、出土遺物の水洗、注記、接合、復元と進め、遺物の実測は原則手描きで行ったが、一部についてはKEYENCE社製3Dスキャナ型三次元測定機「VL350シリーズ」やAgisoft社製画像処理ソフト「PhotoScan Professional」を用い作成した三次元モデルを遺物実測に活用した。遺物の写真はNikon社製デジタル一眼レフカメラ「D7500 + AF-S NIKKOR 28-300mm F3.5-5.6G ED VR」を用い撮影した。また、デジタルトレース、写真補正、挿図・図版作成にはadobe社製「illustratorCC」「PhotoshopCC」を、報告書執筆編集には同じくadobe社製「InDesignCC」をそれぞれ用いた。

第2節 基本層序（第3～5図）

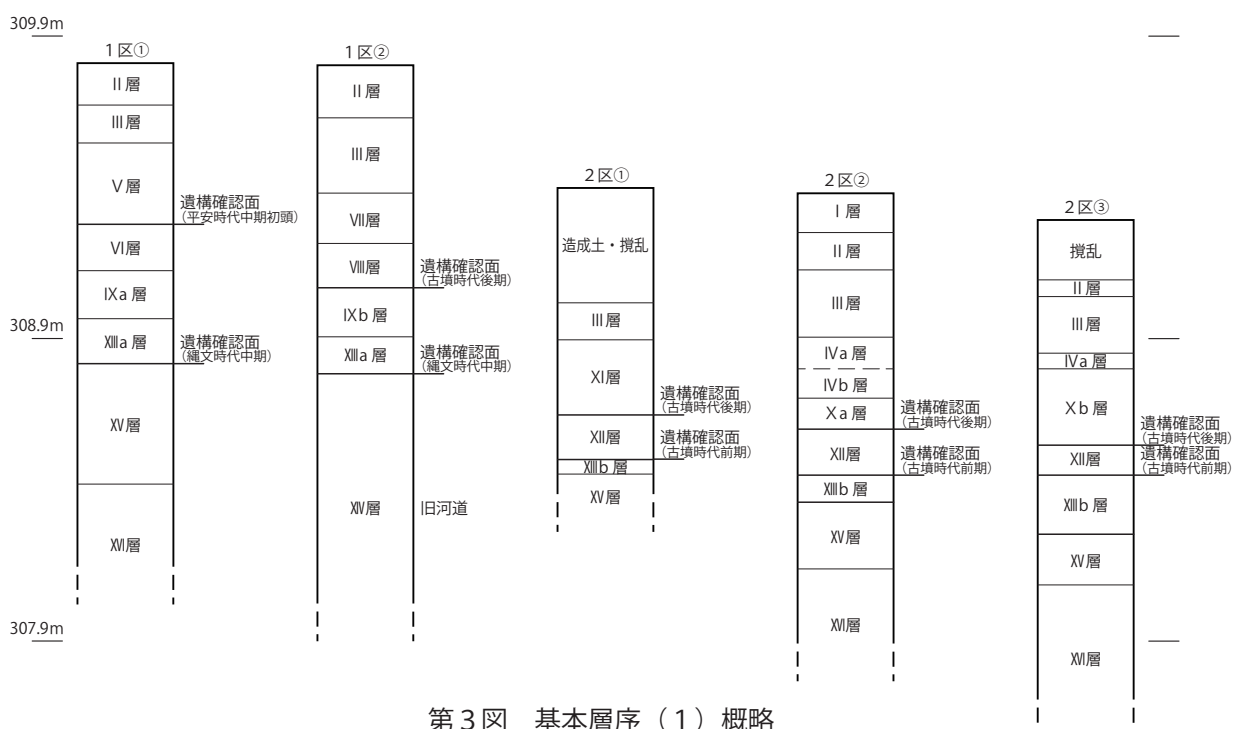
事業地周辺の土地傾向として南東方向へ傾斜をしており、これは荒川の流下方向とほぼ同じ方向である。調査直前の事業地は8面の棚田状水平面で構成されており、事業地内における最大標高差は北西隅（標高309.97m）と南東隅（標高308.67m）で、水平距離129.6m、高低差1.3mを測る（勾配率1%）。

1区

Ⅱ層は水田耕作土で、Ⅲ層は水田床土である。Ⅴ層はにぶい褐色粗粒砂を主体とし、平安時代の包含層に相当するが、遺物はほぼ皆無である。Ⅵ層は20mm未満の小礫を含む褐色細粒砂を主体とし、旧河道の筋状の凹地を埋没させる。このⅥ層上面が平安時代中期初頭の遺構確認面となる。Ⅴ・Ⅵ層はともに1区北側にのみ見られる河川性の堆積で、1区中央付近で下層に対し緩やかに乗り上げる。Ⅶ層は1区南側にのみ確認できる無遺物層で、黒褐色粘土を主体とする。Ⅷ層は古墳時代後期の包含層である。黒褐色シルトを主体とする洪水性の堆積で、遺物を含むが炭化物は皆無である。Ⅸ層は無遺物層である。シルトないし極細粒砂の堆積で、色調は1区中央付近を境に北側は赤褐色（Ⅸa層）、南側は暗褐色（Ⅸb層）となる。このうちのⅨb層上面が古墳時代後期の遺構確認面である。Ⅹ層は縄文時代中期の包含層である。極暗赤褐色シルト（ⅩⅢa層）主体の堆積で、遺物を含むが炭化物はほぼ皆無である。Ⅺ層は旧河道の埋土である。黒褐色の粘土と粗粒砂の混合土で、径10～80cmの石を多量に含む。Ⅻ層は地山である。径10～100mmの礫を含む褐色極細粒砂を主体とし、酸化鉄分が斑に見られる。以下は地山と色調を同じくする砂礫層（ⅫⅠ層）である。

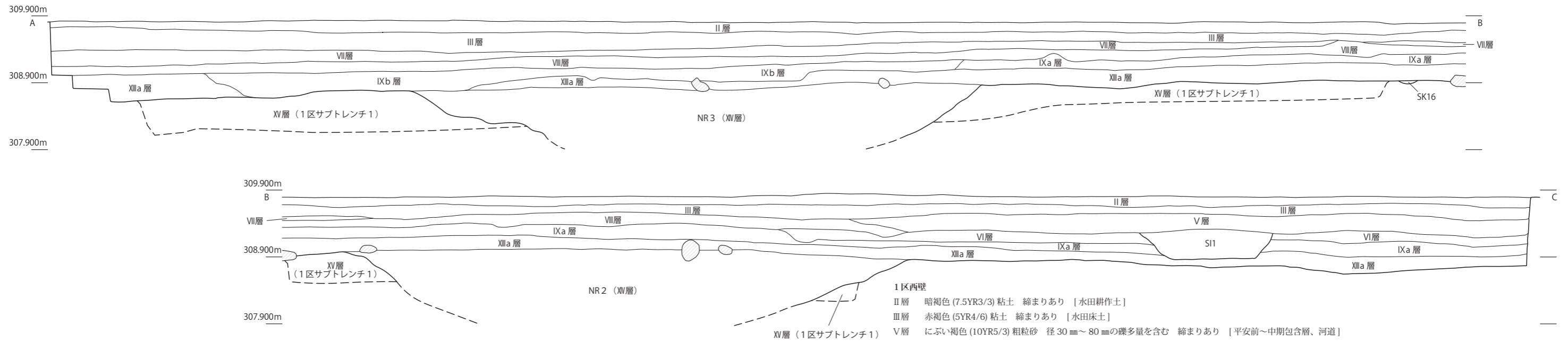
2区

Ⅰ層は畑耕作土で、2区の所在する事業地西側は水田から畑に転換する際に客土されている。また、水田耕作に伴うⅡ・Ⅲ層の性格は1区に準じるが、ⅩⅢ・ⅩⅤ・ⅩⅦ層を除き1区と堆積層の連続性は認められない。Ⅳ層は無遺物層である。暗褐色のシルト質粘土を主体とし、観察地点により上部のⅣa層とやや赤味が強い下部のⅣb層に細分できる。このⅣ層を掘り込み礫を充填した暗渠を確認したが構築時期は不明。Ⅹ層は古墳時代後期の包含層で、暗褐色（Ⅹa層）のシルト質粘土を主体とするが、南東へ向け地形の傾斜とともに厚みと黒みを増し、2区南端では黒褐色（Ⅹb層）となる。Ⅺ層は古墳時代前期から後期の遺物を包含する特殊な層で西側のみに見られる。礫や粘土の混ざる締りの強い厚さ5～20cm程度の層が複数重なることから、人為的に土壌を盛り上げて版築を行っている可能性がある。Ⅻ層は極暗赤褐色シルト質粘土を主体とし、古墳時代前期の包含層かつ、層上面は古墳時代後期の遺構確認面となる。ⅫⅡ層は暗赤褐色極細粒砂を主体とし、1区のⅫⅡa層に相当するが、遺物の出土は皆無に等しい。以下は1区に準じる。



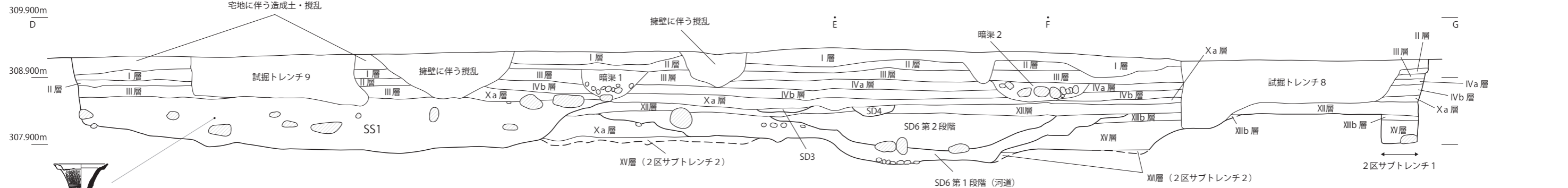
第3図 基本層序（1）概略

1区西壁



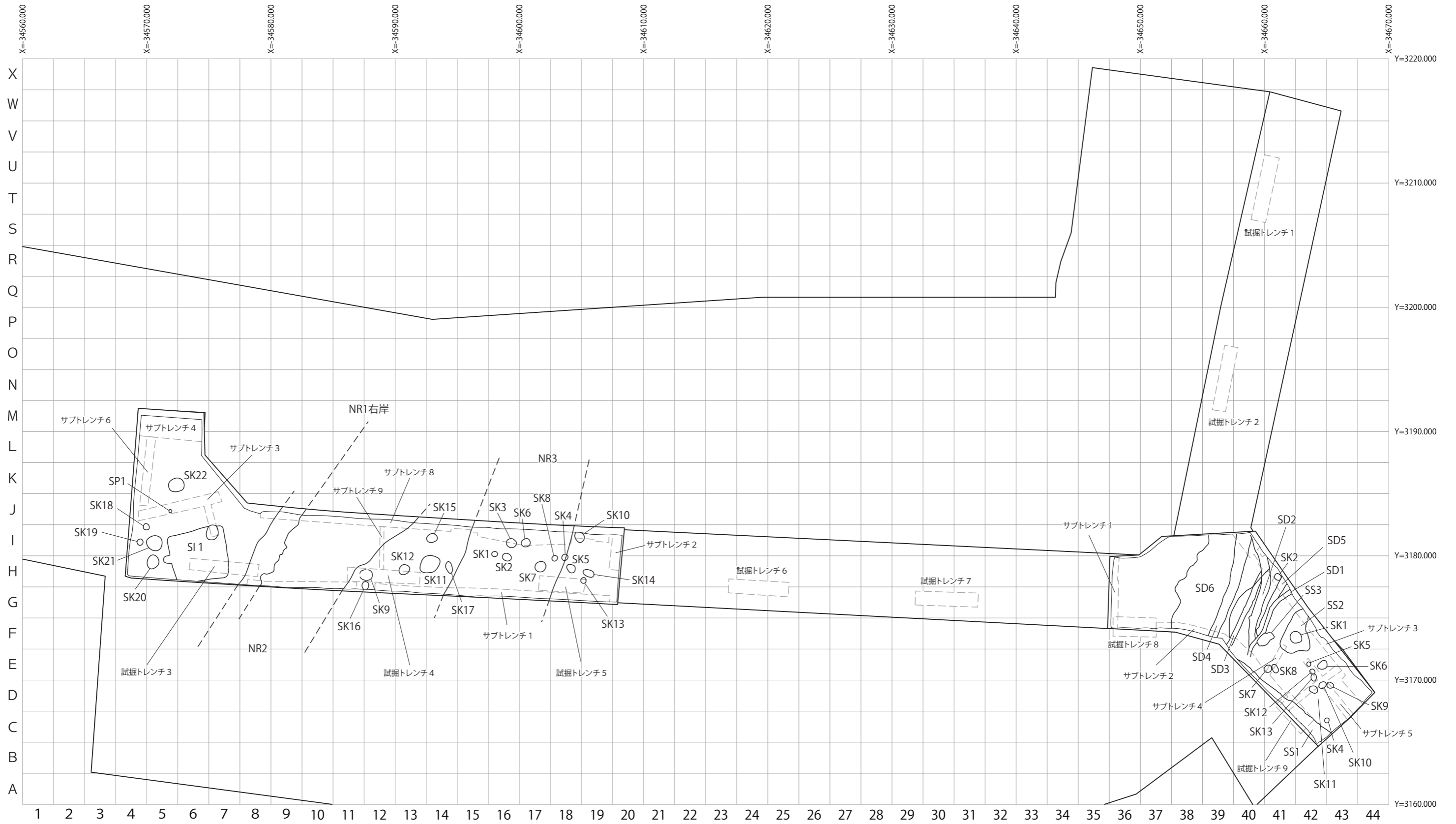
- 1区西壁**
- II層 暗褐色(7.5YR3/3)粘土 締まりあり [水田耕作土]
 - III層 赤褐色(5YR4/6)粘土 締まりあり [水田床土]
 - V層 にぶい褐色(10YR5/3)粗粒砂 径30mm~80mmの礫多量を含む 締まりあり [平安前~中期包含層、河道]
 - VI層 褐色(7.5YR4/4)細粒砂 径20mm未満の小礫少量を含む 締まりあり [河道]
 - VII層 黒褐色(10YR3/2)粘土 炭化物極々微量・褐色(10YR4/6)ブロックを含み、極暗赤褐色(5YR2/3)シルトが極微量混じる 締まりあり
 - VIII層 黒褐色(5YR2/3)シルト 径5mm未満の褐色(10YR4/6)ブロック多量・径5mm未満の小礫微量を含む 締まりあり [古墳後期包含層]
 - IXa層 赤褐色(5YR4/6)極細粒砂 極暗赤褐色(5YR2/3)シルトが斑に混じる 締まりあり
 - IXb層 暗褐色(10YR3/4)シルト 径5~20mmの小礫を含み、赤褐色(5YR4/6)シルト・極暗赤褐色(5YR2/3)シルトが斑に混じる 締まりあり
 - XIIa層 極暗赤褐色(5YR2/3)シルト にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトが斑・褐色(10YR4/4)細粒砂がブロック状に混じる 締まりあり [縄文中期包含層]
 - X層 黒褐色(10YR3/1)粘土と粗粒砂の混合 酸化鉄分・径10~80cmの石多量を含む 締まり不均等 [河道]
 - X層 褐色(10YR4/4)極細粒砂 径10~100mmの礫多量を含む 締まりあり [地山]

2区北西壁



- 2区北西壁**
- I層 灰黄褐色(10YR4/2)粘土 径10mm未満の小礫微量を含み、植物痕が多く見られる 締まりあり [畑耕作土(客土)]
 - II層 褐色(7.5YR4/3)粘土 径4mm未満の小礫極微量を含み、極粗粒砂が微量混じる 締まりあり [水田耕作土]
 - III層 赤褐色(5YR4/6)粘土 径10mm未満の小礫極微量を含む 締まりあり [水田床土]
 - IVa層 暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土 褐色(10YR4/6)粒・径10mm未満の小礫極微量を含む 締まりあり
 - IVb層 暗褐色(7.5YR3/3)シルト質粘土 褐色(10YR4/6)粒・径10mm未満の小礫極微量を含む 締まりあり
 - Xa層 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土 褐色(10YR4/6)粒・中粒砂少量を含む 締まりあり [古墳中~後期包含層]
 - XII層 極暗赤褐色(5YR2/3)シルト質粘土 褐色(10YR4/6)粒多量を含む 締まりあり [古墳前期包含層]
 - XIII層 暗赤褐色(5YR3/6)極細粒砂 粗粒砂微量を含む 締まりあり
 - XV層 褐色(10YR4/4)極細粒砂 径10~100mmの礫多量を含む 締まりあり [地山]
 - XVI層 褐色(10YR4/4)細粒砂 径20~300mmの礫が大半を占める 締まりあり [地山(砂礫層)]

第4図 基本層序(2) 1区西壁、2区北西壁



第5図 遺構配置図

第4章 調査の成果

調査では1区・2区ともに2面の遺構面を確認した。1区・2区合わせた調査区全体では遺構として竪穴住居1基、石列状の集石3条、溝跡6条、土坑34基、小穴1基を検出するとともに4条の河道を確認している。遺物としては縄文土器、土製品、石器、土師器、須恵器、甲斐型土器が出土しており総量はプラスチックコンテナ(386mm×590mm×207mm)にして9箱分に相当する。遺物の年代・分類は『山梨県史 資料編2 原始・古代2(第2章 山梨県の考古学編年)』(県史編年)を基準にしている。

第1節 1区の調査

事業地北側に所在する1区では、遺構として竪穴住居1基、土坑22基、小穴1基を検出するとともに、3条の河道を確認した。

第1遺構面では北側で竪穴住居1基と河道1条、南側で土坑8基を検出したが、中央付近では遺構は確認できず、遺物も皆無に等しい。検出地点により時期的に数世紀の隔りがあるが、平安時代の遺構・遺物は調査区北端付近の埋没河道直上からのみの検出で南側の古墳時代遺構面とは堆積層に連続性が見られないことから、古代と一括して第1遺構面と扱う。遺物は甲斐型土器を含む土師器が主体である。県内において須恵器の流通が確実な時期に属するが、1区では須恵器は一切出土していない。

第2遺構面では調査区を横断する2条の河道を確認し、これら河道を避ける3つ区域から土坑12基と小穴1基を検出した。遺物は縄文土器を主体としわずかながら土製品・石器も出土している。遺物の出土は主に河道からで、遺物を伴う遺構は少数であった。

第1項 第1遺構面(第6図)

S I 1(第7・22・23図、図版1・10)

[位置・重複] グリッドH・I-5~7。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はN-12°-Wを主軸とする隅丸長方形で、主軸4.61m、交差軸4.09mを測る。断面形状は皿形で、深さ42cmを測る。また、北壁に長さ59cmを測る突出部を有する。

[検出状況・埋土] 検出はV層直下のVI層上面である。住居隅の一部が西壁調査区外に延伸するが、ほぼ全容を検出した。埋没河道上に構築され、床面は砂層を掘り固めたのみの簡素なものである。東壁の南東コーナー付近にカマドを有し、カマド北脇に棚状の低い段が付属する。北壁の突出部の性格は不明だが、焼土・炭化物が確認できないためカマドの可能性は否定できる。埋土は細粒砂とシルトを主体とし、礫を多く含む。礫や遺物は低地側の東南コーナー付近、特に住居の東壁・南壁沿いに押し付けられるように集中する様から、住居は洪水被害により埋没した可能性が高い。

[出土遺物] 土師器11点(報告番号1~11)を図示した。1~5は坏、6は皿、7~11は甕である。1は玉縁状口縁・放射状暗文の甲斐型坏で、外面に「平」と墨書される。2は口縁がやや玉縁化した甲斐型坏で暗文は放射状である。3は玉縁状口縁・放射状暗文の甲斐型坏。4は玉縁状口縁・同心円状暗文の甲斐型坏で、内面には黒色処理が施され、外面に「平」と墨書される。5の底部は回転糸切である。6は甲斐型皿で、回転糸切の底部に「平」と墨書される。7~11は内面横ハケ、外面縦ハケの甲斐型長胴甕で、10は底部に木葉痕が認められる。

[時期] 検出状況や出土遺物より平安時代中期初頭、9世紀後半から10世紀前半と推定している。

NR 1(第4・6図、図版1)

[位置・重複] グリッドG~J-8~13。

[形状・規模] N-65°-Wを主軸とすると想定される河道で、調査区内では最大幅15.4m、最大深76cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅤ層直下で、Ⅵ層により埋没する。河床は北側調査区外へ傾斜することから、河道中心部は調査区外と想定され、幅は30m以上の可能性がある。

[出土遺物] 河道規模に対して遺物出土量は極めて少なく、土師器細片が出土したが図化し得るものはない。

[時期] 時期の判定できる遺物はないが、検出層位から平安時代初頭頃には埋没していたと考えられる。また、古墳時代の遺構・遺物はNR1右岸の1区南端付近のからのみの検出であるため、古墳時代には河道として機能していた可能性がある。

S K 1 (第8図、図版2)

[位置・重複] グリッドI-16。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はほぼ円形で、長軸47cm、短軸42cmを測る。断面形状は椀形で、深さ14cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のIXb層上面である。埋土は黒褐色の砂質土が主体で、小礫を含む。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 2 (第8図、図版2)

[位置・重複] グリッドH・I-16。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸74cm、短軸60cmを測る。断面形状は皿形で、深さ18cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のIXb層上面である。埋土は黒褐色中粒砂主体である。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 3 (第8図、図版2)

[位置・重複] グリッドI-16。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸83cm、短軸73cmを測る。断面形状は舟形で、深さ18cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のIXb層上面である。埋土は黒褐色中粒砂主体で、底部に径約8cmの礫が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物の出土は無いが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 4 (第8図、図版2)

[位置・重複] グリッドH・I-18。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸53cm、短軸47cmを測る。断面形状は舟形で、深さ9cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のIXb層上面である。埋土は黒褐色中粒砂主体である。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 5 (第8・23図、図版2・10)

[位置・重複] グリッドH-18。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で、長軸76cm、短軸62cmを測る。断面形状は皿形で、深さ14cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のIXb層上面である。埋土は褐灰色粗粒砂主体で、黒褐色細粒砂が混じる。

[出土遺物] 図示した黒曜石(12)のみである。12は石錐と考えられるが、錐部先端は欠損している。

[時期] 遺物は黒曜石のみであるが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 6 (第8・23図、図版2・10)

[位置・重複] グリッドI-17。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はほぼ円形で、長軸73cm、短軸65cmを測る。断面形状は椀形で、深さ29cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のIXb層上面である。埋土は黒褐色極細粒砂主体で、礫を含む。

[出土遺物] 図示した土師器(13)のみである。13は甲斐型坏である。

[時期] 甲斐型土器が出土しているが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 7 (第8・23図、図版2・10)

[位置・重複] グリッドH-17。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はほぼ円形で、長軸92cm、短軸83cmを測る。断面形状は皿形で、深さ18cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のⅨb層上面である。埋土は褐灰色粗粒砂主体で、小礫を含み、極暗赤褐色シルトが混じる。

[出土遺物] 図示した縄文土器（14）のみである。14は曾利Ⅱ式の長胴形深鉢か。

[時期] 縄文土器が出土しているが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

S K 8（第8図、図版2）

[位置・重複] グリッドH-18。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はほぼ円形で、長軸48cm、短軸42cmを測る。断面形状は皿形で、深さ7cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅧ層直下のⅨb層上面である。埋土は褐灰色粗粒砂主体で、小礫を含む。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から古墳時代後期と考えたい。

遺構外出土遺物（第23図、図版10）

第1遺構面の包含層に相当する堆積層のうち、1区中央付近より南側にのみ見られるⅧ層より古墳時代後期の土師器がわずかに出土したが、北側では遺物の出土は皆無である。計5点を図示した。

15～17は甕の口縁部で、15・16は外面は斜めハケ調整、内面はナデ調整である。17は外面はナデ調整、内面は横ハケ・斜めハケ調整である。18は甕の体部で、内面ナデ調整である。19は甕の底部で、内外面ともにナデ調整であり、底部には網代痕が認められる。

第2項 第2遺構面（第9・10図）

S K 9（埋甕）（第11・24・26図、巻頭図版1、図版3・11）

[位置・重複] グリッドH-11・12。NR2とNR3に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 堆積土層断面図化部分では、幅84cm、深さ69cmを測る断面U字形の掘方である。

[検出状況・埋土] 検出はⅩⅢa層直下のⅩⅤ層上面である。遺構底部は砂礫層（ⅩⅦ層）に達し、掘方内の礫は除去されている。試掘トレンチ3の深掘り部分と重複するため正確な値は計測できていないが、確認できる無礫範囲から平面形状は楕円形が想定され、南側遺構上端と北側無礫範囲端の間は1.04mを測る。埋甕は曾利Ⅱ式のX字状把手付大甕が正位で埋納され、底部に穿孔は認められない。埋甕内埋土は、上層の暗褐色細粒砂と下層の極暗赤褐色シルトに大別できる。掘方埋土は、暗褐色極細粒砂を主体とし、下層に向かうにつれ黒みを帯び、埋甕底部付近にやや大ぶりの土器片が集中する。埋甕口縁部の露出はシルト質粘土（第1層）除去後となることから、遺構全体はこの第1層によりパッキされるかたちとなる。また、埋甕下半部や口縁部は土圧による圧壊で上下方向に潰れており検出現位置では器高約60cmを測ったが、接合復元後の埋甕器高の実測値は76.5cmと遺構の深さより大きい。Ⅱ～ⅩⅢa層が堆積する過程で、土圧により遺構全体が圧縮されていると考えられる。埋甕内埋土の大部分を採取し篩による選別を行った結果、最下層にあたる第5層から凝灰岩製の小玉を検出した。当遺構は埋葬または祭祀に関わる可能性がある。

[出土遺物] 計11点を図示した。20-1は埋甕、20-2は石製小玉である。21～28は曾利式の深鉢、29は有孔鏝付土器である。

[時期] 検出層位や状況、出土遺物より縄文時代中期後半である。

S K 10（第11図、図版3）

[位置・重複] グリッドI-18・19。NR3右岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形が想定され、長軸92cm以上、短軸71cmを測る。断面形状は皿形が想定され、深さ21cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅩⅢa層直下のⅩⅤ層上面である。一部は東壁調査区外に延伸するが、ほぼ全容を検出した。埋土は小礫を含む黒褐色極細粒砂を主体とする。

[出土遺物] 縄文土器小片5点が出土したが、図示し得るものはない。

[時期] 検出層位や出土遺物より縄文時代中期と言える。

S K 11 (第 11 図、図版 3)

[位置・重複] グリッド H-13・14。NR 2 と NR 3 に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で、長軸 1.75m、短軸 1.38m を測る。断面形状は皿形で、深さ 20cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XIII a 層直下の XV 層上面である。埋土は上層では極暗褐色極細粒砂が、下層では暗褐色シルトが主体となり、径 5mm 未満の小礫を含む。

[出土遺物] 縄文土器小片 3 点が出土したが、図示し得るものはない。

[時期] 検出層位や出土遺物より縄文時代中期と言える。

S K 12 (第 11 図、図版 4)

[位置・重複] グリッド H-13。NR 2 と NR 3 に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 92cm、短軸 78cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 21cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XIII a 層直下の XV 層上面である。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 10mm 未満の礫と酸化鉄分を含む。

[出土遺物・時期] 遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 13 (第 12 図、図版 4)

[位置・重複] グリッド H-19。NR 3 右岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整円形で長軸 47cm、短軸 44cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 9cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XIII a 層直下の XV 層上面である。埋土は径 5mm 未満の小礫を含む黒褐色極細粒砂を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 14 (第 12・25 図、図版 4・12)

[位置・重複] グリッド H-19。NR 3 右岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 92cm、短軸 55cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 18cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XIII a 層直下の XV 層上面である。極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 20mm 未満の小礫を含む。また、底部に拳大の礫が複数見られる。

[出土遺物] 計 2 点を図示した。30 は曾利 II 式の深鉢、31 は縄文時代中期の土器だが型式は不明。

[時期] 検出層位や出土遺物より縄文時代中期後半である。

S K 15 (第 12 図、図版 4)

[位置・重複] グリッド I-14。NR 2 と NR 3 に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 88cm、短軸 71cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 11cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XIII a 層直下の XV 層上面である。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。また、遺構内縁には酸化鉄分を含むオリーブ褐色シルトが、底部には拳大の礫が見られる。

[出土遺物] 縄文土器 1 点が出土したが、図示し得るものではない。

[時期] 検出層位や出土遺物より縄文時代中期と言える。

S K 16 (第 12・26 図、図版 4・12)

[位置・重複] グリッド G-11・12。NR 2 と NR 3 に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形が想定され、長軸 62cm 以上、短軸 55cm を測る。断面形状は擂鉢形で、深さ 21cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XIII a 層直下の XV 層上面である。一部は西壁調査区外に延伸するが、ほぼ全容を確認した。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 10mm 未満の小礫を含む。

[出土遺物] 図示した 32 はミニチュア土器である。

[時期] 検出層位や出土遺物より縄文時代中期である。

S K 17 (第 12 図、図版 4)

[位置・重複] グリッド H-14。NR 2 と NR 3 に挟まれる微高地に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 97cm、短軸 51cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 12cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫa 層直下の XV 層上面である。埋土は極暗褐色極細粒砂を主体とし、径 20mm 未満の小礫を含む。

[出土遺物・時期] 遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 18 (第 12 図、図版 4)

[位置・重複] グリッド I・J-4・5。NR 2 左岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整形で、長軸 54cm、短軸 49cm を測る。断面形状は V 字形で、深さ 18cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫa 層直下の XV 層上面である。埋土は上層はにぶい黄褐色シルトが混じる極暗褐色シルトを主体とし、下層は黒褐色シルトが混じる黄褐色シルトを主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 19 (第 12 図、図版 4)

[位置・重複] グリッド I-4。NR 2 左岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で、長軸 52cm、短軸 49cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 13cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫa 層直下の XV 層上面である。埋土はにぶい黄褐色シルトを主体とし、酸化鉄分をわずかに含む。

[出土遺物・時期] 遺物の出土は無いが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 20 (第 12 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド H-5。NR 2 左岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 1.15m、短軸 95cm を測る。断面形状はおおむね皿形だが一部が窪み、深さ 16cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫa 層直下の XV 層上面である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。また窪みには拳大の礫が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 21 (第 12 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド I-5。NR 2 左岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で長軸 1.27m、短軸 1.21m を測る。断面形状はおおむね皿形だが中央がやや窪み、深さ 18cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫa 層直下の XV 層上面である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S K 22 (第 12 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド K-5・6。NR 2 左岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 1.27m、短軸 1.11m を測る。断面形状は皿形で、深さ 15cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫa 層直下の XV 層上面である。黒褐色シルトを主体とし、上層にはにぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。また径 10cm～20cm の礫が複数見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

S P 1 (第 12 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド J-5。NR 2 左岸に位置する。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整形で、長軸 27cm、短軸 24cm を測る。断面形状は V 字形で、深さ 17cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅩⅢa層直下のⅩⅤ層上面である。埋土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代中期と考えたい。

NR 2 (第4・10・26・27 図、図版5・12・13)

[位置・重複] グリッドG～J－8～13。

[形状・規模] N－60°－Wを主軸とする河道で、最大幅8.2mを測る。深さは1.1m以上を測るが、河床は未確認である。

[検出状況・埋土] 検出はⅩⅢa層直下で、調査区を斜めに横断する。河道は拳～人胴大の礫を多量に含む黒褐色の粘土と粗粒砂の混合土により埋没する。

[出土遺物] 計21点(33～53)を図示した。33は縄文時代前期後半の諸磯式の深鉢である。34～47は縄文時代中期後半の深鉢で、46・47の底部には網代痕が認められる。48は台付土器、49は両耳壺である。50は打製石斧、51は打製石斧の破片、52・53は磨+敲石である。

[時期] 出土遺物の主体は縄文時代中期後半の曾利式だが、前期後半の諸磯式が出土しているためNR 3より一段階古い可能性がある。

NR 3 (第4・10・28～30 図、図版5・13～15)

[位置・重複] グリッドG～I－15～18。

[形状・規模] N－77°－Wを主軸とする河道で、最大幅7.9mを測る。深さは1.2m以上を測るが、河床は未確認である。

[検出状況・埋土] 検出はⅩⅢa層直下で、調査区を横断する。河道はⅩⅤ層により埋没する。

[出土遺物] 計40点(54～93)を図示した。54は縄文時代後期前葉の堀之内2式古段階の朝顔形深鉢である。55～89は縄文時代中期後半の土器でこのうち55～85は深鉢、86は浅鉢、87～89はX字状の把手、90～93は打製石斧である。

[時期] 出土遺物の主体は縄文時代中期後半の曾利式だが、後期前葉の堀之内式が出土しているためNR 2より一段階新しい可能性がある。

遺構外出土遺物 (第13 図、図版15・16)

第2遺構面の包含層から出土した遺物は縄文時代中期後半の曾利Ⅱ～Ⅲ式が主体で、計28点(94～121)を図示した。94～98は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式の深鉢である。99～117は縄文時代中期後半の土器でこのうち99～115は深鉢、116は浅鉢、117は鉢である。118は縄文時代晩期の氷Ⅰ式の塚か。119は打製石斧、120は磨製石斧、121は黒曜石製の剥片石器である。

第2節 2区の調査

事業地南西側に所在する2区では、遺構として集石遺構3基、土坑12基、溝6条を検出するとともに河道1条を確認した。

第1遺構面では集石遺構3基、土坑2基、溝5条を検出した。遺構検出面は北から南への傾斜と、西から東への傾斜が合わさる調査区中央付近が最も標高が低くなる。このうち西から東への傾斜はグリッドE・F-41付近で一時的に強くなる。溝跡は2区中央付近の低地のみでの検出である。遺物は土師器が主体であるが、須恵器も出土している。須恵器の出土は1区との明確な相違点である。

第2遺構面では、土坑10基と溝1条を検出した。地形の傾斜は第1遺構面と同様の傾向であり、土坑は西側の高地からの検出である。溝跡は中央の低地での検出で、砂質土により埋没した河道を掘り込み構築される。遺物は土師器が主体で、わずかに縄文土器も出土している。

第1項 第1遺構面（第13・14図）

S S 1（第15・33図、図版6・16）

〔位置・重複〕グリッドC-42～E-40。重複する遺構はない。

〔形状・規模〕拳大～人頭大の礫から成る長さ5.62mの石列状の礫群を、長さ9.38m以上、幅91cm以上を測る溝状の掘り込みの立ち上がりに沿って検出した。溝の断面形状は緩やかなV字形ないしU字形が想定され、深さ63cm以上を測る。

〔検出状況・埋土〕検出はⅢ層直下のⅫ層上面である。底部が確認できないことから、溝状の遺構主体部は調査区外に所在し、礫群も同様に延伸すると考えられる。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とし、極暗赤褐色シルトが混じるが、確認できた最下層部付近は粘性が強い。溝状の掘り込みに流水の形跡が見られず、礫の並びがやや弧を描くことから、周溝のような単体で完結する溝の可能性はある。

〔出土遺物〕土師器2点（122・123）、須恵器4点（124～127）の計6点を図示した。122は蓋環の身、123は高環である。124～126は甕で、127は壺または甗か。

〔時期〕検出層位や出土遺物より古墳時代後期である。

S S 2（第15図、図版6）

〔位置・重複〕グリッドE～G-41・42。S K 1に先行する。

〔形状・規模〕拳大～人頭大の礫から成る長さ1.78mの石列で、N-77°-Wを主軸とする。掘方の平面形状は楕円に近い不整形の溝状で、長さ3.69m以上、幅2.23mを測る。断面形状は皿形で、深さ21cmを測り、石列は遺構の南側立ち上がりに沿う。

〔検出状況・埋土〕検出はⅪ層直下Ⅻ層上面である。南東壁調査区外に延伸する。埋土は暗褐色シルト・褐灰色シルト・黒褐色シルトがマール状に堆積する。

〔出土遺物〕土師器小片が1点出土したが、図化し得るものではない。

〔時期〕検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたい。

S S 3（第15・33図、図版6・16）

〔位置・重複〕グリッドF-40・41。S D 1に後続する。

〔形状・規模〕長さ1.41m、幅82cm、深さ5cmを測る窪地に拳大～人頭大の礫が、やや帯状に集中する。

〔検出状況・埋土〕検出はⅪ層直下のⅫ層上面である。窪地部分の埋土は褐灰色粗粒砂である。

〔出土遺物〕土師器1点（128）、須恵器2点（129・130）、灰釉陶器1点（131）の計4点を図示した。128～130は甕、131はロクロ成型の埴である。

〔時期〕検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたいが、灰釉陶器が出土しているため平安時代の可能性もある。

S K 1 (第 15 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド F-41・42。S S 2 に後続する。

[形状・規模] 平面形状は不整円形で、長軸 1.02m、短軸 93cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 20cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は XI 層直下の S S 2 埋土上面である。埋土は暗褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位と S S 2 との先後関係より古墳時代後期以降と言え、S S 3 と同時期の可能性もある。

S K 2 (第 16 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド H-41。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で、長軸 57cm、短軸 42cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 6cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は X b 層直下の XII 層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物] 土師器細片 1 点が出土したが、図化し得るものではない。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたい。

S K 3 (欠番)

S D 1 (第 16 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド E-40～G-41。S S 3 に先行し、S D 2・5 に後続する。

[形状・規模] N-70°-W を主軸とする溝跡で、長さ 5.8m 以上、南東壁付近で最大幅 40cm を測る。断面形状は楕円形で、深さ 16cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は X b 層直下の XII 層上面である。両端が調査区外に延伸し、グリッド F-40 とグリッド G-41 の 2 か所で屈曲する。埋土は中粒砂の混じる暗褐色シルト質粘土を主体とし、最下層は黒褐色シルト質粘土である。

[出土遺物] 土師器 9 点と須恵器 1 点が出土したが、いずれも細片で図化し得るものはない。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代後期と考えたい。

S D 2 (第 16・33 図、図版 7・17)

[位置・重複] グリッド F-40～I-40。S D 1 に先行し、S D 3 に後続する。

[形状・規模] N-73°-W を主軸とする溝跡で、長さ 9m 以上、S D 3 との交差部付近で最大幅 74cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 10cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は X b 層直下の XII 層上面である。両端が調査区外に延伸する。グリッド H-41 で北へ 30° 進路を変える。埋土はにぶい黄褐色中粒砂を主体とし、暗褐色シルト粘土が混じる。

[出土遺物] 土師器 2 点 (132・133)、須恵器 1 点 (134) の計 3 点を図示した。132 は台付甕の脚台部。133 は直口壺で外面にミガキが施される。134 は甕で内面は扇状の当具痕、外面は格子目のタタキ目である。

[時期] 台付甕が出土しているが、検出層位や須恵器より古墳時代後期と考えられる。

S D 3 (第 16 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド G-39～H-40。S D 2 に先行する。

[形状・規模] N-65°-W を主軸とする溝跡で、長さ 6.5m 以上、中央付近で最大幅 48cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 6cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出は X b 層直下の XII 層上面で、両端が調査区外に延伸する。埋土はにぶい黄褐色中粒砂を主体とし、底部には黒褐色シルト質粘土が堆積する。

[出土遺物] 土師器微細片 5 点が出土したが、図化し得るものはない。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代後期である。

S D 4 (第 16・34 図、図版 7・17)

[位置・重複] グリッド G-39～I-40。S D 2 に先行する。

[形状・規模] N-68°-Wを主軸とする溝跡で、長さ8.7m以上、南東壁付近で最大幅1.22mを測る。断面形状は皿形で、深さ13cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はXb層直下のXII層上面で、両端が調査区外に延伸する。埋土は中粒砂の混じる暗褐色シルト質粘土を主体とし、最下層は黒褐色シルト質粘土である。

[出土遺物] 土師器1点(135)、須恵器2点(136・137)の計3点を図示した。135は甕、136は蓋環の蓋、137は甕である。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代後期である。

S D 5 (第16・34図、図版7・17)

[位置・重複] グリッドF-40~H-41。S D 1に先行する。

[形状・規模] N-67°-Wを主軸とする溝跡で、長さ5m以上、南東壁付近で最大幅63cmを測る。断面形状は皿形で、深さ6cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はXb層直下のXII層上面で、南東調査区外へ延伸する。埋土はにぶい黄褐色極粗粒砂を主体とし、下層は褐灰色の粗粒砂・シルトが堆積する。

[出土遺物] 土師器1点(138)、須恵器2点(139・140)を図示した。138はS字状口縁台付甕(以下S字甕)D類、139は坏、140は須恵器甕である。

[時期] S字甕が出土しているが、検出層位やS D 1との先後関係、須恵器より古墳時代後期と考えられる。

遺構外出土遺物 (第34~36図、図版17・18)

第1遺構面の包含層から出土した遺物のうち縄文土器1点、土師器32点(142~173)、須恵器6点(174~179)の計39点を図示した。141は縄文時代後期前葉の堀之内2式の深鉢である。142は埴または鉢、143は小型丸底鉢、144は器台である。145~152は高坏で、このうち148~150には脚部の透孔が認められる。153~165はS字甕で、166は甕、167~170は壺、171は小壺、172・173は手捏ね土器の小壺である。174~178は甕、179は壺である。

東側に見られる包含層Xa・Xb層からの出土遺物は、古墳時代中期から後期の土師器・須恵器であるため遺構の検出層位と整合性がある。しかしながら、西側にのみ見られるXI層はS字甕や須恵器といった古墳時代前期から後期にかけての多様な遺物が出土し、遺構出土遺物より包含層出土遺物のほうがより古いという逆転現象が起こっている。サブトレンチ4・5により土層を観察した結果、このXI層は版築を行いながら盛り上げた人為的な層の可能性が考えられる。

第2項 第2遺構面 (第17図)

S K 4 (第18図、図版8)

[位置・重複] グリッドC-42・43。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はほぼ円形で、長軸41cm、短軸39cmを測る。断面形状は皿形で、深さ7cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はXII層直下のXIIIb層上面である。埋土は暗褐色シルト質粘土が主体で、明赤褐色シルトが混じる。

[出土遺物] 土師器細片1点が出土したが、図示し得るものではない。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期と考えたい。

S K 5 (第18図、図版8)

[位置・重複] グリッドE-42。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はほぼ円形で、長軸37cm、短軸33cmを測る。断面形状はV字形で、深さ14cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はXII層直下のXIIIb層上面である。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 6 (第 18 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド E - 42。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で、長軸 63cm、短軸 47cm を測る。断面形状は漏斗形で、深さ 28cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。埋土上層は明赤褐色極細粒砂、下層は黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 7 (第 18 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド E - 41。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形と想定され、短軸 57cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 19cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。サブトレンチ 2 と重複したため正確な値は計測できていないが、長軸は 68cm 程度と想定される。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とするが下層へ向け徐々に赤みを増し、最下層では極暗赤褐色となる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 8 (第 18 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド E - 41。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 73cm、短軸 45cm を測る。断面形状は椀形で、深さ 24cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体だが、下層に褐色極細粒砂が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 9 (第 18 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド D - 43。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸 59cm、短軸 47cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 14cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体で、極暗赤褐色シルトが斑に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 10 (第 18 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド D - 42。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 65cm、短軸 49cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 11cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。遺構中心に長さ約 40cm の礫が直立するが性格は不明。埋土は黒褐色シルト質粘土で、極暗赤褐色シルトが斑に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 11 (第 18 図、図版 9)

[位置・重複] グリッド D - 42。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 72cm、短軸 55cm を測る。断面形状は皿形で、深さ 11cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。埋土は暗赤褐色シルト質粘土主体で、極暗赤褐色シルトが斑に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 12 (第 18 図、図版 9)

[位置・重複] グリッド E - 42。S K 13 に先行する。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸 47cm、短軸 40cm を測る。断面形状は椀形で、深さ 13cm を測る。

[検出状況・埋土] 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体で、にぶい黄褐色シルト質粘土が斑に混じる。切合いのある S K 13 と似た埋土だが、混入するにぶい黄褐色シルト質粘

土の割合が少ない。

〔出土遺物・時期〕 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S K 13 (第 18 図、図版 9)

〔位置・重複〕 グリッド D・E - 43。S K 12 に後続する。

〔形状・規模〕 平面形状は楕円形で長軸 60cm、短軸 45cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 10cmを測る。

〔検出状況・埋土〕 検出はⅫ層直下のⅫb層上面である。埋土は黒褐色シルト質粘土主体で、にぶい黄褐色シルト質粘土が斑に混じる。切合いのある S K 12 と似た埋土だが、混入するにぶい黄褐色シルト質粘土の割合が多い。

〔出土遺物・時期〕 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期と考えたい。

S D 6 (第 4・19～21・36 図、巻頭図版 2、図版 9・18)

〔位置・重複〕 グリッド F～I - 38～41。重複する遺構はない。

〔形状・規模〕 下層部と上層部の 2 段階に分けられる。第 1 段階（下層部）は N - 72° - W を主軸とする直線的な溝跡で、長さ 9m 以上、最大幅 6.7m を測る。断面形状は皿形で、深さ 78cm を測る。第 2 段階（上層部）は南側調査区外を中心にやや弧を描く溝跡で、長さ 9m 以上、最大幅 5.4m を測る。断面形状は皿形で、深さ 63cm を測る。

〔検出状況・埋土〕 検出はⅫ層直下のⅫb層上面であり、両端が調査区外に延伸する。

第 1 段階の埋土は小礫と酸化鉄分を含む暗赤褐色極細粒砂が主体で、底部では黒みを帯び極暗褐色となる。砂質土主体で小礫や酸化鉄分を有することから、流水を伴う河道的性格であったと考えられる。

第 2 段階は砂質土により埋没した第 1 段階の溝を掘り込むもので、埋土上層は黒褐色シルト質粘土、下層は黒色粘土を主体とする。また、拳大～人頭大の礫から成る石列状の礫群が弧を描く溝内径側立ち上がりに沿う。下層の黒褐色粘土は有機性の堆積で流水の形跡が認められないことから、周溝のような単体で完結する溝と考えられる。

〔出土遺物〕 遺構規模に対して遺物出土量は極めて少ない。また、大半は第 1 段階埋土の極細粒砂層から出土で、第 2 段階の粘質土層からは須恵器 1 点と土師器細片が数点出土している。縄文土器 1 点 (180)、土師器 5 点 (181～185)、須恵器 1 点 (186) の計 7 点を図示した。180 は縄文時代中期後半の曾利Ⅲ式の深鉢である。181・182 は高坏の脚で、182 には透孔が認められる。183 は台付甕で、口縁部に刻みが施される。184 は甕、185 は有段口縁壺、186 は須恵器の甕である。

〔時期〕 検出層位や出土遺物より、第 1 段階（河道）部は古墳時代前期頃までに埋没し、その後古墳時代後期に第 2 段階部を新たに構築したと推定している。

遺構外出土遺物 (第 36・37 図、図版 18・19)

第 2 遺構面の包含層の遺物密度は極めて低い。縄文土器 1 点 (187)、土師器 8 点 (188～195) の計 9 点を図示した。187 は曾利Ⅲ式の深鉢、188 は S 字甕、189 は台付甕、190～194 は甕、195 は壺である。

サブトレンチ 3 (第 13 図、図版 19)

地山の確認ため南東壁沿いに設定したトレンチで、縄文土器 1 点 (196)、土師器 3 点 (197～199) の計 4 点を図示した。196 は曾利Ⅲ～Ⅳ式の深鉢、197 は小型丸底鉢、198 は台付甕、199 は甕である。

サブトレンチ 4 (第 21・37 図、図版 7・19)

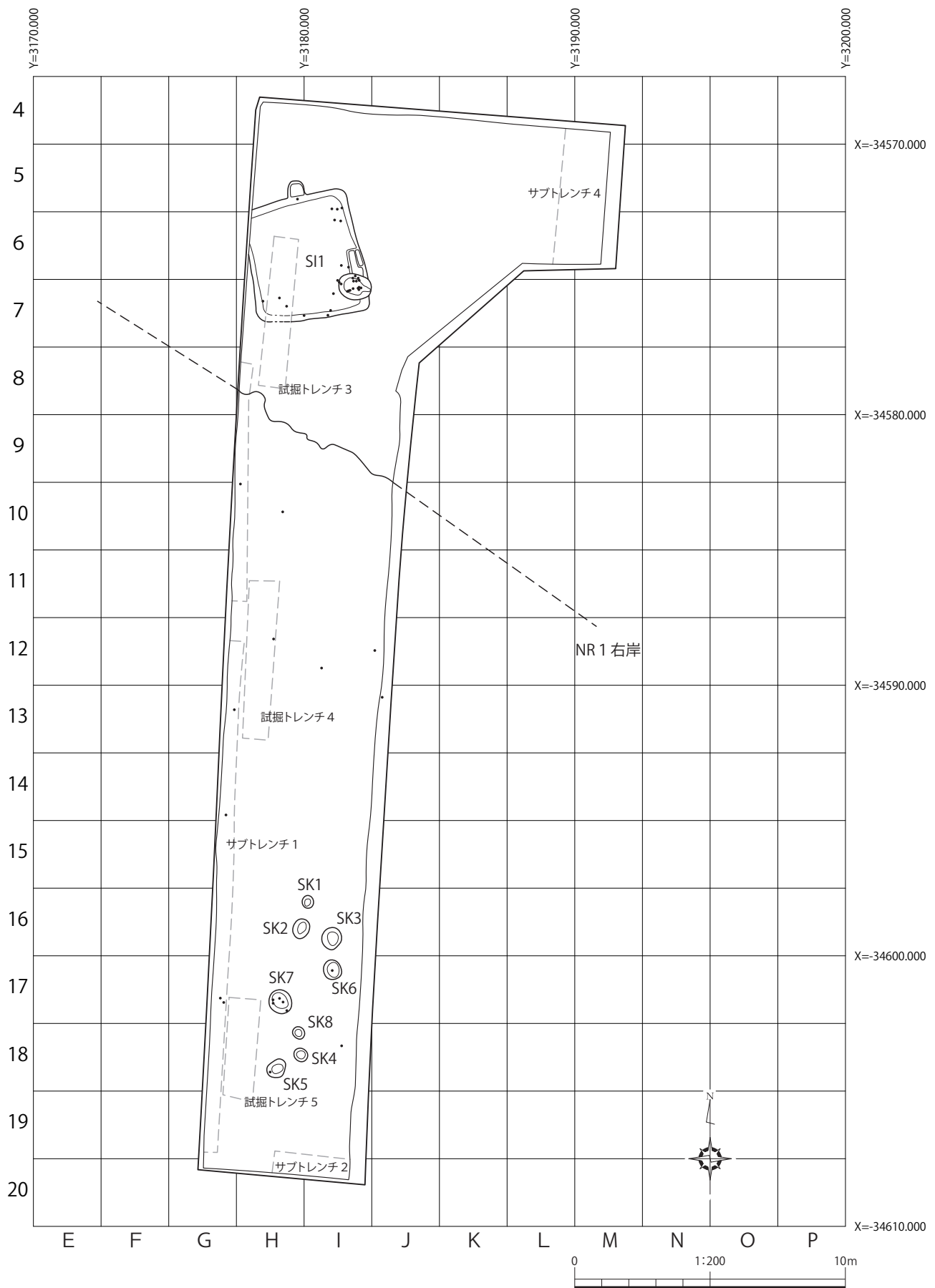
〔位置〕 グリッド E・F - 41。幅約 50cm で N - 61° - W を軸に長さ約 2.2m で設定した。

〔出土遺物〕 図示した 200 は手捏ねの小壺である。

サブトレンチ 5 (第 21・37 図、図版 7・19)

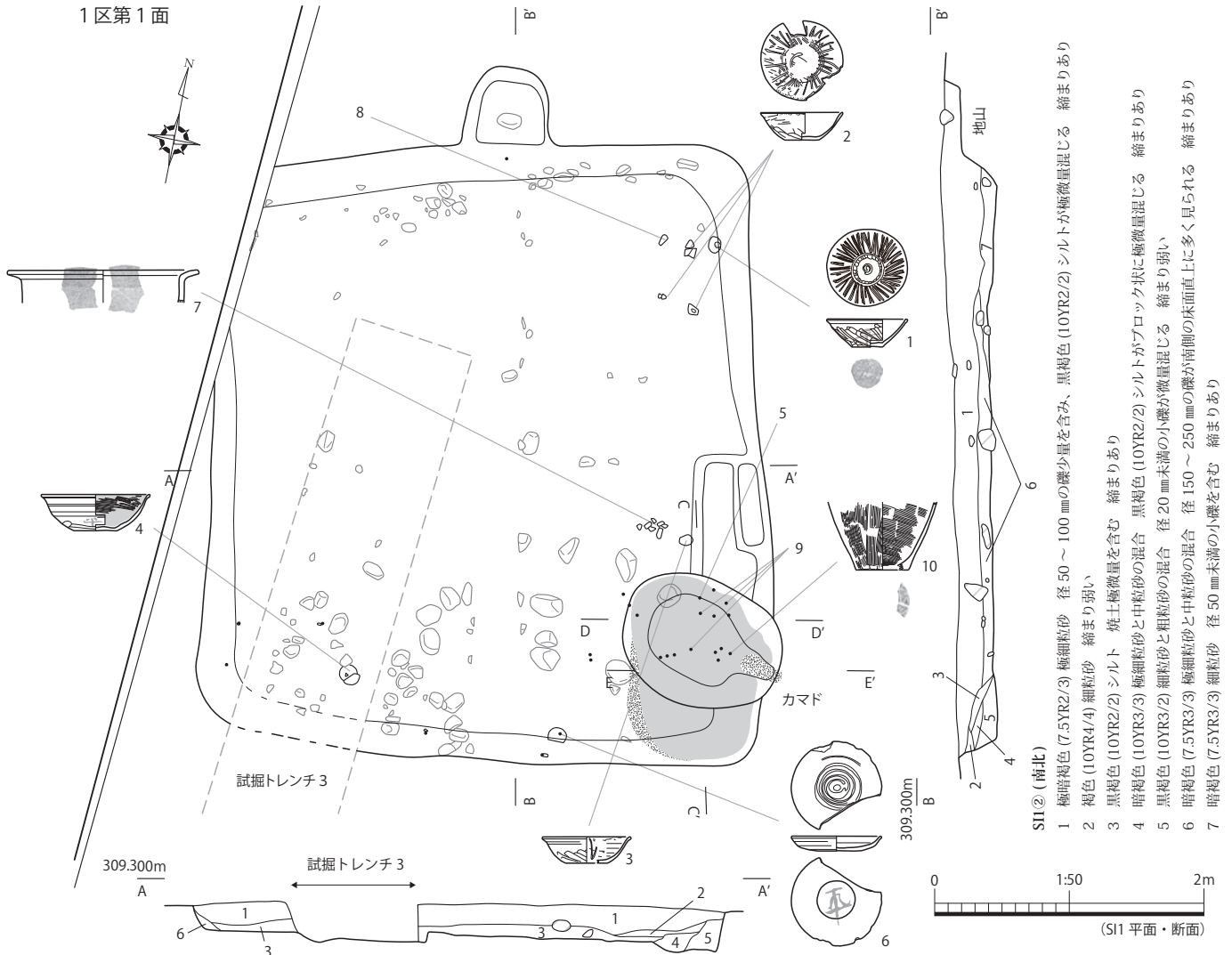
〔位置〕 グリッド D～F - 41～43。幅約 50cm で N - 37° - W を軸に長さ約 4.3m、N - 52° - E を軸に長さ約 5.7m の 2 本のトレンチを交差させる様に設定した。

〔出土遺物〕 土師器 2 点 (201・202) を図示した。201 は S 字甕 B 類、202 は壺である。



第6図 1区第1遺構面全体図

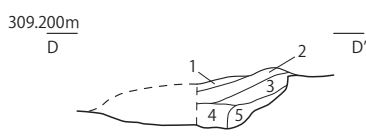
1区第1面



- SI1② (南北)
- 1 極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂 径 50 ~ 100 mmの礫少量を含み、黒褐色 (10YR2/2) シルトが極微量混じる 締まりあり
 - 2 褐色 (10YR2/2) シルト 焼土極微量を含む 締まりあり
 - 3 黒褐色 (10YR4/4) 細粒砂 締まり弱い
 - 4 黒褐色 (10YR3/3) 極細粒砂と中粒砂の混合 シルトがブロック状に極微量混じる 締まりあり
 - 5 暗褐色 (10YR3/2) 細粒砂と粗粒砂の混合 径 20 mm未満の礫が微量混じる 締まり弱い
 - 6 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂と中粒砂の混合 径 150 ~ 250 mmの礫が南側の床面直上に多く見られる 締まりあり
 - 7 暗褐色 (7.5YR3/3) 細粒砂 径 50 mm未満の礫を含む 締まりあり

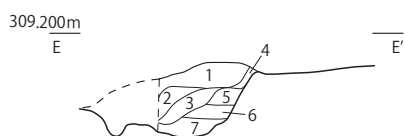
SI1① (東西)

- 1 極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂 径 50 ~ 100 mmの礫少量を含み、黒褐色 (10YR2/2) シルトが極微量混じる 締まりあり
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト 焼土極微量を含む 締まりあり
- 3 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂と中粒砂の混合 径 150 ~ 250 mmの礫が南側の床面直上に多く見られる 締まりあり
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂と中粒砂の混合
- 5 黒褐色 (10YR2/2) シルトがブロック状に極微量混じる 締まりあり
- 6 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂と中粒砂の混合 炭化物極微量を含む
暗褐色 (10YR3/4) シルトが混じる 締まりあり



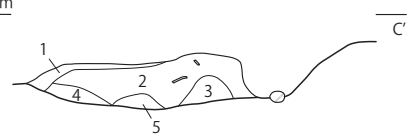
SI1 カマド (東西①)

- 1 黒褐色 (10Y3/2) 極細粒砂
焼土・炭化物極微量を含む 締まりあり
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
焼土多量・炭化物微量を含む 締まりあり
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
焼土少量・炭化物極微量を含む
- 4 極暗赤褐色 (5YR2/3) シルト質粘土
焼土多量を含む 締まり弱い
- 5 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト質粘土
焼土多量を含む 締まりあり



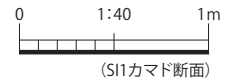
SI1 カマド (東西②)

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
焼土多量・炭化物微量を含む 締まりあり
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土
焼土少量・炭化物極多量を含む 締まりあり
- 3 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト質粘土 焼土多量・炭化物極微量を含む 締まりあり
- 4 黒褐色 (7.5YR3/1) 極細粒砂 炭化物多量を含む 締まりあり [煙道]
- 5 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 焼土・炭化物極微量を含む 締まりあり
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 炭化物極微量を含む 締まりあり
- 7 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 炭化物極微量を含み、
にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土が斑に混じる 締まりあり



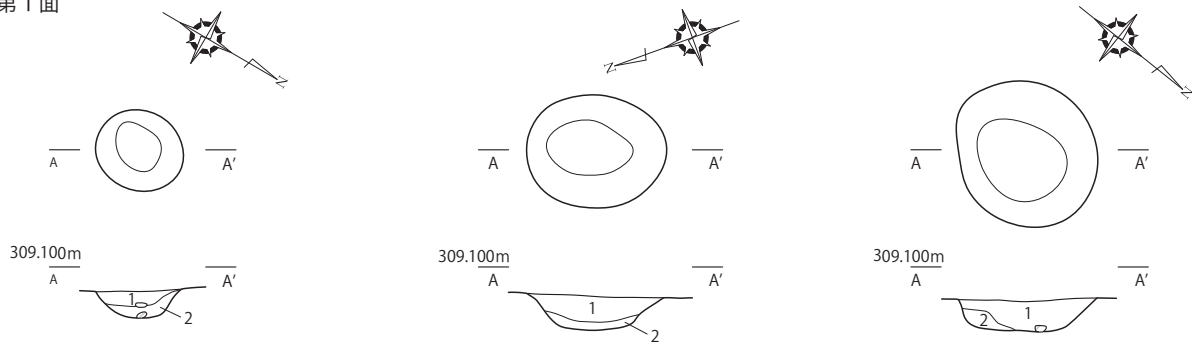
SI1 カマド (南北)

- 1 黒褐色 (10Y3/2) 極細粒砂
焼土・炭化物極微量を含む 締まりあり
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
焼土多量・炭化物微量を含む 締まりあり
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土
炭化物極多量・焼土少量を含む 締まりあり
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
炭化物極微量を含む 締まりあり
- 5 極暗赤褐色 (5YR2/3) シルト質粘土
焼土多量を含む 締まり弱い



第7図 1区遺構図(1) SI1

1区第1面



SK1

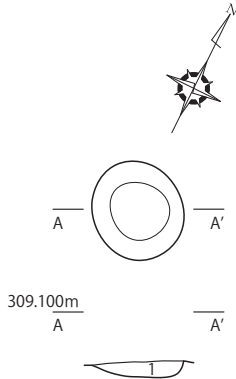
- 1 黒褐色 (5YR3/1) 中粒砂
径 8 mm 未満の小礫少量を含み、
褐灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂が少量混じる
縮まりあり
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 極細粒砂
褐灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂が極微量混じる
縮まりあり

SK2

- 1 黒褐色 (5YR3/1) 中粒砂
褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂が多量混じる
縮まりあり
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 極細粒砂 縮まりあり

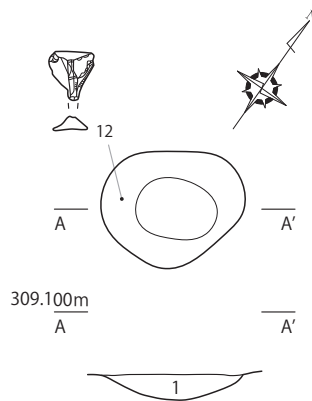
SK3

- 1 黒褐色 (5YR3/1) 中粒砂
径 15 mm 未満の小礫多量を含む
縮まりあり
- 2 黒褐色 (10YR2/2) 極細粒砂
炭化物極微量を含む 縮まりあり



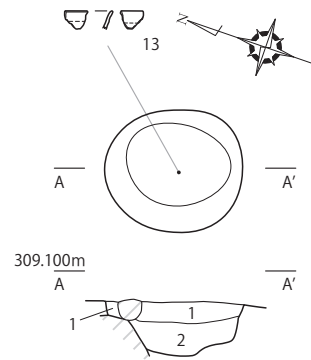
SK4

- 1 黒褐色 (5YR3/1) 中粒砂 縮まりあり



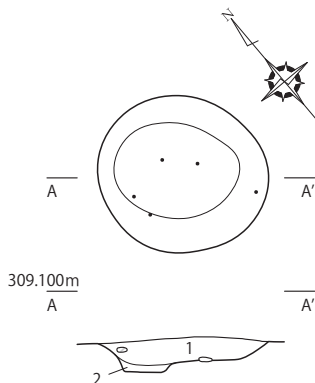
SK5

- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂
黒褐色 (5YR3/1) 細粒砂が多量混じる
縮まりあり



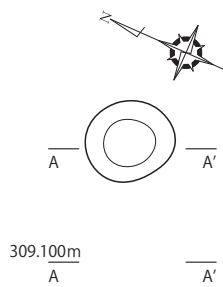
SK6

- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂
径 10 mm 未満の小礫が微量を含み、
黒褐色 (5YR3/1) 細粒砂が混じる 縮まりあり
- 2 黒褐色 (5YR3/1) 極細粒砂
径 100 ~ 200 mm の礫多量を含む
縮まりあり



SK7

- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂
径 100 mm 未満の礫極微量を含み、
極暗赤褐色 (5YR2/4) シルト多量が混じる 縮まりあり
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/4) 極細粒砂 縮まりあり

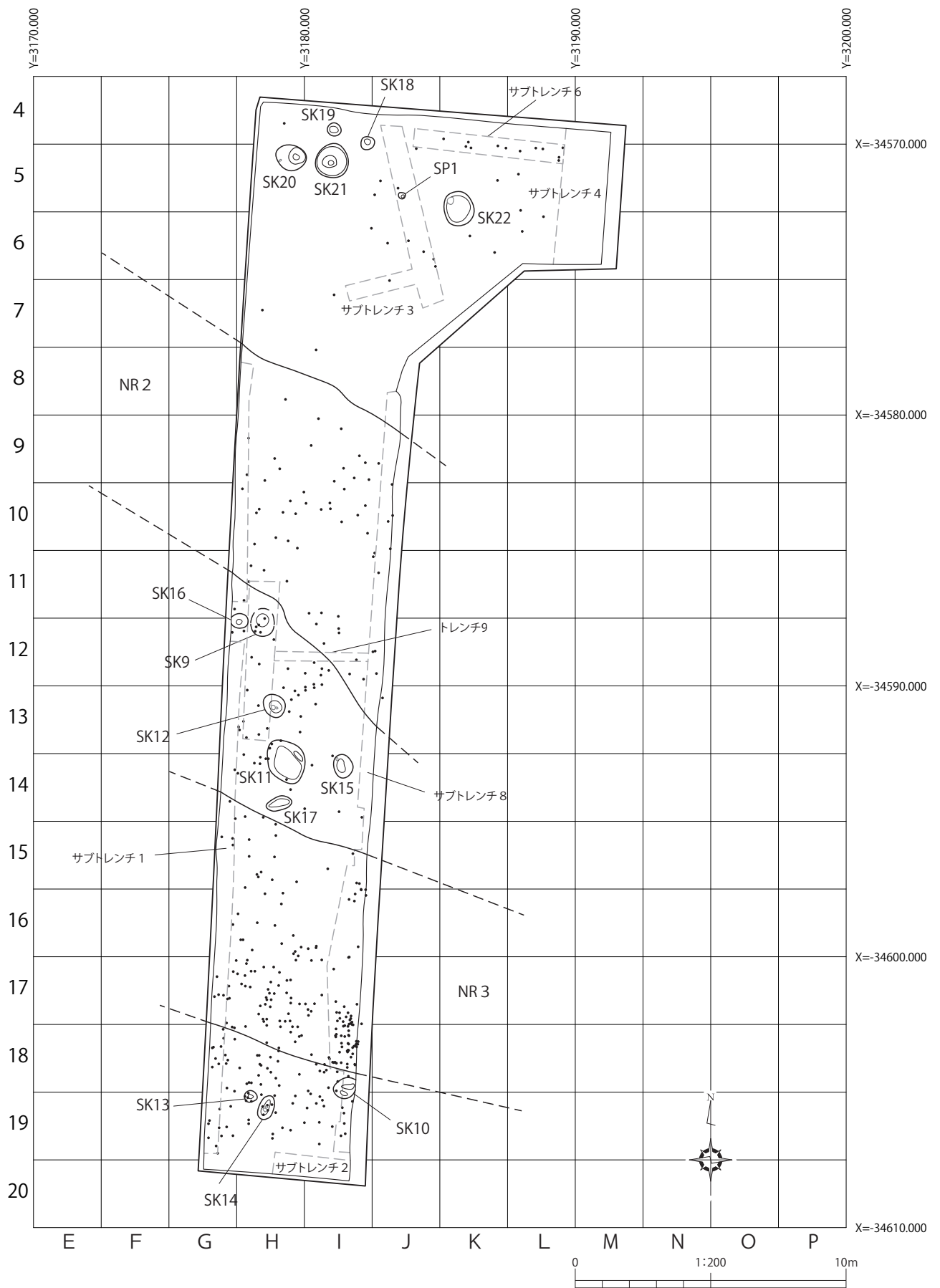


SK8

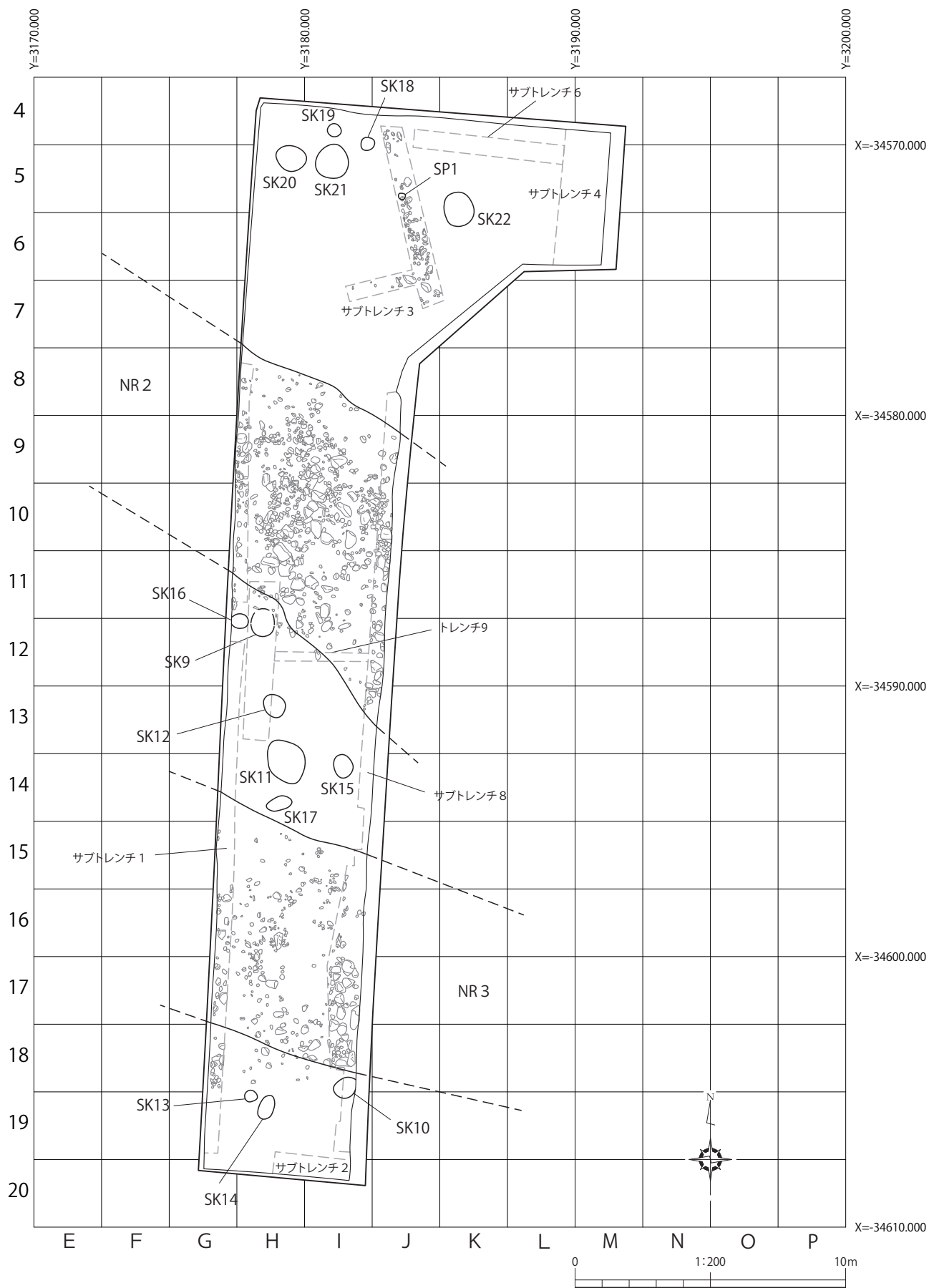
- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂
径 10 mm 未満の小礫多量を含む 縮まりあり



第8図 1区遺構図(2)SK1~8

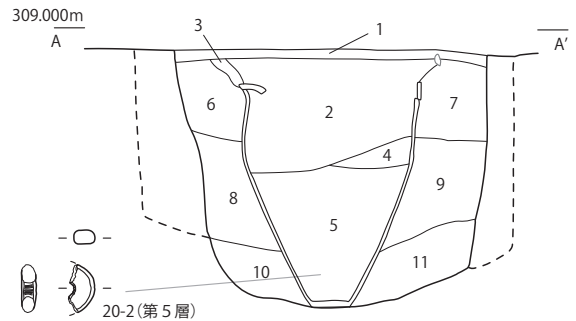
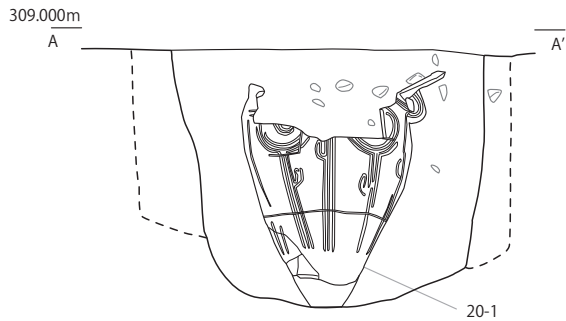
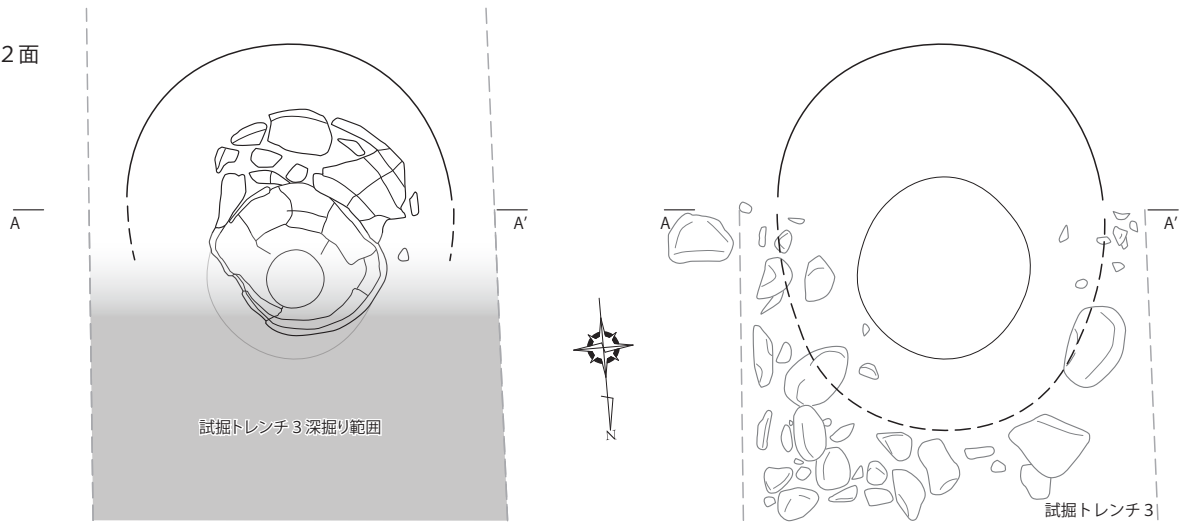


第9図 1区第2遺構面全体図(1)遺構・遺物



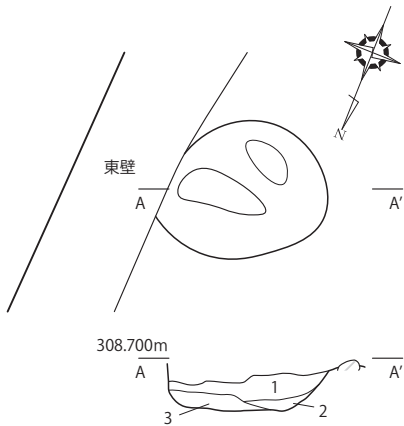
第10図 1区第2遺構面全体図(2) 礫・河道

1区第2面



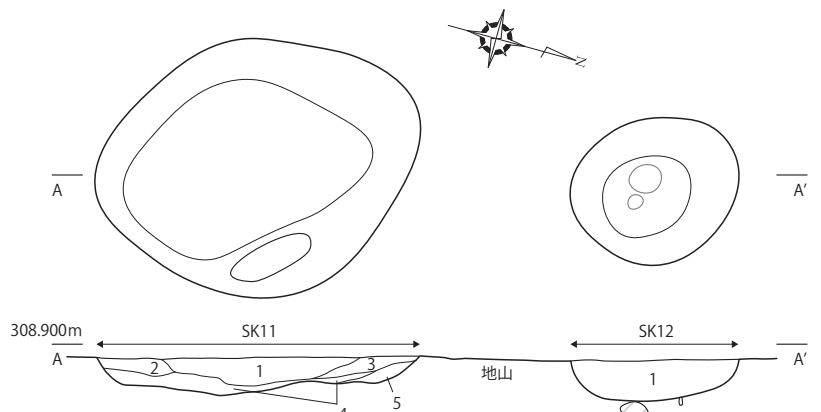
SK9(埋喪)

- 1 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト質粘土 褐色 (10YR4/6) 粘土ブロック極微量を含み、暗褐色 (10YR3/4) シルトと黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土が斑に混じる 縮まりあり
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 径 15 mm 未満の小礫少量・径 40 ~ 60 mm の礫微量・炭化物極微量を含む 縮まりあり
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 径 5 mm 未満の小礫極微量を含み、黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土が多量混じる 縮まりあり
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 縮まり弱い
- 5 極暗赤褐色 (2.5YR2/2) シルト質粘土 径 20 ~ 40 mm の礫微量・土器片少量・褐色 (10YR4/6) 粘土ブロック極微量を含む
- 6 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 径 5 mm 未満の小礫を含む 縮まりあり
- 7 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 径 30 ~ 50 mm の礫極微量を含む
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂 径 10 mm 未満の小礫極微量を含む 縮まりあり
- 9 8 層と同じ
- 10 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂 径 10 ~ 20 mm の礫微量・土器片少量を含む 縮まりあり
- 11 10 層と同じ



SK10

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) 極細粒砂 径 20 mm の小礫微量を含む
- 2 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト 縮まりあり
- 3 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルトが斑に混じる 縮まりあり



SK11

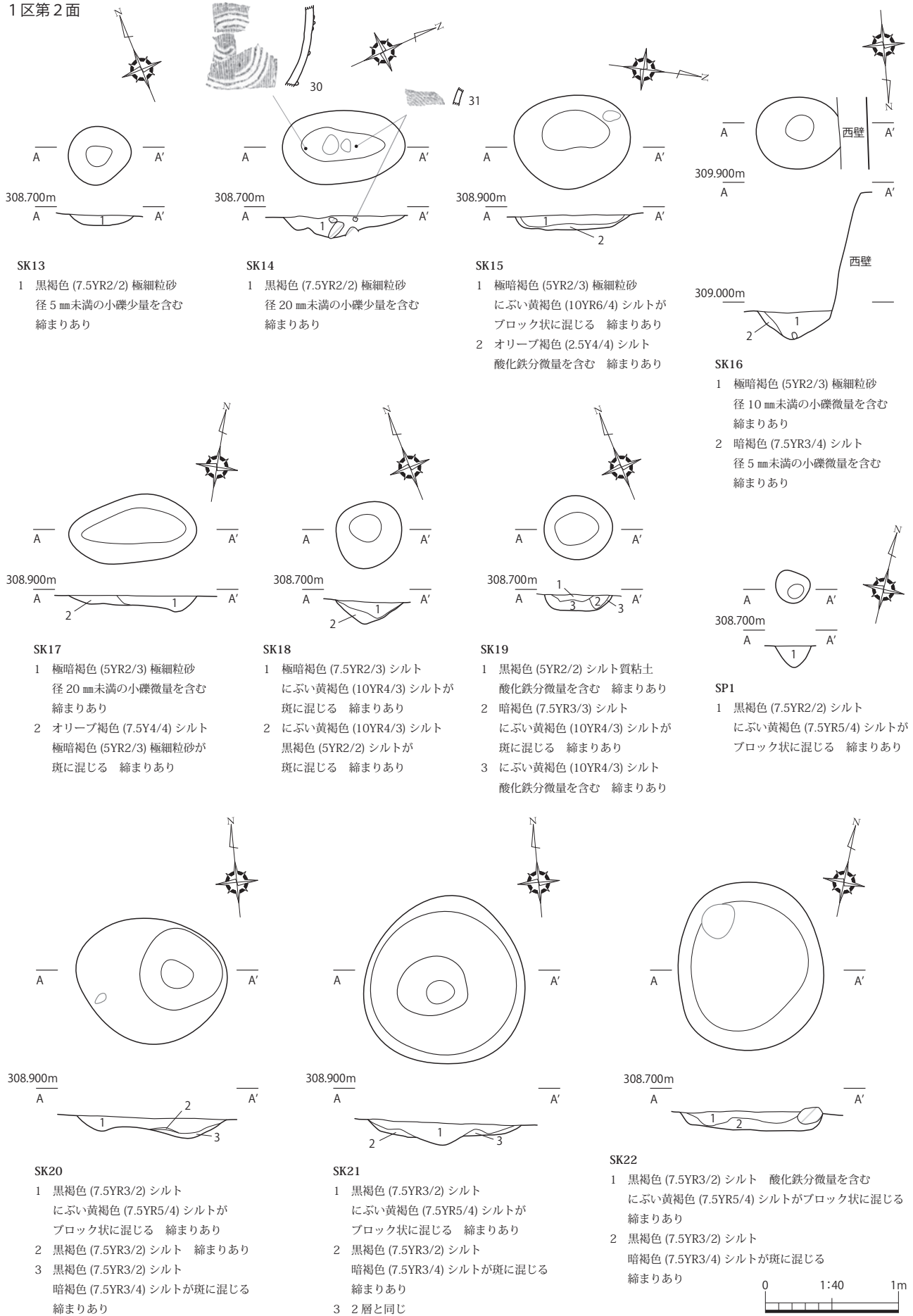
- 1 極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂 径 5 mm 未満の小礫微量を含む 縮まりあり
- 2 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト 縮まりあり
- 3 2 層と同じ
- 4 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト 極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり
- 5 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト 径 5 mm 未満の小礫微量を含む 縮まりあり

SK12

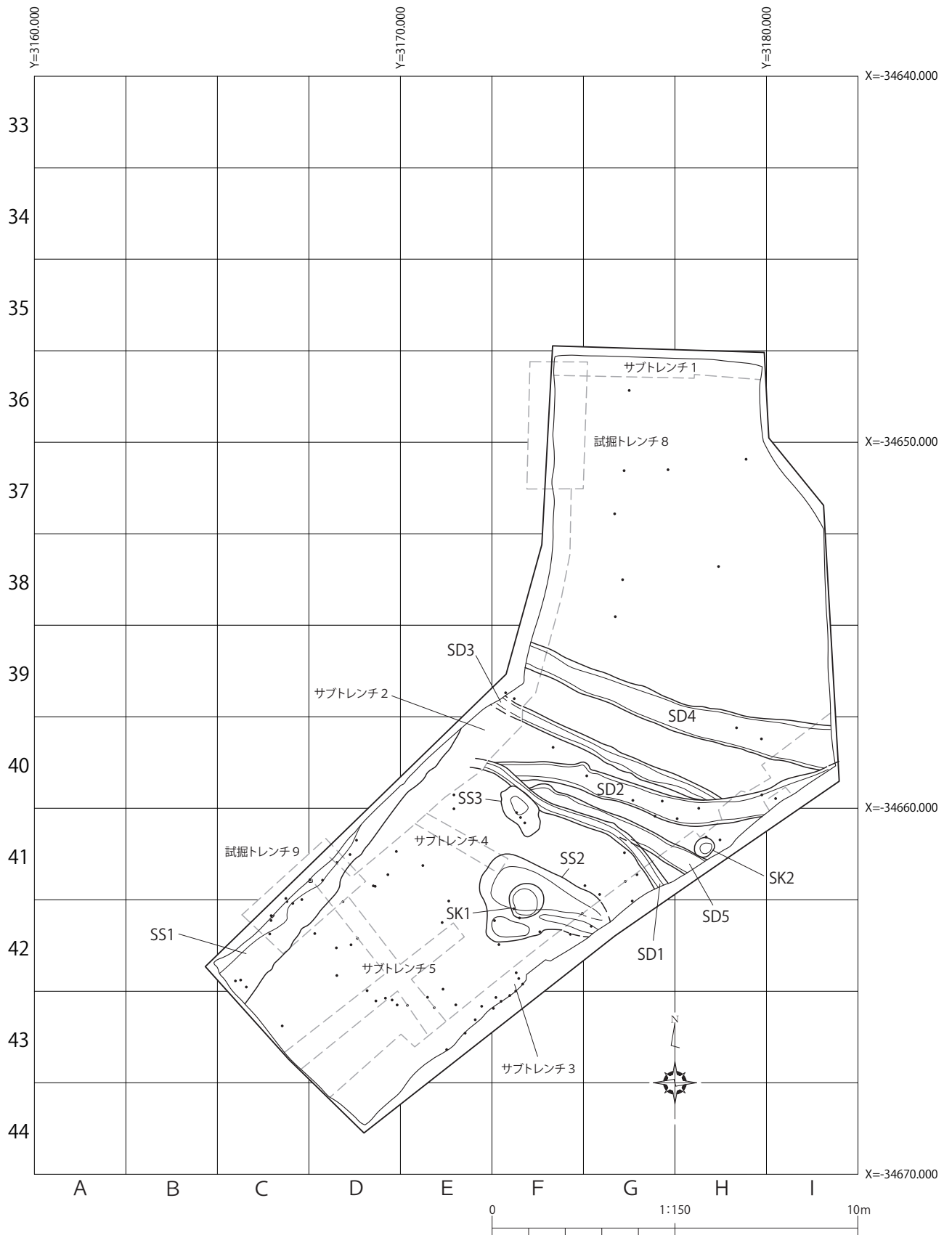
- 1 極暗褐色 (5YR2/3) 極細粒砂 径 10 mm 未満の小礫少量・酸化鉄分微量を含む 縮まりあり

第11図 1区遺構図(3) SK 9~12

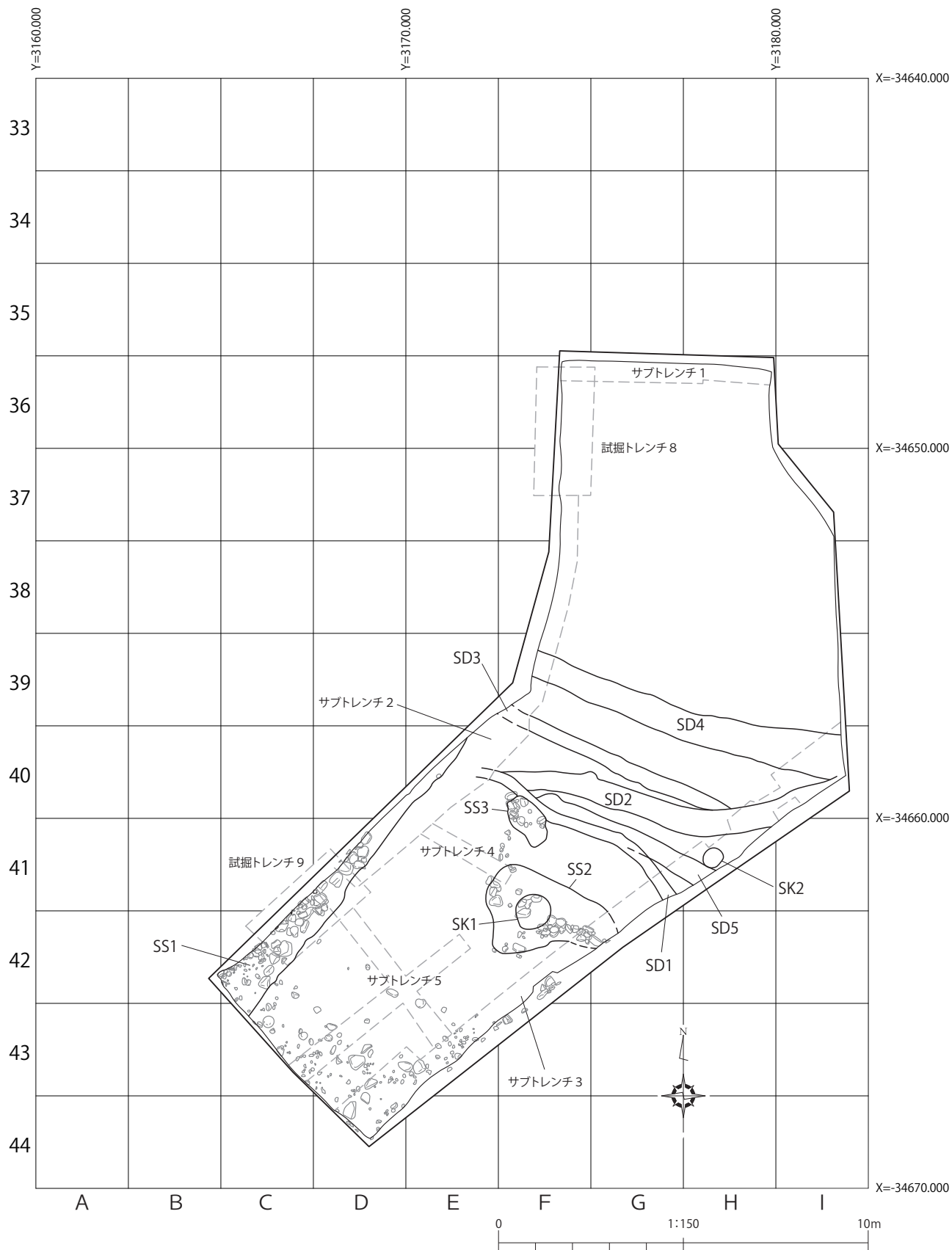
1区第2面



第12図 1区遺構図(4) SK13~22, SP1

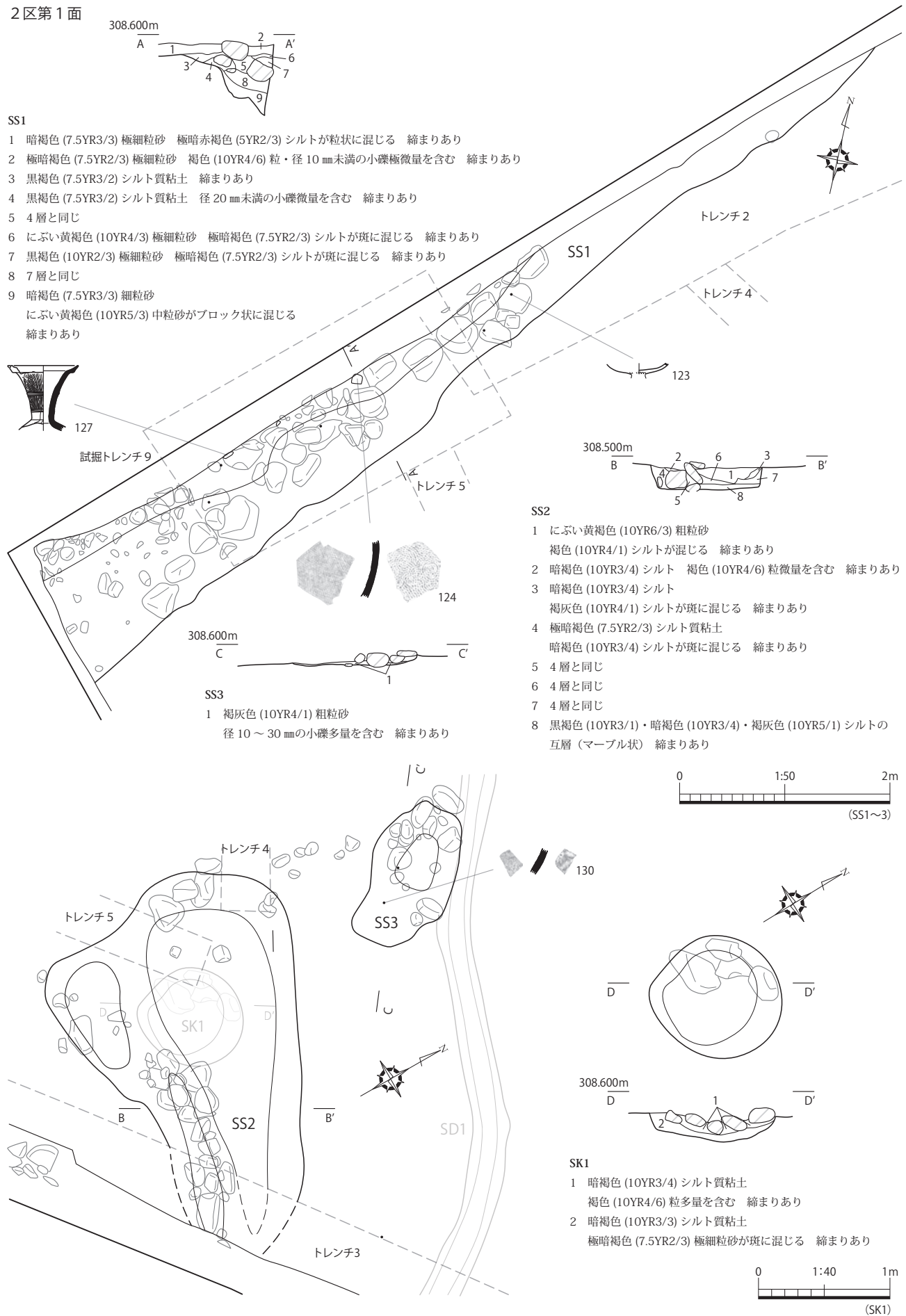


第13図 2区第1遺構面全体図(1) 遺構・遺物



第14図 2区第1遺構面全体図(2) 礎

2区第1面



SS1

- 1 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂 極暗赤褐色 (5YR2/3) シルトが粒状に混じる 縮まりあり
- 2 極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂 褐色 (10YR4/6) 粒・径 10 mm 未満の小礫極微量を含む 縮まりあり
- 3 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト質粘土 縮まりあり
- 4 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト質粘土 径 20 mm 未満の小礫微量を含む 縮まりあり
- 5 4層と同じ
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルトが斑に混じる 縮まりあり
- 7 黒褐色 (10YR2/3) 極細粒砂 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルトが斑に混じる 縮まりあり
- 8 7層と同じ
- 9 暗褐色 (7.5YR3/3) 細粒砂
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中粒砂がブロック状に混じる
縮まりあり

SS2

- 1 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粗粒砂
褐色 (10YR4/1) シルトが混じる 縮まりあり
- 2 暗褐色 (10YR3/4) シルト 褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む 縮まりあり
- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト
褐灰色 (10YR4/1) シルトが斑に混じる 縮まりあり
- 4 極暗褐色 (7.5YR2/3) シルト質粘土
暗褐色 (10YR3/4) シルトが斑に混じる 縮まりあり
- 5 4層と同じ
- 6 4層と同じ
- 7 4層と同じ
- 8 黒褐色 (10YR3/1)・暗褐色 (10YR3/4)・褐灰色 (10YR5/1) シルトの互層 (マーブル状) 縮まりあり

SS3

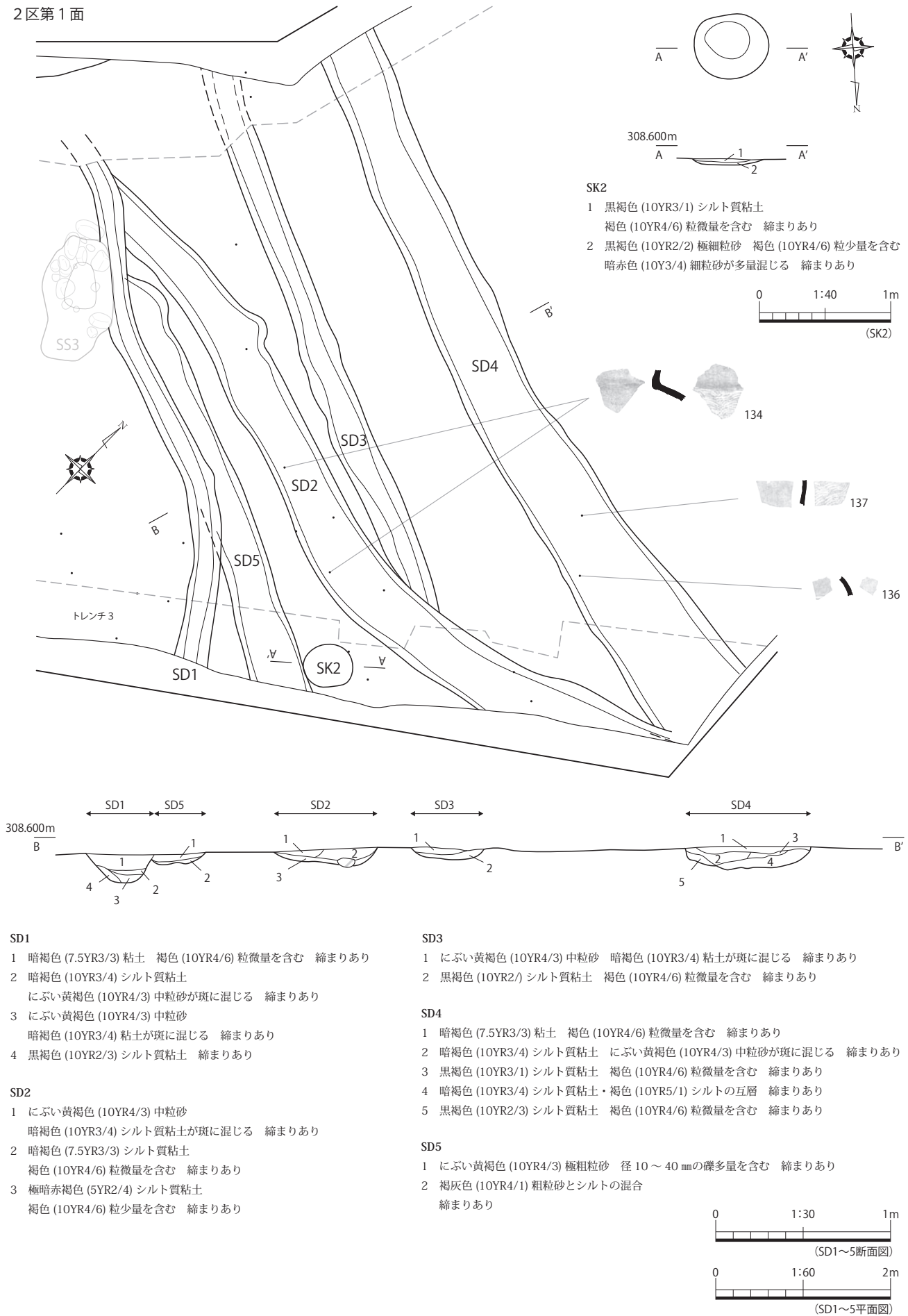
- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂
径 10 ~ 30 mm の小礫多量を含む 縮まりあり

SK1

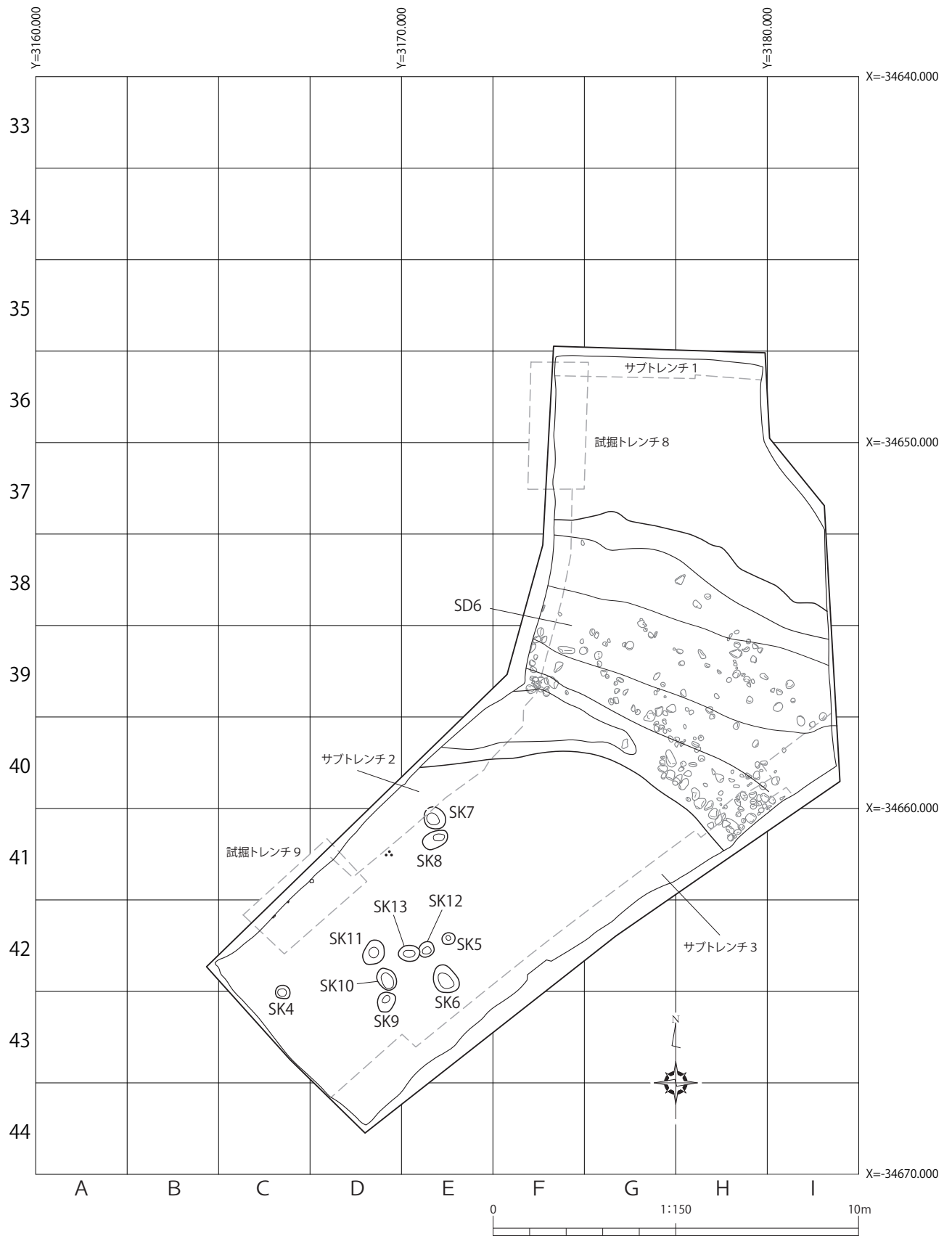
- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土
褐色 (10YR4/6) 粒多量を含む 縮まりあり
- 2 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり

第15図 2区遺構図(1) SS1~3、SK1

2区第1面

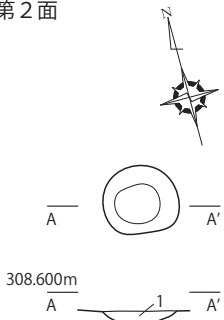


第16図 2区遺構図(2) SK2、SD1~5



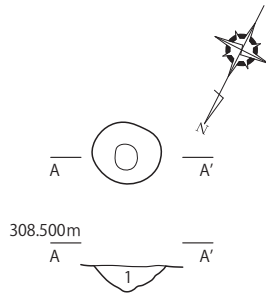
第17図 2区第2遺構面全体図

2区第2面



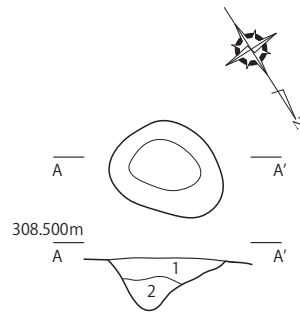
SK4

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
暗赤褐色 (5YR3/6) シルトが斑に混じる
縮まりあり



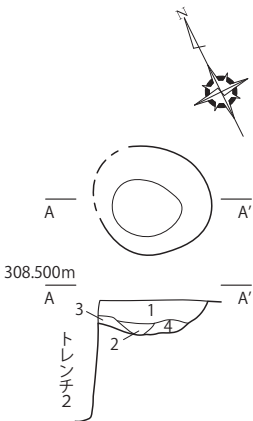
SK5

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土
径 5 mm の小礫極微量を含む
にぶい黄色 (10YR4/3) シルト質粘土が斑に混じる
縮まりあり



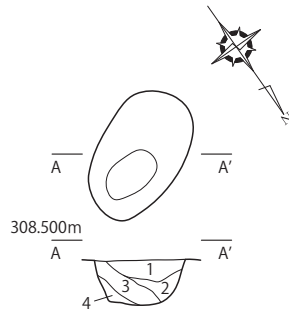
SK6

- 1 暗赤褐色 (5YR3/6) 極細粒砂
径 3 mm 未満の小礫少量を含む 縮まりあり
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土
にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土が斑に混じる
縮まりあり



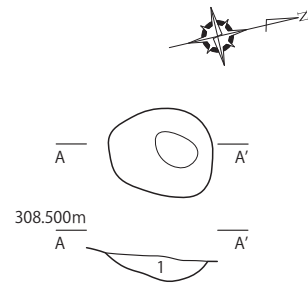
SK7

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土
極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト多量が粒状に混じる
縮まりあり
- 2 極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト質粘土
黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる
縮まりあり
- 3 褐色 (7.5YR3/4) 極細粒砂
暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり
- 4 3層と同じ



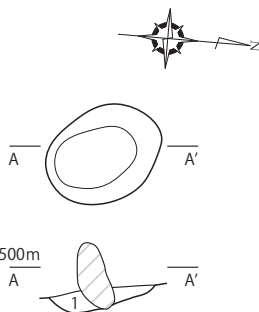
SK8

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土
極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト多量が粒状に混じる
縮まりあり
- 2 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土
極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト微量が粒状に混じる
縮まりあり
- 3 極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト質粘土
黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる 縮まりあり
- 4 褐色 (7.5YR3/4) 極細粒砂
暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり



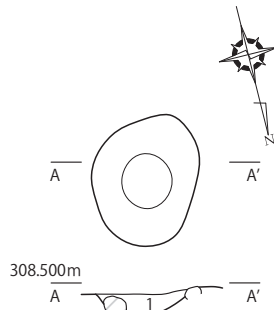
SK9

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土
極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト多量が粒状に混じる
縮まりあり



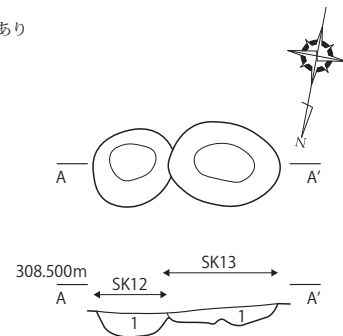
SK10

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト質粘土
大型礫周囲に径 20 mm 未満の礫あり
極暗赤褐色 (2.5YR2/4) シルト質が粒状に混じる
縮まりあり



SK11

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
暗赤褐色 (5YR3/6) シルトが斑に混じる
縮まりあり



SK12

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土
にぶい黄色 (10YR4/3) シルト質粘土微量が斑に混じる
縮まりあり

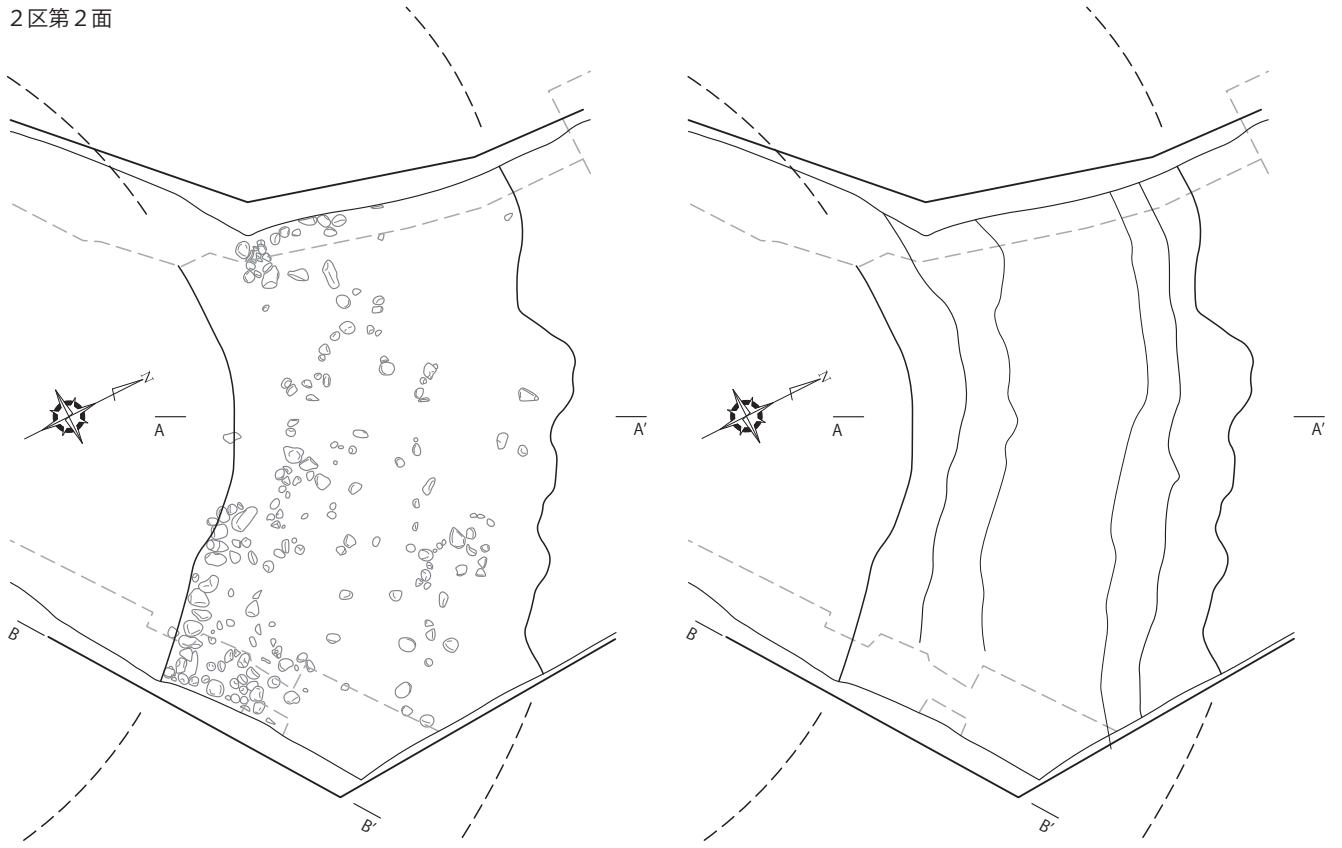
SK13

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土
にぶい黄色 (10YR4/3) シルト質粘土多量が斑に混じる
縮まりあり



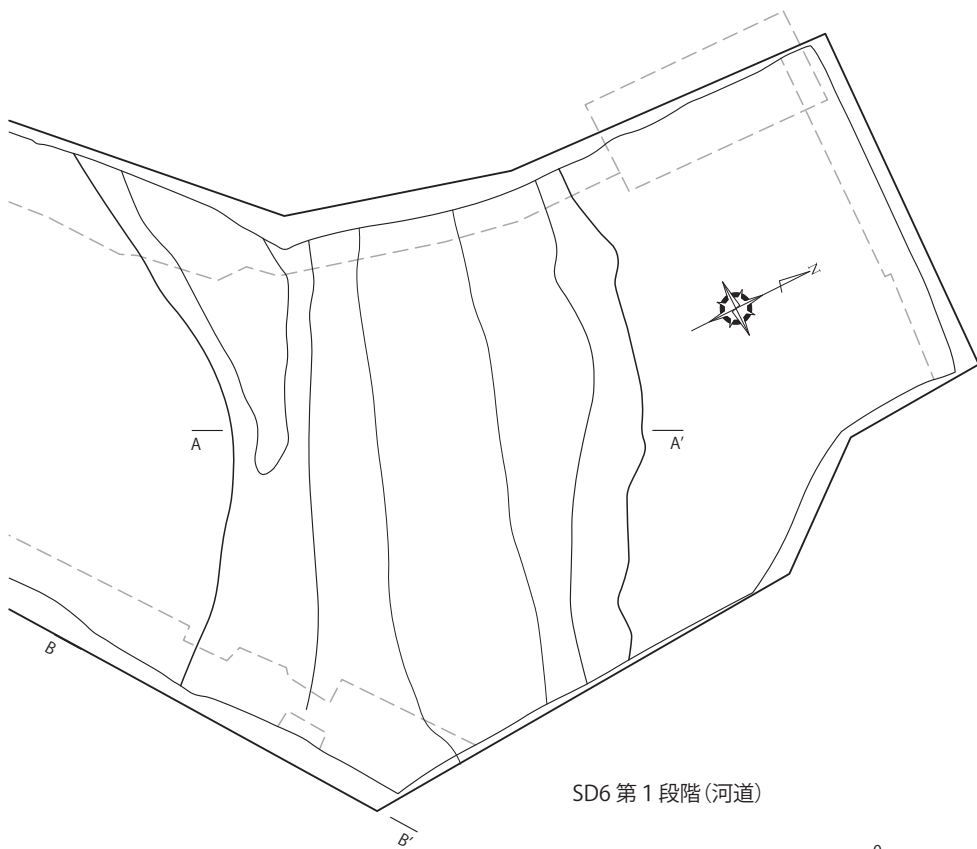
第18図 2区遺構図(3) SK 4~13

2区第2面



SD6 第2段階(磔)

SD6 第2段階

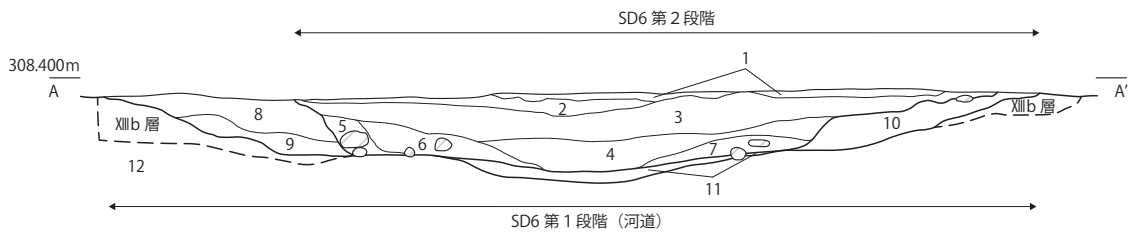


SD6 第1段階(河道)



第19图 2区遺構図(4) SD6 平面图

2区第2面

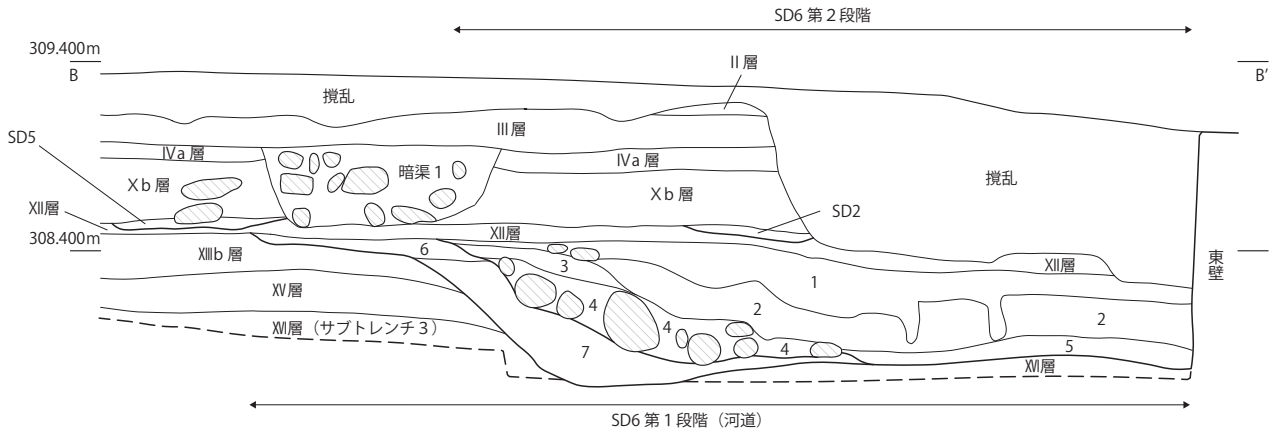


SD6 第2段階

- 1 黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土 褐色 (10YR4/6) 粒微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトがブロック状に混じる 縮まりあり
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる 縮まりあり
- 3 褐色 (7.5YR4/4) シルト 層下部に酸化鉄分がわずかに見られる 縮まりあり
- 4 黒色 (10YR2/1) 粘土 径 4 mm 未満の小礫極微量を含む 縮まりあり
- 5 暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂 褐色 (7.5YR4/4) シルトが斑に混じる 縮まりあり
- 6 黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂 拳大～人頭大の礫・径 5 mm 未満の小礫を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり
- 7 黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂 径 10 mm 未満の小礫微量を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり

SD6 第1段階 (河道)

- 8 暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂 酸化鉄分極微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトがブロック状に混じる 縮まりあり
- 9 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂 酸化鉄分極微量を含み、褐色 (7.5YR4/4) シルトが斑に混じる 縮まりあり
- 10 極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細粒砂 酸化鉄分・径 8 mm 未満の小礫極微量を含む 縮まりあり
- 11 暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂 酸化鉄分を含む 縮まりあり

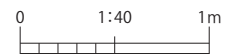


SD6 第2段階

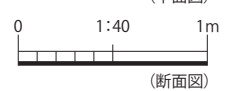
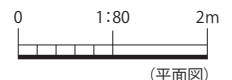
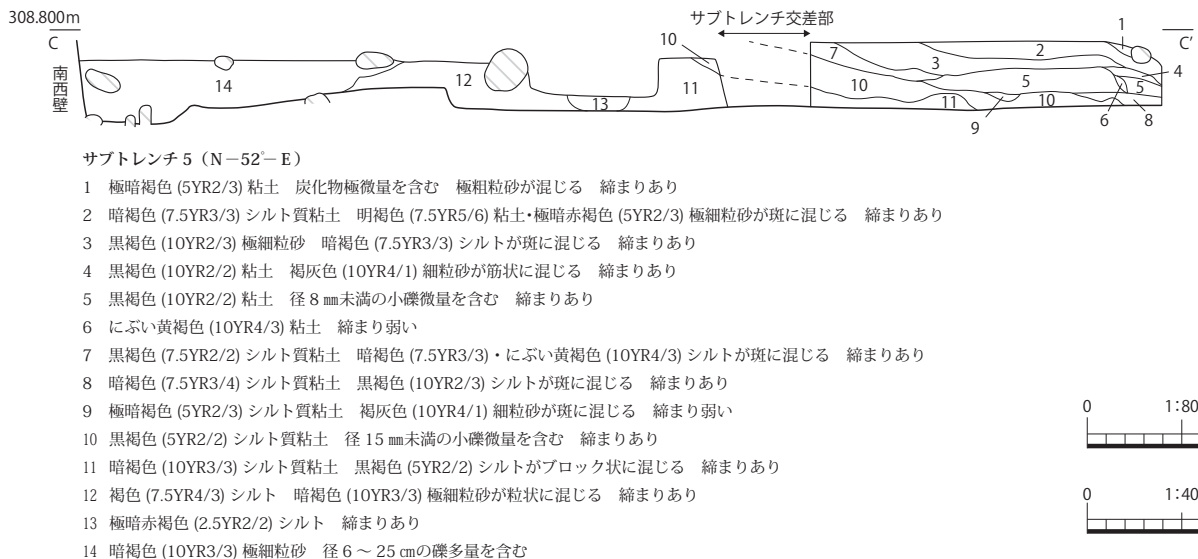
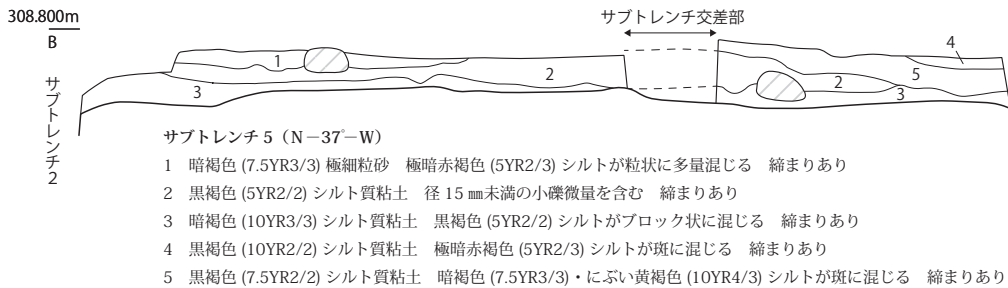
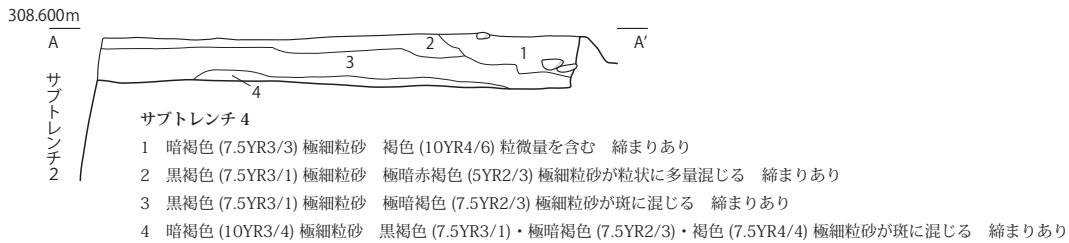
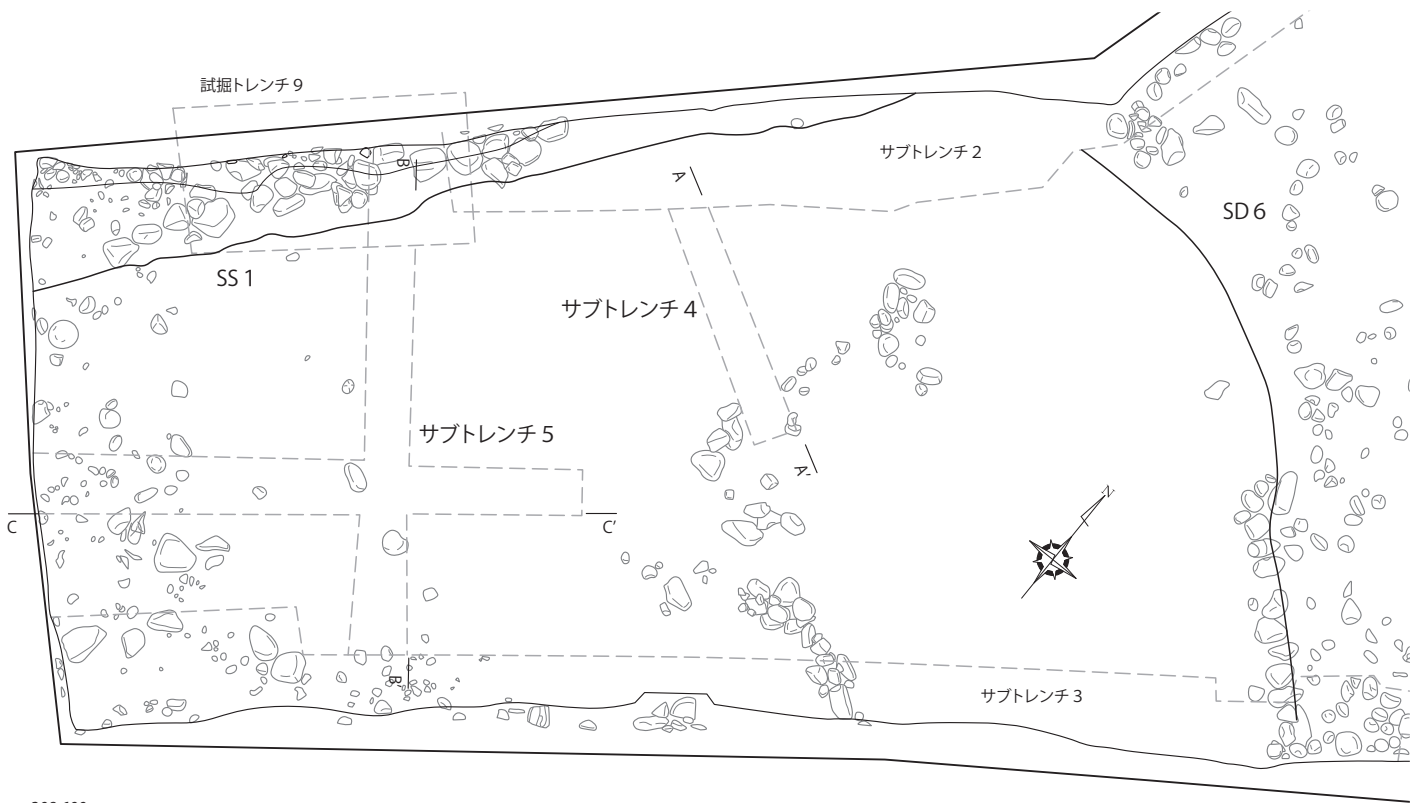
- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 黒褐色 (5YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる 縮まりあり
- 2 褐色 (7.5YR4/4) シルト 層下部に酸化鉄分がわずかに見られる 縮まりあり
- 3 暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂 褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む 縮まりあり
- 4 黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂 拳大～人頭大の礫・径 5 mm 未満の小礫を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり
- 5 黒色 (10YR2/1) 粘土 径 4 mm 未満の小礫極微量を含む 縮まりあり

SD6 第1段階 (河道)

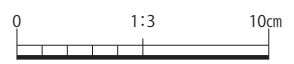
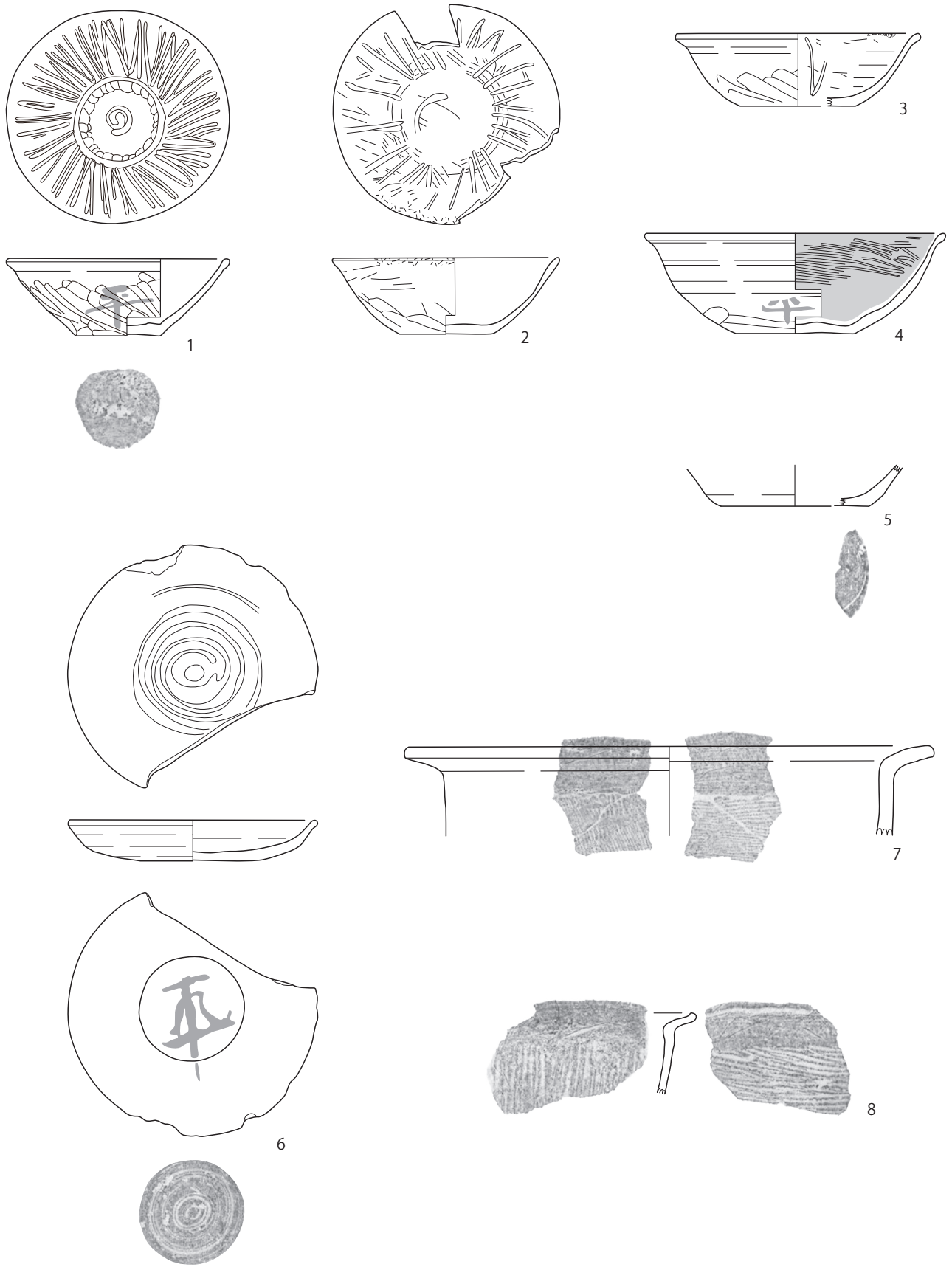
- 6 極暗赤褐色 (5YR2/3) 極細粒砂 酸化鉄分・褐色 (10YR4/6) 粒微量を含む 縮まりあり
- 7 黒褐色 (7.5YR3/2) 極細粒砂 径 5 mm 未満の小礫微量を含み、暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂が斑に混じる 縮まりあり



第20図 2区遺構図(5) SD6 断面図

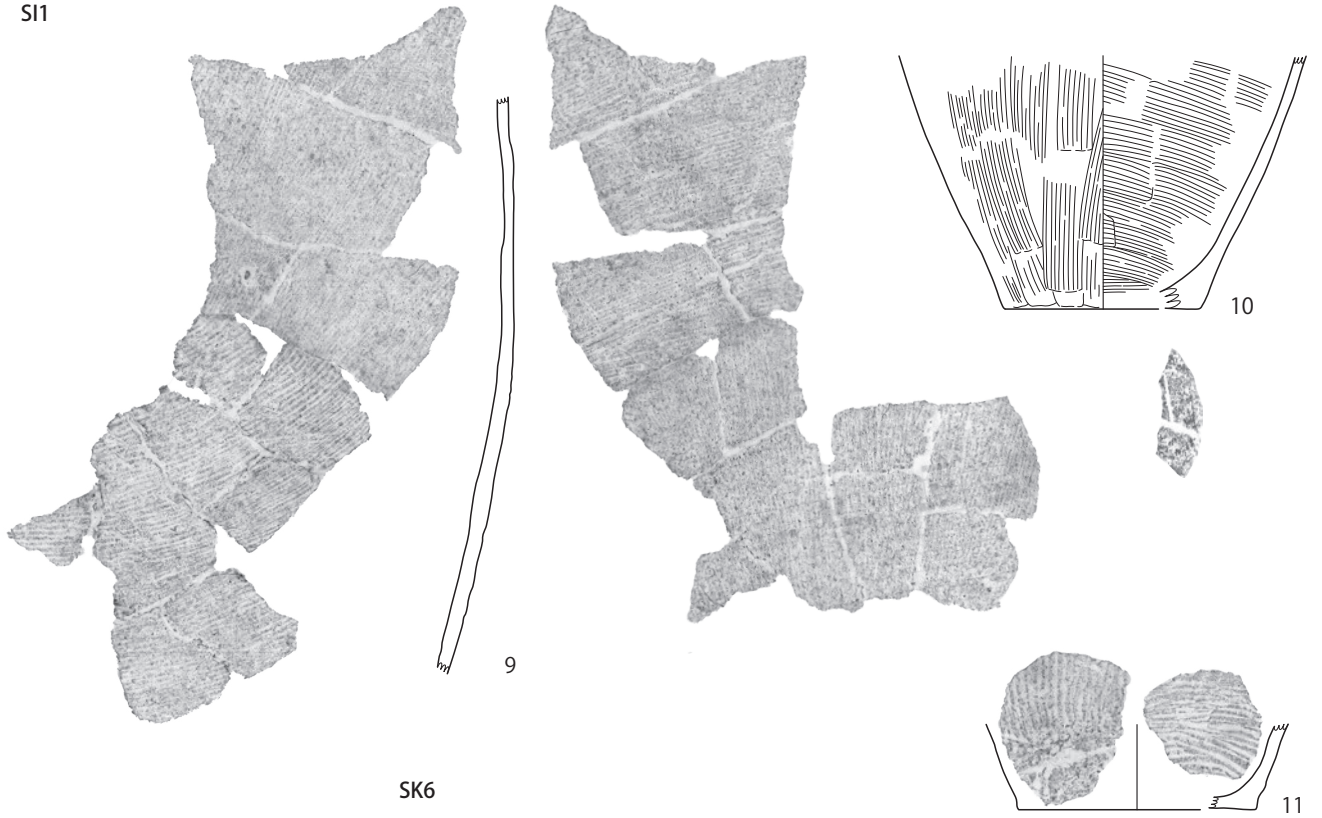


第21図 2区サブトレンチ4・5



第22图 1区出土遺物(1)

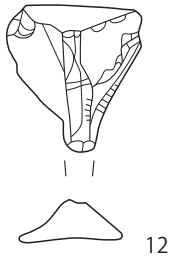
SI1



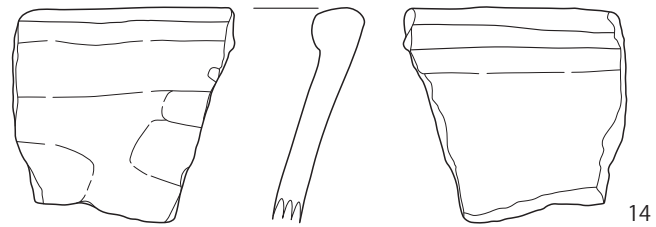
SK6



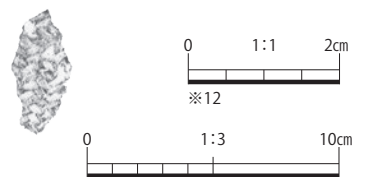
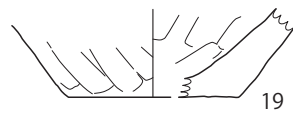
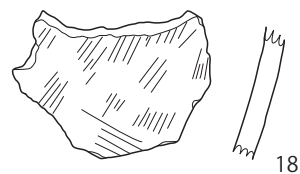
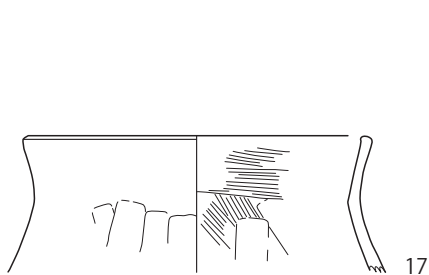
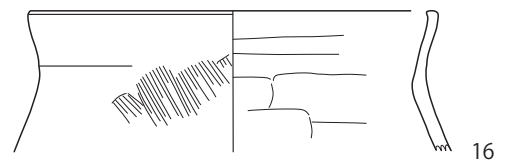
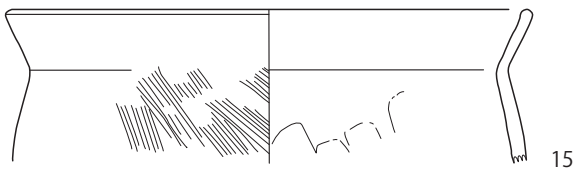
SK5



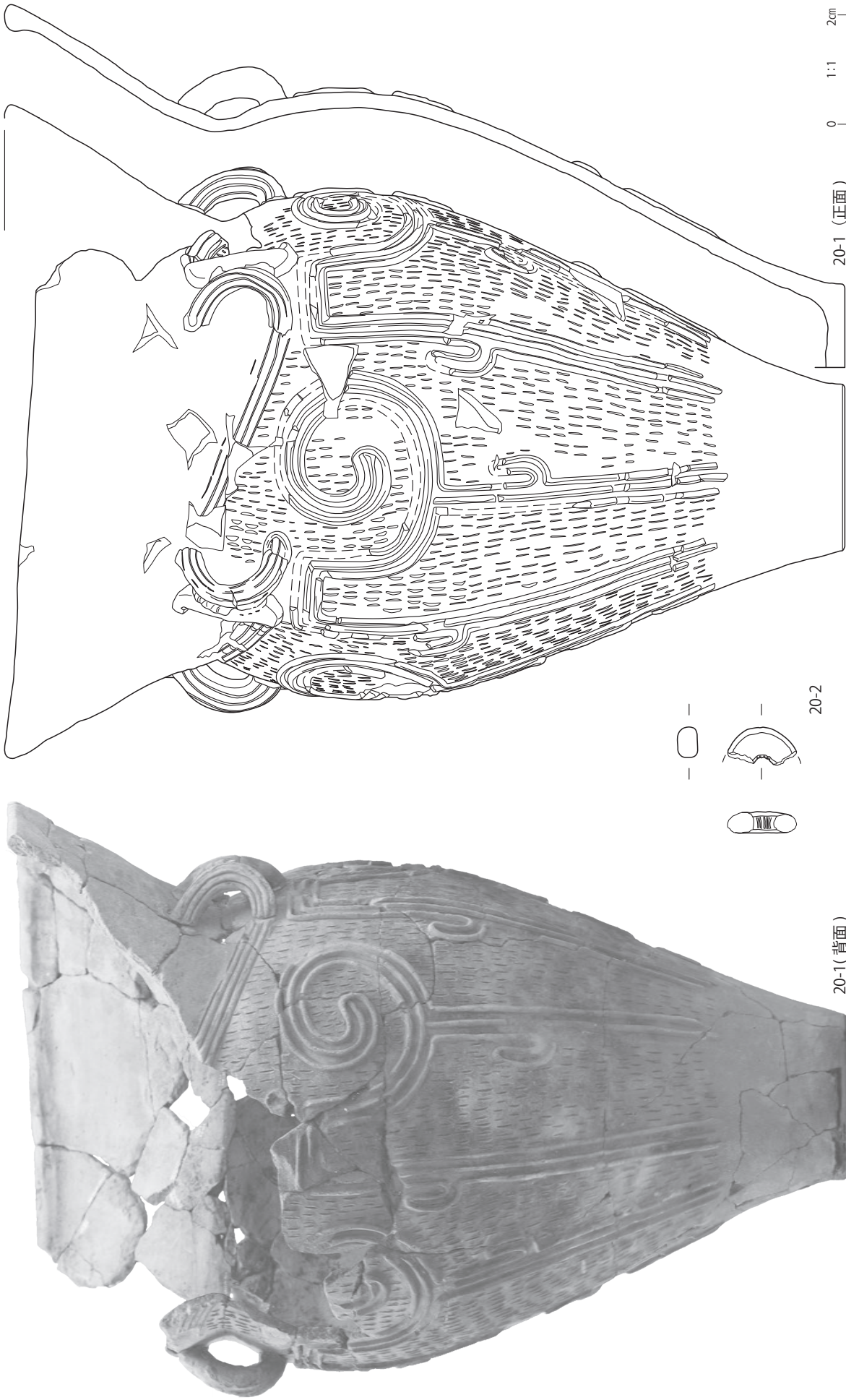
SK7



遺構外 (第1面)



第23图 1区出土遺物(2)



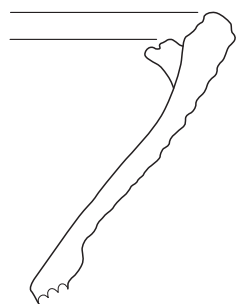
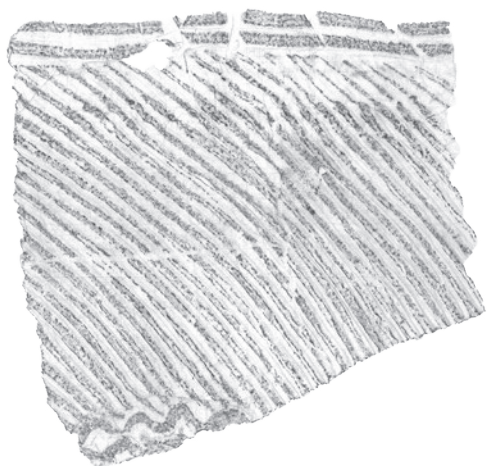
20-1(背面)

20-1(正面)

20-2

第24图 1区出土遺物(3)

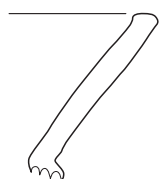
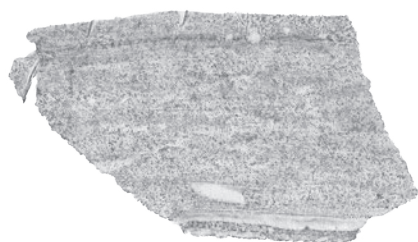
SK9



21



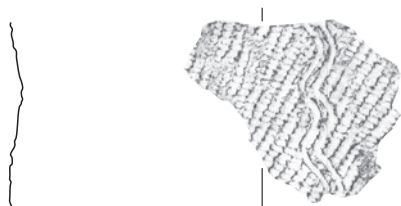
23



22



24



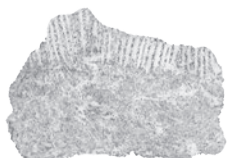
25



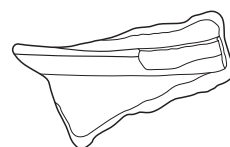
26



27

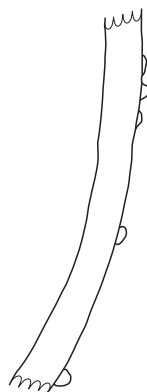


28



29

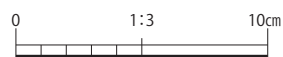
SK14



30

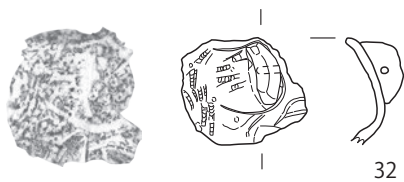


31

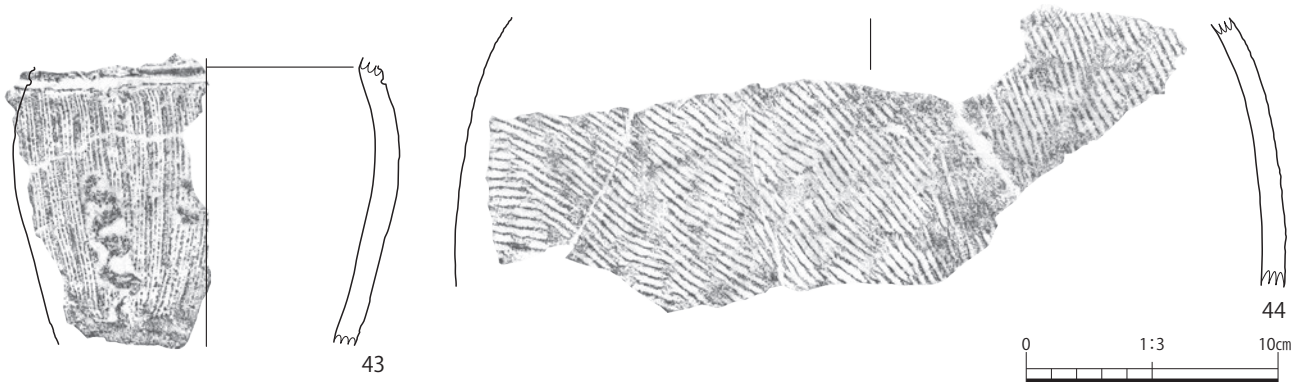
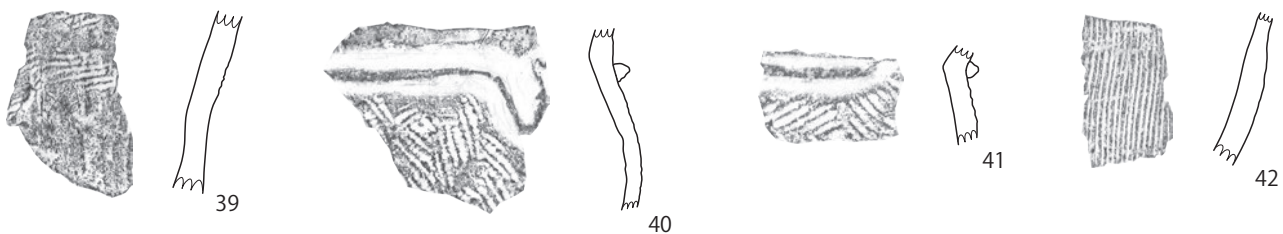
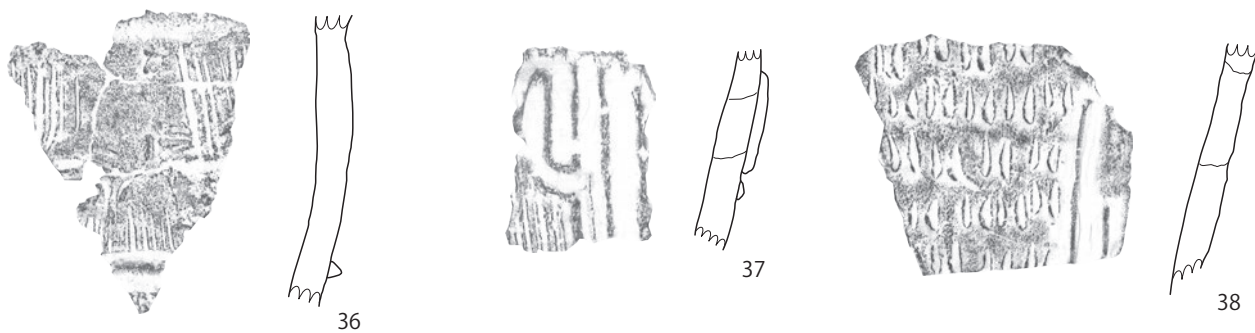
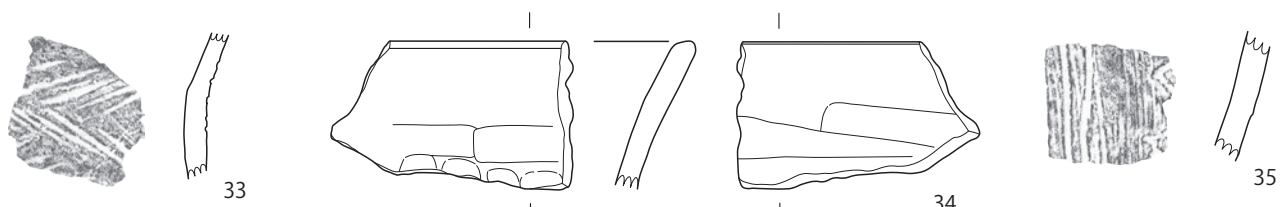


第25图 1区出土遺物(4)

SK16

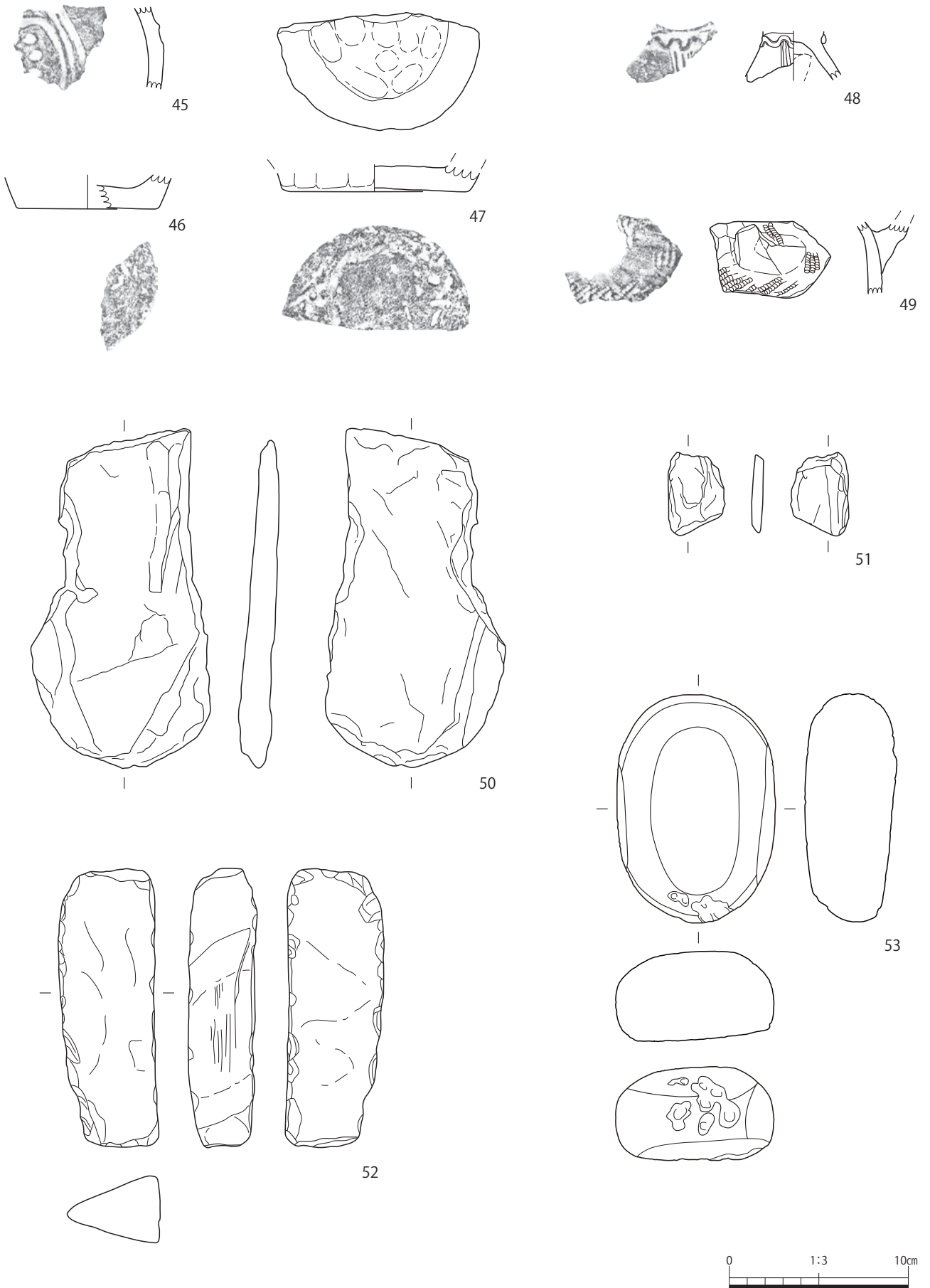


NR2



第 26 图 1 区出土遗物 (5)

NR2



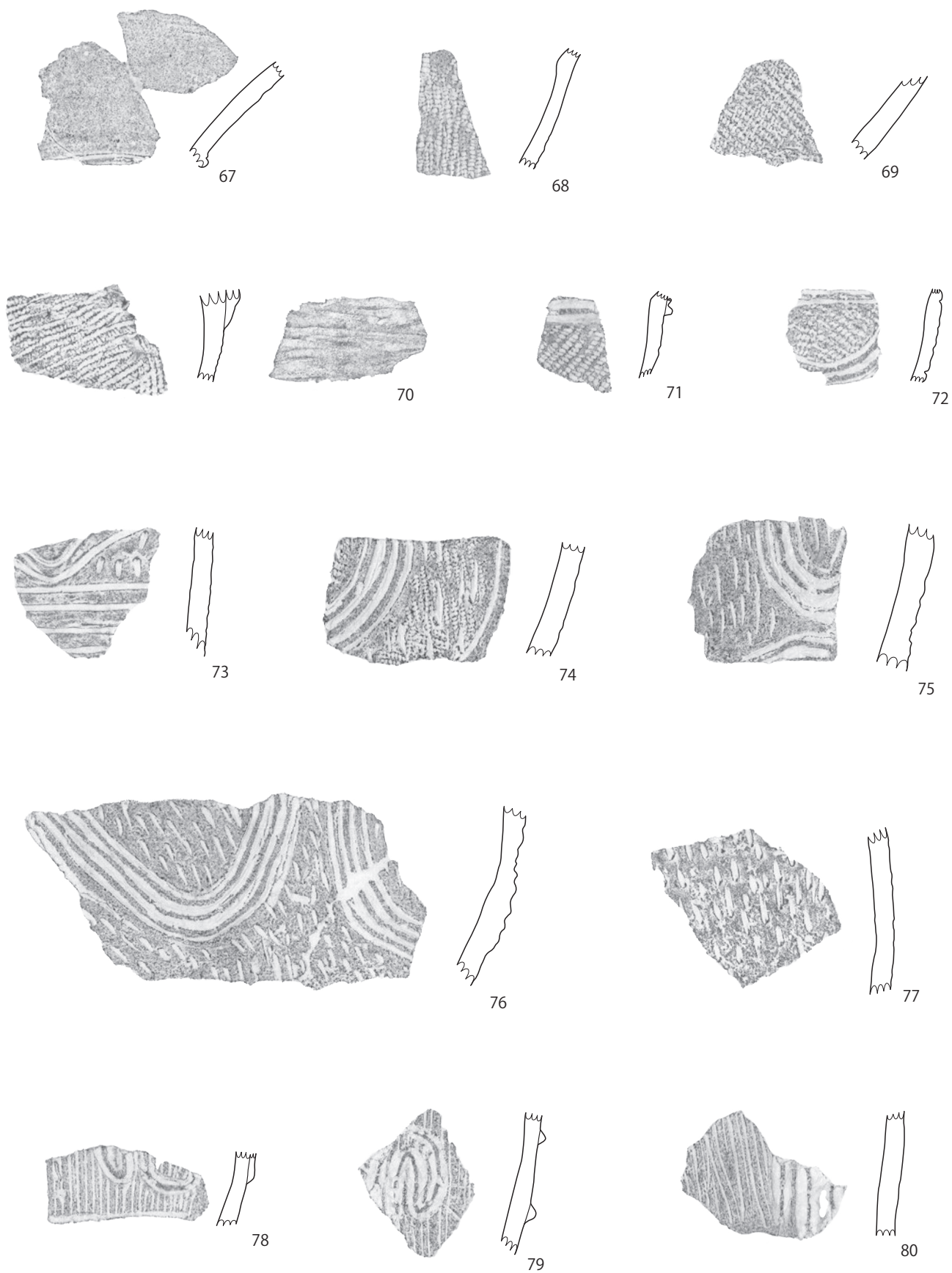
第 27 图 1 区出土遺物 (6)

NR3

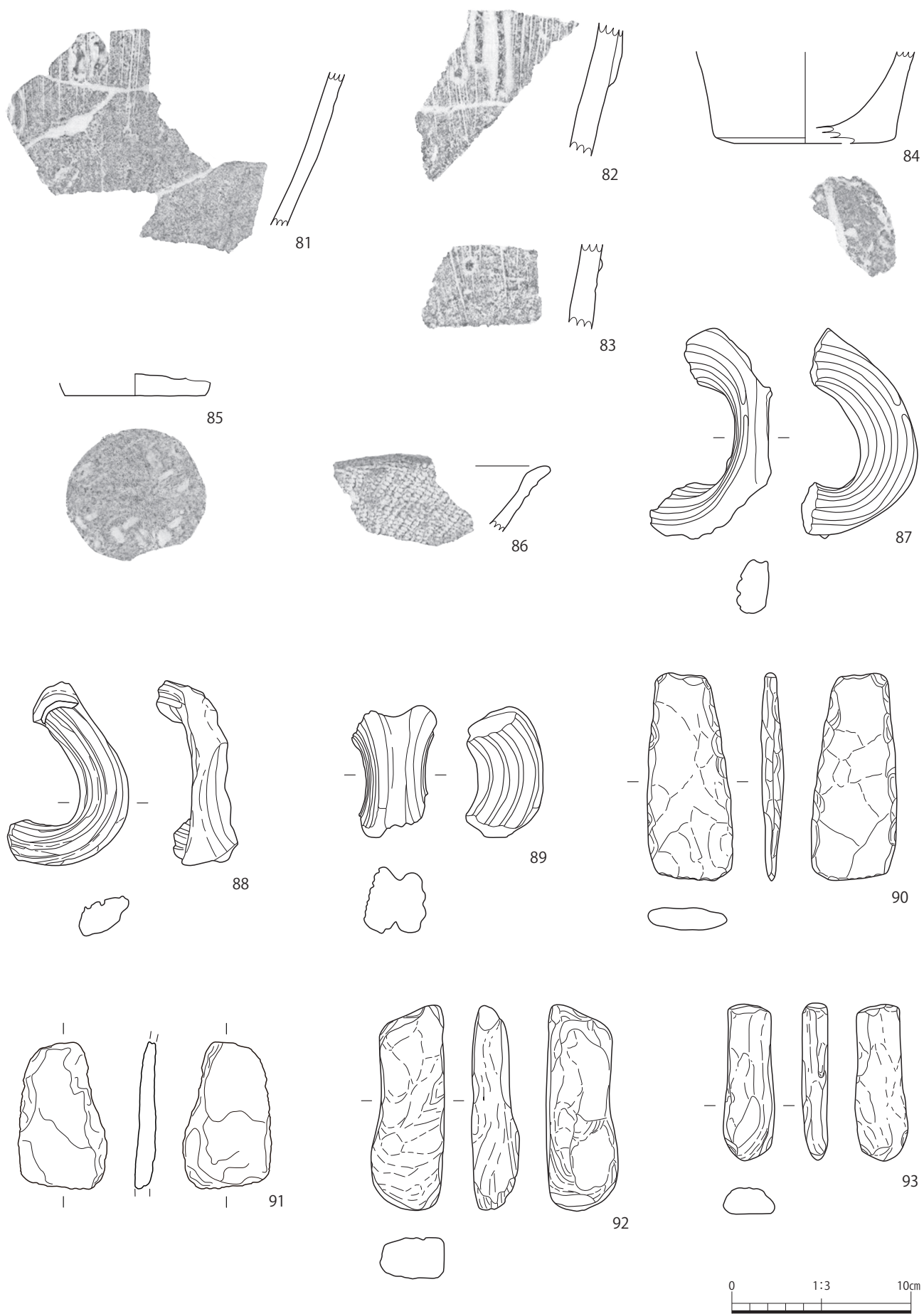


第 28 图 1 区出土遗物 (7)

NR3

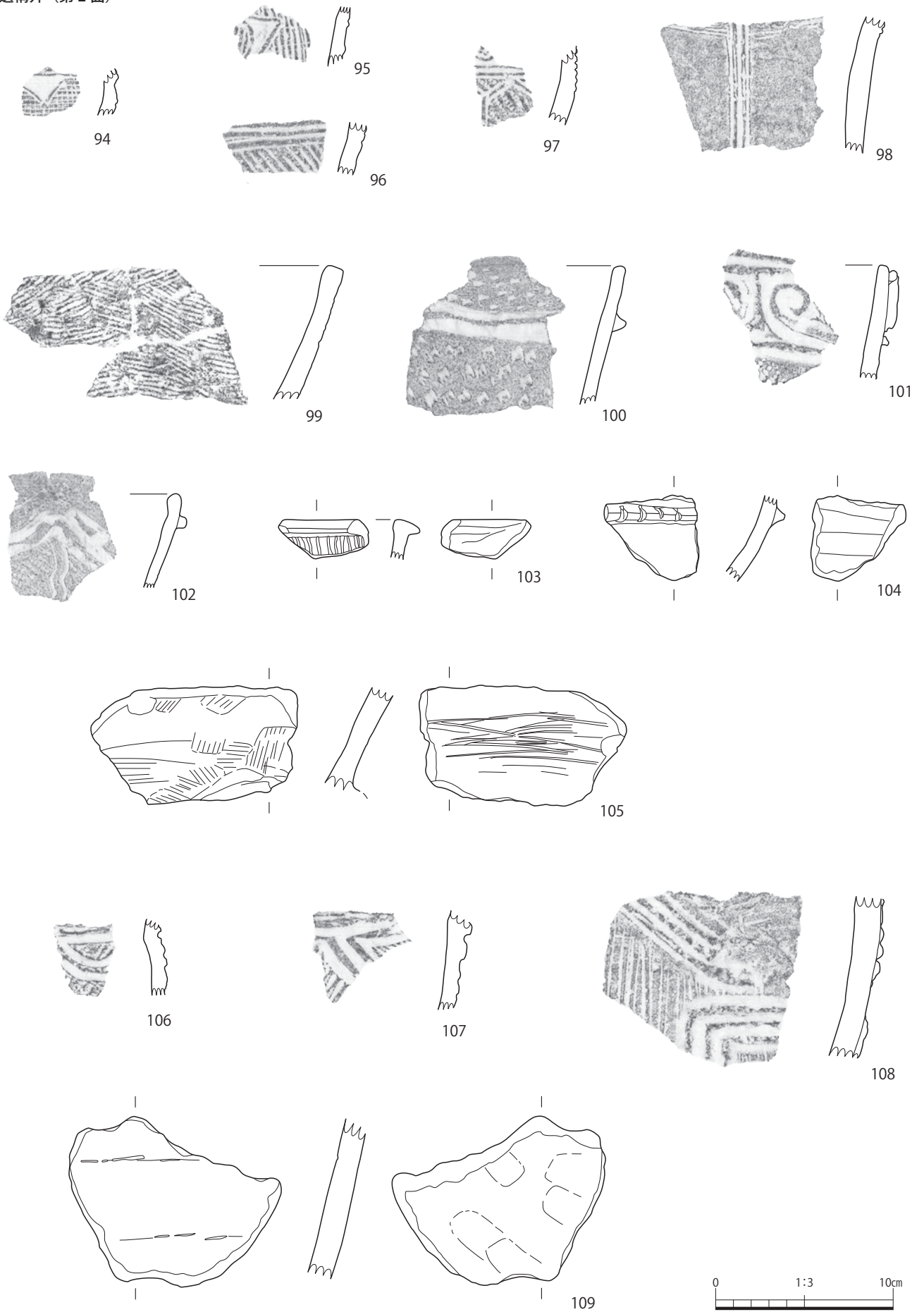


第 29 图 1 区出土遺物 (8)



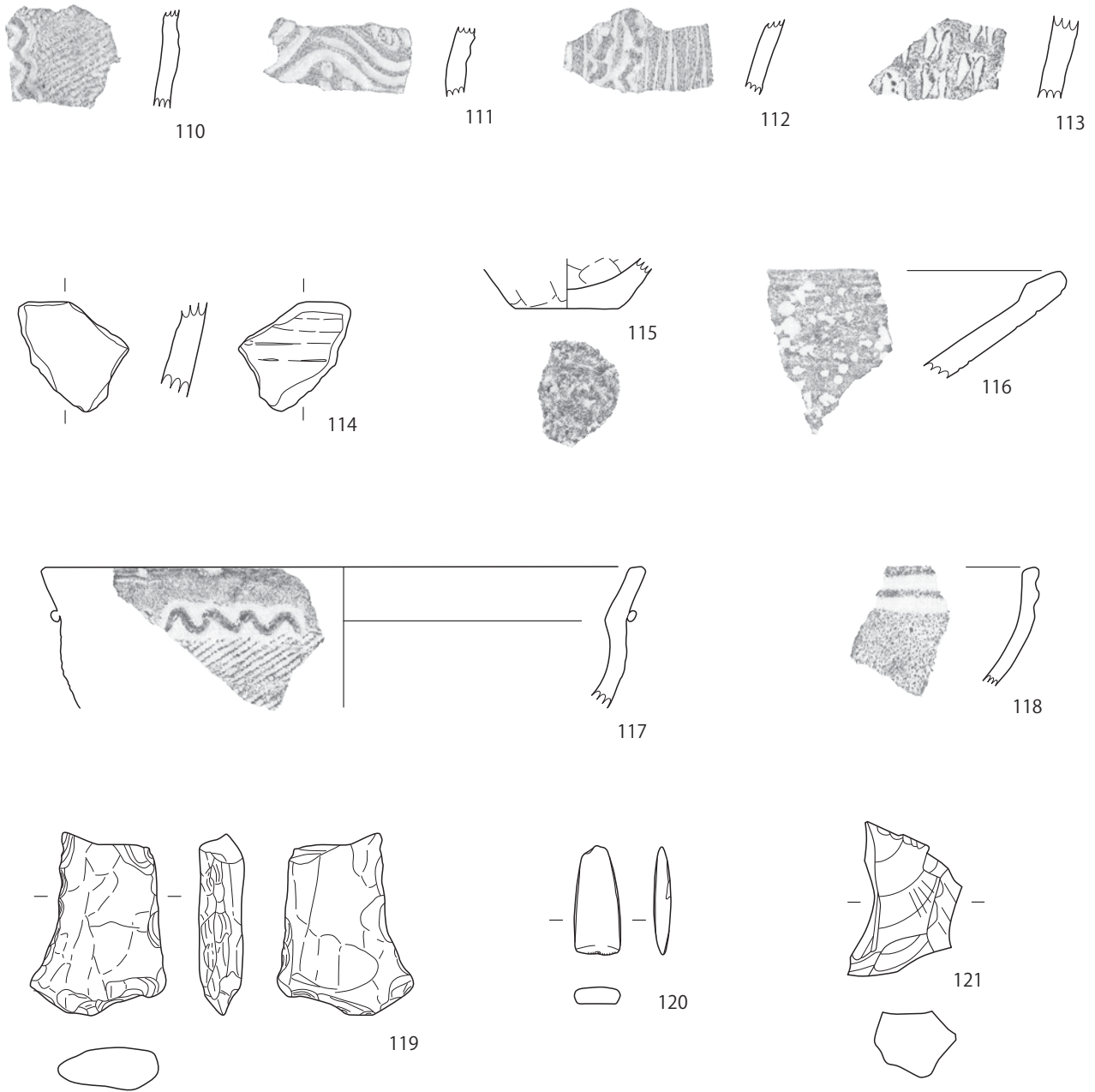
第30图 1区出土遗物(9)

遺構外 (第 2 面)



第 31 图 1 区出土遺物 (10)

遺構外 (第2面)

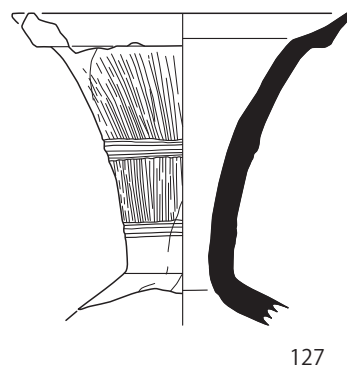
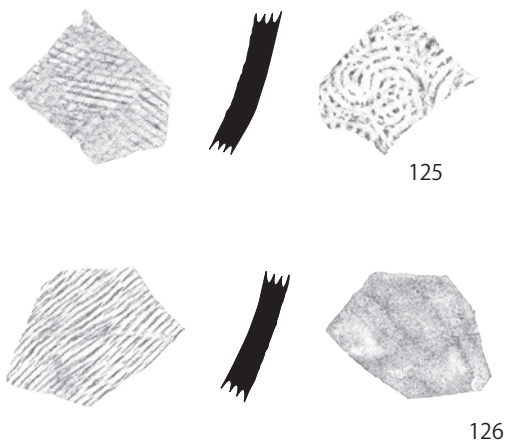
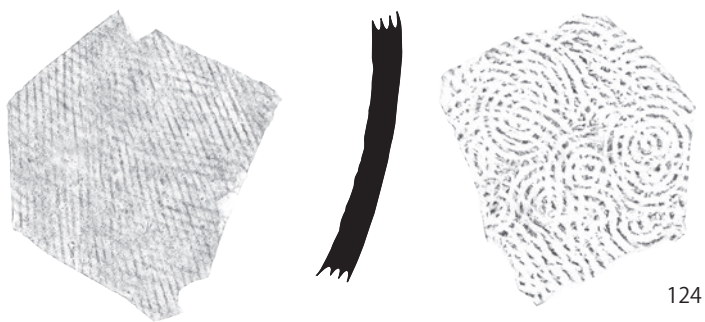
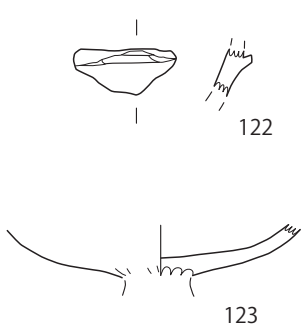


0 1:1 2cm
121

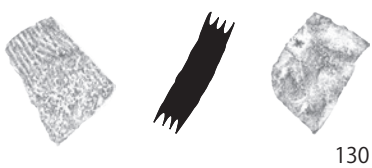
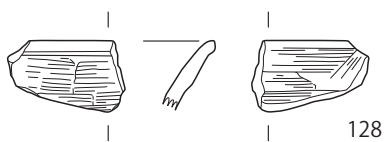
0 1:3 10cm

第 32 图 1 区出土遺物 (11)

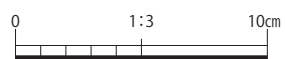
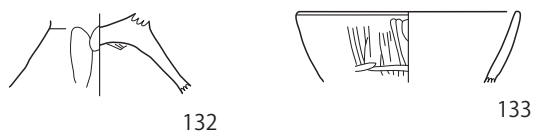
SS1



SS3

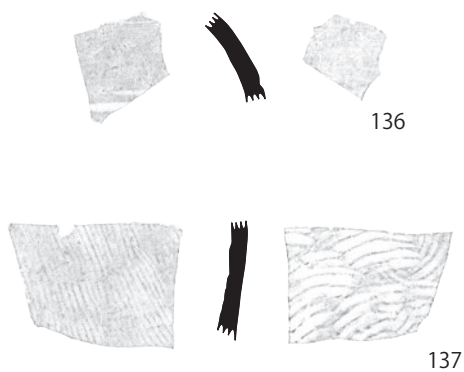
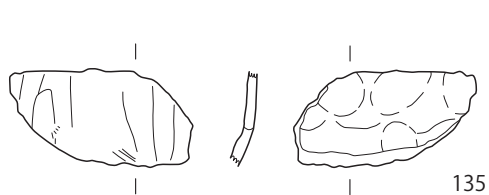


SD2

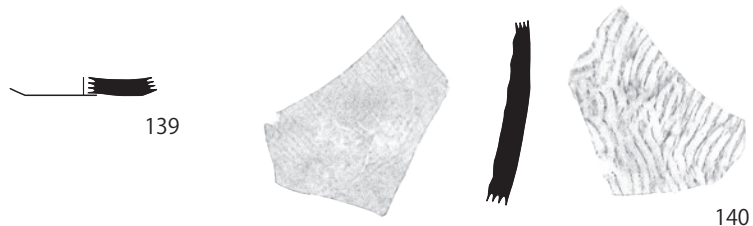
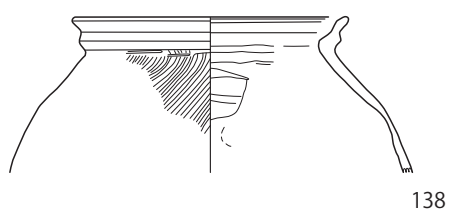


第33图 2区出土遺物(1)

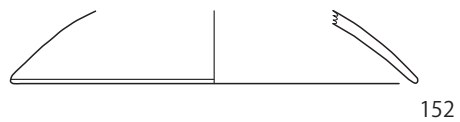
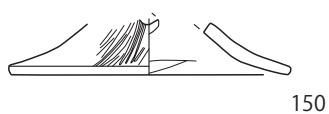
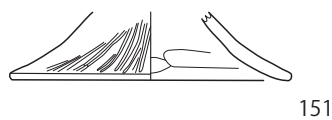
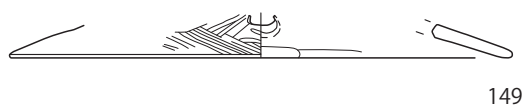
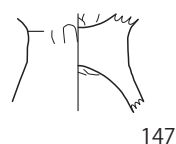
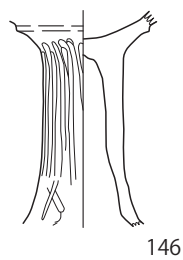
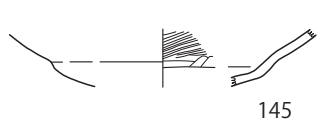
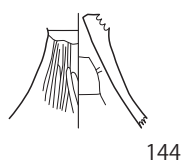
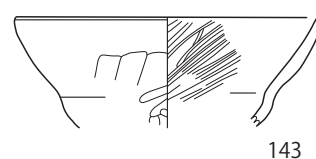
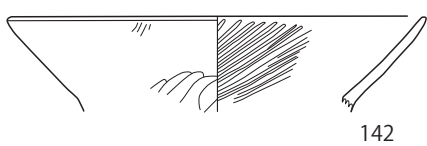
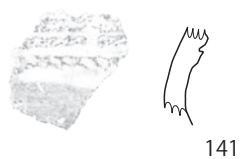
SD4



SD5

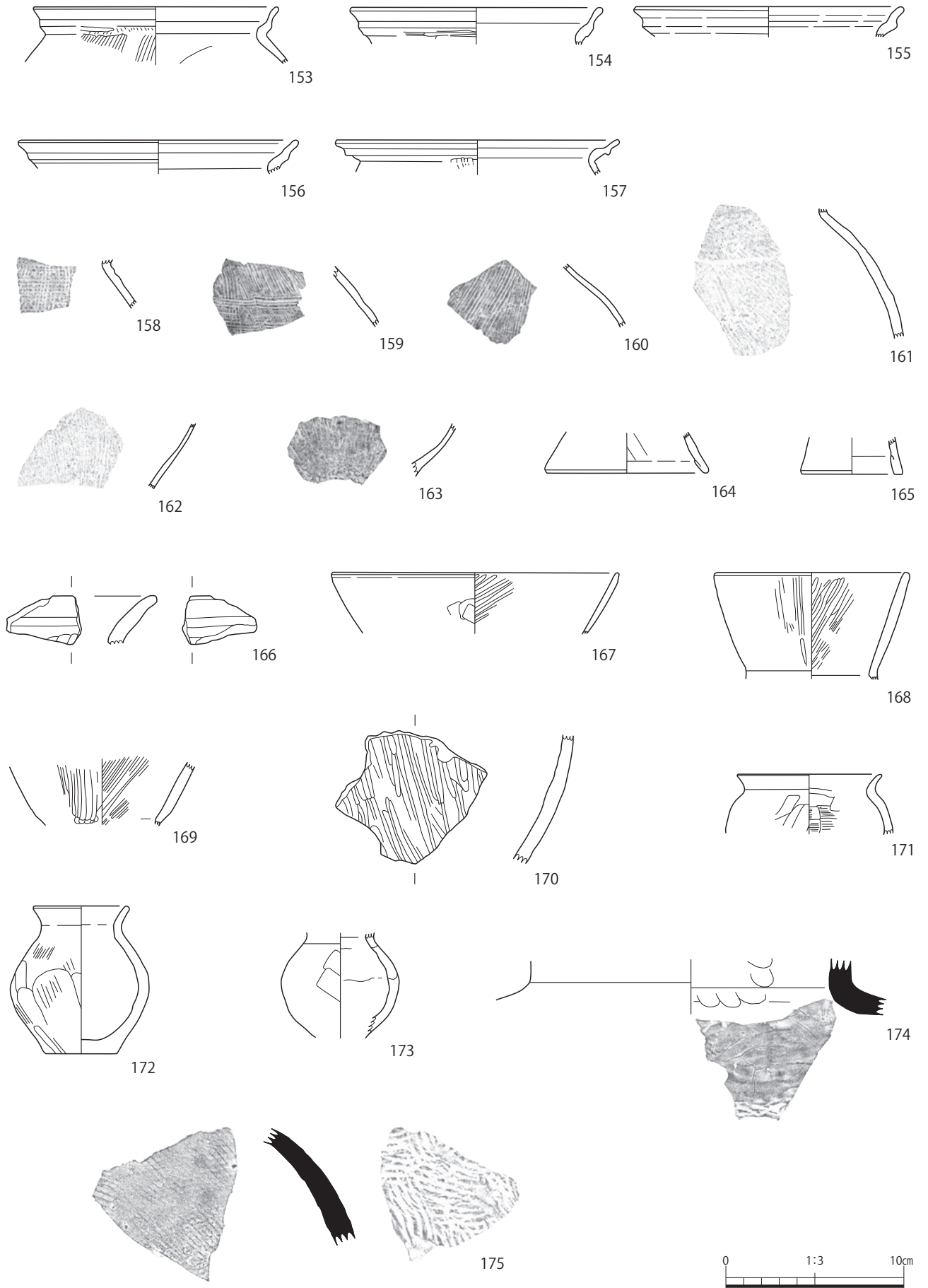


遺構外 (第 1 面)



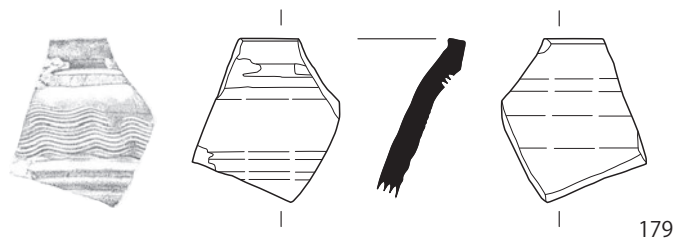
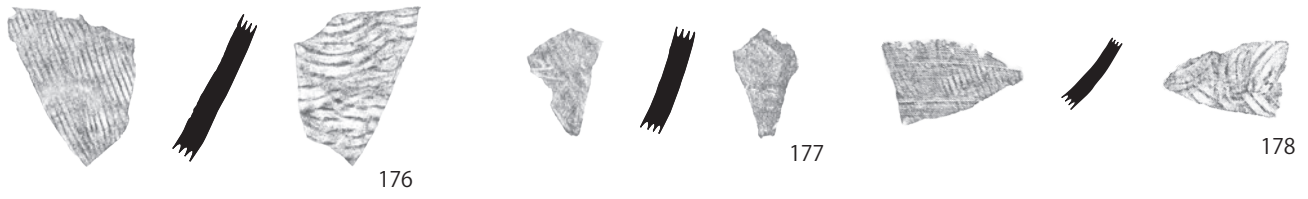
第 34 图 2 区出土遺物 (2)

遺構外 (第 1 面)

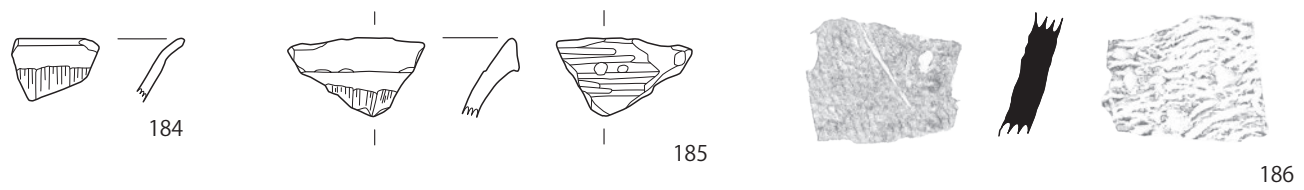


第 35 图 2 区出土遺物 (3)

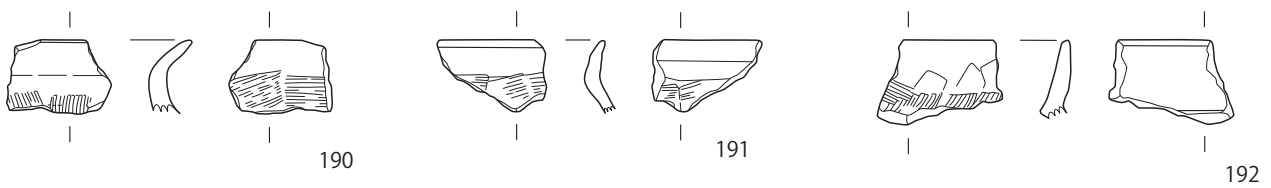
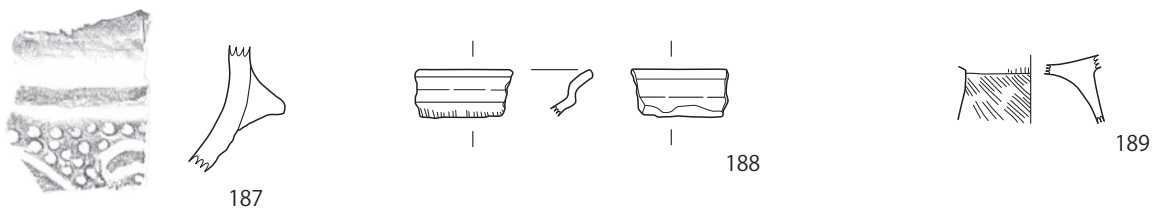
遺構外 (第1面)



SD6

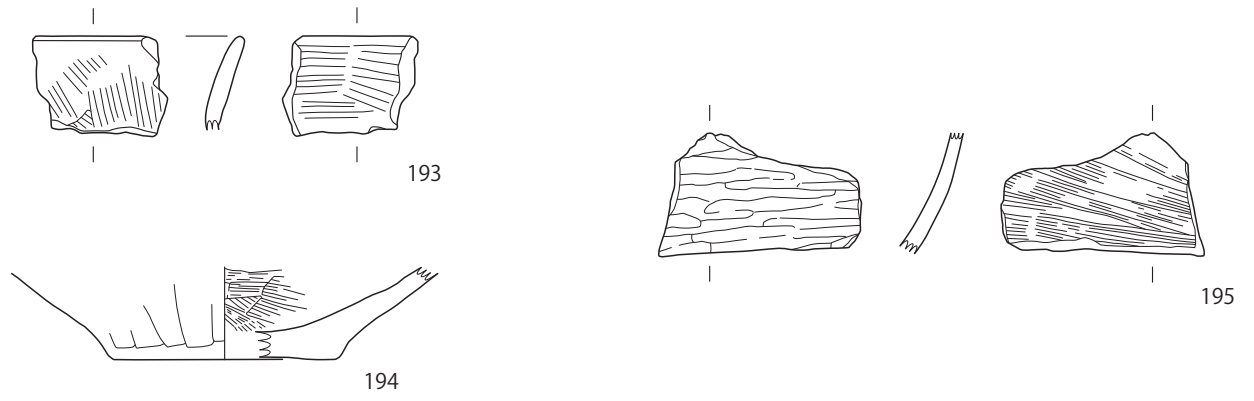


遺構外 (第2面)

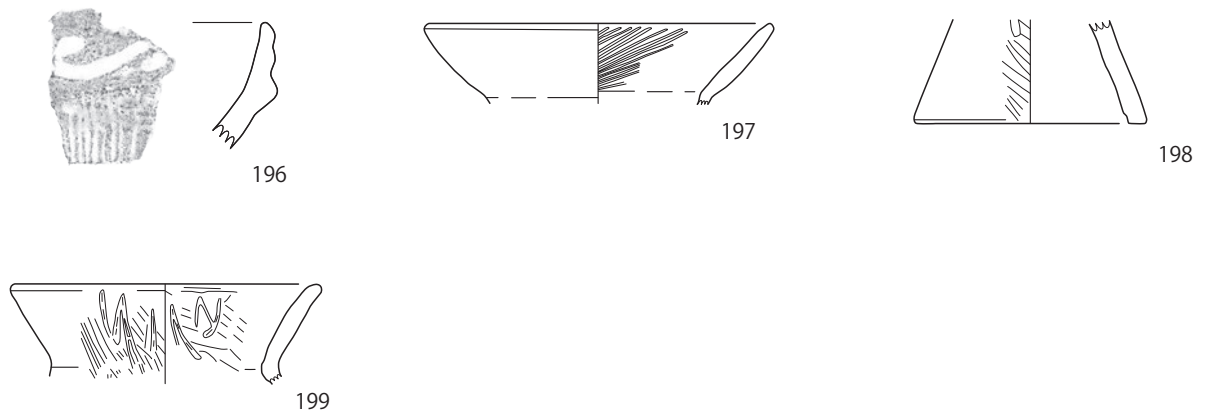


第36图 2区出土遺物(4)

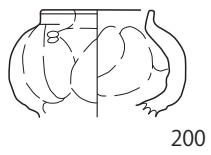
遺構外（第2面）



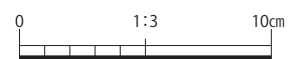
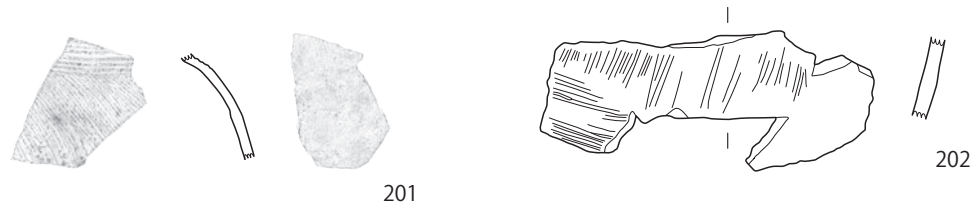
サブトレンチ3



サブトレンチ4



サブトレンチ5



第37図 2区出土遺物（5）

表2 出土遺物観察表1 (土器類) 1

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位	整形・調整技法		胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代	
							A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)	内面	外面					
1	22	10	1区	S11	土師器	坏 (甲斐型)	12.0	4.5	402	壳形	暗文 ハラケズリ	ハラケズリ	回転糸切後 ハラケズリ	底面 ハラケズリ	暗文 ハラケズリ	赤色粒	良好	外面墨書「平」	平安前期 9C後
2	22	10	1区	S11	土師器	坏 (甲斐型)	12.2	5.0	4.1	口縁2/3~底部	暗文・擦痕 ハラケズリ、擦痕	ハラケズリ、擦痕	ハラケズリ	ハラケズリ	明赤褐 5YR5/8	赤色粒	良好	口縁部一部に横付着	平安前期 9C後
3	22	10	1区	S11	土師器	坏 (甲斐型)	(13.0)	(6.2)	(3.9)	口縁1/4~底部1/2	暗文・擦痕 ハラケズリ	ハラケズリ	ハラケズリ	ハラケズリ	明赤褐 5YR5/8	赤色粒	良好	口縁部一部に横付着	平安前~中期 9C後~10C前
4	22	10	1区	S11	土師器	坏 (甲斐型)	(16.0)	6.4	5.4	口縁1/4~底部	暗文・黒色処理 ハラケズリ	ハラケズリ	回転糸切後 ハラケズリ	底面 ハラケズリ	黒褐2.5Y3/1 7.5YR6/6	赤色粒	良好	黒色土器 外面墨書「平」か カマドより出土	平安前~中期 9C後~10C前
5	22	10	1区	S11	土師器	坏 (甲斐型)	(13.2)	(8.0)	(2.2)	体部小~底部	口縁口成形	口縁口成形	回転糸切	口縁口成形	7.5YR6/6	粗砂粒、赤色粒	良好		平安前期 9C後
6	22	10	1区	S11	土師器	皿 (甲斐型)	(13.2)	5.6	2.2	口縁2/3~底部	暗文	暗文	回転糸切	暗文	7.5YR6/6	赤色粒	良好		平安前期 9C後
7	22	10	1区	S11	土師器	甕 (甲斐型)	(28.0)		(4.8)	口縁1/4	縦ハケ目 ナデ(口縁部)	縦ハケ目 ナデ(口縁部)	縦ハケ目 ナデ(口縁部)	底面 ナデ(口縁部)	5YR4/4	雲母、長石	良好		平安前期 9C後
8	22	10	1区	S11	土師器	甕 (甲斐型)			(4.4)	口縁小片	縦ハケ目 ナデ(口縁部)	縦ハケ目 ナデ(口縁部)	縦ハケ目 ナデ(口縁部)	底面 ナデ(口縁部)	7.5YR4/3	雲母、長石	良好		平安前期 9C後
9	23	10	1区	S11	土師器	長脚甕 (甲斐型)			(2.9)	体部	縦ハケ目	縦ハケ目	縦ハケ目	底面	7.5YR4/3	雲母、長石	良好		平安前期 9C後
10	23	10	1区	S11	土師器	甕 (甲斐型)	(7.8)		(10.0)	体部小~底部	縦ハケ目	縦ハケ目	縦ハケ目	底面	赤褐 5YR4/6	粗砂粒、白色粒、 雲母、黒色粒	良好	カマドより出土	平安前期(9C後) 泉史V期か
11	23	10	1区	S11	土師器	甕 (甲斐型)	(9.4)		(3.4)	底部小片	縦ハケ目	縦ハケ目	縦ハケ目	底面	7.5YR4/3	雲母	良好		平安前期
13	23	10	1区	SK6	土師器	坏 (甲斐型)			(1.8)	口縁部小	口縁口成形	口縁口成形	口縁口成形	底面	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、赤色粒	良好		平安前期(9C後)
14	23	10	1区	SK7	縄文土器	深鉢			(8.5)	口縁部小	ナデ	ナデ	ナデ	底面	にふい赤褐 5YR5/4	粗砂粒、石英、 長石	良好	無文、長脚型か 摩滅著しい	縄文中期後半 曾利II式
15	23	10	1区	遺構外 (第1面)	土師器	甕	(16.0)		(6.1)	口縁小	ハケ目	ハケ目	ハケ目	底面	にふい赤褐 7.5YR5/4	粗砂粒、白色粒、 黒色粒	良好		古墳後期
16	23	10	1区	遺構外 (第1面)	土師器	甕	(13.4)		(5.6)	口縁小	ハケ目	ハケ目	ハケ目	底面	7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		古墳後期
17	23	10	1区	遺構外 (第1面)	土師器	甕	(13.4)		(10.3)	体部	ナデ	ナデ	ナデ	底面	灰青褐 10YR5/2	粗砂粒、白色粒、 黒色粒	良好		古墳後期
18	23	10	1区	遺構外 (第1面)	土師器	甕			(6.8)	体部	ナデ	ナデ	ナデ	底面	7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好		古墳後期
19	23	10	1区	遺構外 (第1面)	土師器	甕	(57.8)		14.8	口縁1/3~底部	ナデ	ナデ	ナデ	底面	にふい赤褐 5YR5/4	粗砂粒	良好		古墳後期
20-1	24	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			76.5	口縁1/3~底部	ナデ	ナデ	ナデ	底面	にふい黄褐 10YR5/4	粗砂粒、黒色粒、 白色小礫	良好	X字状把手付木鏝(把手5単位、地文刺突文 隆帯渦巻文・隆帯墨文(3本単位) 口縁外側縁付条線、口縁内側有沈線隆帯 頸部2本単位横位波状隆帯	縄文中期後半 曾利II式
21	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(11.0)	口縁小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	7.5YR6/6	雲母	良好		縄文中期後半 曾利II式
22	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(7.3)	口縁小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	7.5YR6/6	雲母	良好		縄文中期後半 曾利II式
23	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(8.0)	体部小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	明赤褐 7.5YR6/6	長石	良好		縄文中期後半 曾利II式
24	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(14.5)	体部小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	明赤褐 5YR5/6	雲母、細砂粒	良好		縄文中期後半 曾利II式
25	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(7.4)	頸部小	ナデ	ナデ	ナデ	底面	黒褐 7.5YR2/2	粗砂粒、白色粒	良好		縄文中期後半 曾利III~IV式
26	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(6.2)	体部小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	にふい黄褐 10YR6/3	雲母	良好		縄文中期後半 曾利I式
27	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(4.0)	体部小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	にふい赤褐 7.5YR6/4	雲母、細砂粒	良好		縄文中期後半 曾利II~III式
28	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(5.5)	体部小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	明赤褐 10YR7/6	雲母	良好		縄文中期後半 曾利式
29	25	11	1区	SK9	縄文土器	深鉢			(5.7)	体部小片	ナデ	ナデ	ナデ	底面	灰青褐 10YR6/2	雲母	良好		縄文中期後半 曾利II式
30	25	12	1区	SK14	縄文土器	深鉢			(15.3)	体部小	ナデ	ナデ	ナデ	底面	明赤褐 7.5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好		縄文中期後半 曾利II式
31	25	12	1区	SK14	縄文土器	深鉢			(3.4)	体部小	ナデ	ナデ	ナデ	底面	赤褐 2.5YR4/6	粗砂粒、白色粒	良好		縄文中期後半

*法量()は復元測値、< >は残存値である。

表3 出土遺物観察表2 (土器類) 2

報告 番号	写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位	整形・調整技法		胎土含有物	焼成	備考	推定年代
						A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)				
32	26	1区	SK16	縄文土器	ミニチュア			(3.4)	ナデ		明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好	ミニチュア土器 刺突文(竹管)	縄文中期後半か
33	26	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(5.8)	ナデ		赤褐 2.5YR4/6	粗砂粒、白色粒、 雲母、赤色粒	良好	矢羽根状5条集合沈線 踏碇式	縄文前期前半
34	26	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(5.9)	ナデ	ナデ	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、 白色粒、雲母	良好		縄文中期後半 曾利II式前後
35	26	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(5.1)	ナデ		にふい糖 7.5YR6/4	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文条線文、縦位波状沈線	縄文中期後半 曾利II式
36	26	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(11.5)	ナデ		赤褐 5YR4/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文、横位隆帯	縄文中期後半 曾利II式
37	26	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(8.0)	ナデ		赤褐 5YR4/6	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文条線文、3本単位横位隆帯	縄文中期後半 曾利II式
38	26	1区	NR2	縄文土器	深鉢			(10.0)	ナデ		明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文刺突文、縦位隆帯 輪積痕	縄文中期後半 曾利II式
39	26	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(6.2)	ナデ		明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、石英、 長石	良好	地文条線文	縄文中期
40	26	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(7.2)	ナデ		糖 7.5YR6/6	粗砂粒、石英、 長石	良好	内面炭化物付着	縄文中期後半 曾利II~III式
41	26	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(3.9)	ナデ		にふい赤褐 5YR5/4	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文、横位隆帯	縄文中期後半 曾利II式
42	26	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(6.0)	ナデ		にふい糖 7.5YR6/4	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文	縄文中期後半 曾利式後半
43	26	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(11.4)	ナデ		明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文、縦位波状隆帯	縄文中期後半 曾利III式
44	26	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(10.7)	ナデ		にふい糖 5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文	縄文中期後半
45	27	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(4.6)	ナデ		明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、石英、 長石	良好	地文刺突文、3本単位沈線(溝巻文か)	縄文中期後半 曾利III式
46	27	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(8.0)	ナデ	ナデ	にふい赤褐 5YR5/4	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好		縄文中期か
47	27	13区	NR2	縄文土器	深鉢			(1.4)	指頭痕	ヘラナデ	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好		縄文中期後半 曾利式
48	27	13区	NR2	縄文土器	台付土器			(2.8)	ナデ		糖 7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好	3本単位横位沈線、横位波状隆帯	縄文中期後半 曾利IIか
49	27	13区	NR2	縄文土器	両耳壺			(4.0)	ナデ		糖 5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文	縄文中期後半 曾利V(加曽利IV系)
54	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢 (卵形)			13.7 (7.1)	ナデ		にふい赤褐 5YR5/4	粗砂粒	良好	口縁部突起施有刺隆帯、沈線彫形区画 (区画内矢羽根状集合沈線・空白部縦文)	縄文後期前半 堀之内II式古段階
55	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.8)	ナデ		糖 7.5YR6/6	小礫	良好	口縁外側斜行条線 口唇部側3本単位沈線	縄文中期後半 曾利II式
56	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.5)	ナデ		糖5YR6/6	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文条線文、隆帯	縄文中期後半 曾利II式
57	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(12.2)	ナデ		明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 雲母、長石	良好	頸部横位沈線	縄文中期後半
58	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(11.3)	ナデ		糖 7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文、波状口縁	縄文中期後半 曾利I式(大木8系)
59	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.3)	ナデ		にふい赤褐 5YR5/4	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	波状口縁	縄文中期後半 曾利I式(大木8系)
60	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(3.5)	ナデ		糖 5YR6/6	粗砂粒	良好	地文条線文(窓枠状)内、刺突文	縄文中期後半 曾利II(加曽利II系)
61	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(3.6)	ナデ		糖 7.5YR6/6	雲母	良好	地文条線文	縄文中期後半 曾利II(加曽利II系)
62	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.4)	ナデ		糖 7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文(長方形区画)内に刺突文	縄文中期後半 曾利II(加曽利II系)
63	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.4)	ナデ		明褐 7.5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 雲母、長石	良好	地文条線文、隆帯、波状口縁	縄文中期後半 曾利II式
64	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(15.2)	ナデ		明赤褐5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文条線文 口縁横位隆帯(一部でU字懸垂)	縄文中期後半 曾利II~III式か
65	28	13区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.0)	ナデ		にふい糖 7.5YR6/4	粗砂粒	良好	地文条線文、2本単位隆帯重弧文	縄文中期後半 曾利III式

*法量()は複元形測値、()は残存値である。

表4 出土遺物観察表3 (土器類) 3

報告 番号	挿図 写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位	整形・調整技法		胎土色調	胎土含有物	焼成	備考	推定年代
						A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)					
66	28	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(8.0)	口縁小～体部		明赤褐5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文縄文 縦位隆帯(半截竹管の押圧あり)	縄文中期後半 曾利Ⅰ式
67	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.7)	体部小片		にぶい褐 5YR6/6	雲母、長石	良好	頸部横位沈線	縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
68	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.6)	体部小片		7.5YR6/6		良好	地文縄文	縄文中期か
69	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.6)	体部小片		灰褐 7.5YR4/2	雲母、長石	良好	地文縄文	縄文中期か
70	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.0)	口縁～体部		橙7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文縄文 突起(欠損)あり、把手か	縄文中期後半 曾利後半
71	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.2)	体部小片		にぶい黄橙 10YR6/4		良好	地文縄文、横位隆帯	縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
72	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.0)	体部小片		明褐 7.5YR5/6	雲母、細砂粒	良好	地文縄文、横位沈線 2本単位沈線重弧文	縄文中期後半 曾利Ⅲ頃か
73	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.0)	体部		褐灰 10YR4/1	粗砂粒、白色粒	良好	沈線2種(うち一つは2本単位) 刺突文	縄文中期後半 曾利式か
74	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.2)	体部小片		にぶい橙 7.5YR6/4	雲母、長石	良好	地文縄文・刺突文、3本単位隆帯(溝巻文か)	縄文中期後半 曾利Ⅰ式(新)
75	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(8.0)	体部小片		暗赤褐 5YR5/6	細砂粒	良好	地文刺突文、3本単位沈線	縄文中期後半 曾利Ⅰ式(新)
76	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(9.7)	体部小片		橙 7.5YR7/6	長石、細砂粒	良好	地文刺突文、3本単位沈線	縄文中期後半 曾利Ⅰ式(新)
77	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(9.0)	体部		褐 7.5YR4/3	雲母	良好	地文刺突文	縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
78	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(4.0)	体部小片	ナデ	暗褐 7.5YR5/8		良好		縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
79	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.7)	体部小片	ナデ	明赤褐 5YR5/6	雲母、長石	良好	地文条線文、隆帯	縄文中期後半 曾利Ⅱ式
80	29	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(6.7)	体部小片	ナデ	明赤褐 5YR5/6		良好	地文条線文、縦位隆帯(3本単位か)	縄文中期後半 曾利Ⅱ式
81	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(8.5)	体部小片	ナデ	暗褐 7.5YR5/6	雲母	良好	地文条線文	縄文中期後半 曾利Ⅱ式
82	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.5)	体部	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/3	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	縦位波状隆帯(2本単位か) 地文条線文、3本単位隆帯	縄文中期後半 曾利Ⅱ式
83	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.7)	体部小	ナデ	橙5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文、ホタン状貼付	縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
84	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(5.1)	底部小片	ナデ	橙 7.5YR6/6	長石、小礫	良好		縄文中期か
85	30	14	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(1.2)	底部		橙 7.5YR6/6	細砂粒	良好		縄文中期後半
86	30	15	1区	NR3	縄文土器	浅鉢			(3.7)	口縁小片	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母	良好	地文縄文	縄文中期後半
87	30	15	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(11.7)	X字把手		橙 7.5YR6/6	雲母、細砂粒	良好		縄文中期後半
88	30	15	1区	NR3	縄文土器	深鉢	10.3		2.2	X字把手		橙 5YR6/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
89	30	15	1区	NR3	縄文土器	深鉢			(7.4)	X字把手		明赤褐 5YR5/6	雲母	良好		縄文中期後半 曾利Ⅱ～Ⅲ式
94	31	15	1区	遺構外 (第2面)	縄文土器	深鉢			(2.7)	体部小	ナデ	赤褐 5YR4/6	細砂粒、白色粒	良好	沈線による格子目文	縄文中期初頭 五鏡ヶ台Ⅰ式
95	31	15	1区	遺構外 (第2面)	縄文土器	深鉢			(3.4)	体部	ナデ	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 黒色粒	良好	地文条線文	縄文中期初頭 五鏡ヶ台Ⅰ式
96	31	15	1区	遺構外 (第2面)	縄文土器	深鉢			(3.0)	体部	ナデ	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒、黒色雲母	良好	条線文、横位平行沈線(2本単位か) 玉尚ぎ三叉状モチーフ	縄文中期初頭 五鏡ヶ台Ⅰ式
97	31	15	1区	遺構外 (第2面)	縄文土器	深鉢			(4.4)	体部	ナデ	明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 黒色粒	良好	磨滅著しい	縄文中期初頭 五鏡ヶ台Ⅰ式
98	31	15	1区	遺構外 (第2面)	縄文土器	深鉢			(7.6)	体部	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文縄文、沈線によるY字状文	縄文中期初頭 五鏡ヶ台Ⅰ新～Ⅱ古
99	31	15	1区	遺構外 (第2面)	縄文土器	深鉢			(7.5)	口縁部小	ナデ	にぶい赤褐 5YR4/4	粗砂粒含、白色 粒、雲母、赤色粒	良好	沈線によるクラック状懸垂文	縄文中期初頭 五鏡ヶ台Ⅰ(新)式か

*法量()は復元測値、< >は残存値である。

表5 出土遺物観察表4 (土器類) 4

報告 番号	写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位		整形・調整技法		胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代
						A	B	C	内面(裏面)	外面(表面)	底面	内面	外面					
100	31	15	1区	縄文土器	深鉢				口縁小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6	雲母	良好	地文刺突文、つなぎ弧文	縄文中期後半 曾利II~III式	
101	31	15	1区	縄文土器	深鉢				口縁小	ナデ			にふい橙 7.5YR6/4	粗砂粒、白色粒	良好	地文縄文 口縁部文様帯(溝巻つなぎ弧文)	縄文中期後半 曾利I~II(大木系)	
102	31	15	1区	縄文土器	深鉢				口縁小片	ナデ			黒褐 10YR2/2	細砂粒	良好	地文縄文、縦位隆帯(波状溝)	縄文中期か	
103	31	15	1区	縄文土器	深鉢				口縁小	ナデ			にふい橙 7.5YR6/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文条線文	縄文中期後半 曾利II頃	
104	31	15	1区	縄文土器	深鉢				底部	ナデ			にふい橙 7.5YR6/4	粗砂粒、白色粒	良好			
105	31	15	1区	縄文土器	深鉢				体部小	ナデ			明赤褐5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 金色雲母	良好	割腹痕(X字扣手型) 外面い爆付着	縄文中期後半 曾利II式か	
106	31	15	1区	縄文土器	深鉢				体部	ナデ			にふい橙 5YR5/4	粗砂粒、白色粒	良好	地文縄文	縄文中期後半 曾利II~III式	
107	31	15	1区	縄文土器	深鉢				体部	ナデ			橙 5YR6/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒、雲母	良好		縄文中期後半 曾利I~II式	
108	31	16	1区	縄文土器	深鉢				体部	ナデ			にふい橙 7.5YR6/3	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文条線文、隆帯・隆帯重文(3本単位)、割腹痕 (X字状扣手付きか)	縄文中期後半	
109	31	16	1区	縄文土器	深鉢				体部小	輪積痕			にふい橙 2.5YR4/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒、雲母	良好	内面) タール状付着物		
110	32	16	1区	縄文土器	深鉢				体部小片	ナデ			にふい黄橙 10YR6/3	雲母、長石	良好	地文縄文、縦位波状隆帯	縄文中期後半 曾利II~III式	
111	32	16	1区	縄文土器	深鉢				体部小片	ナデ			褐 7.5YR4/4	長石	良好	地文刺突文、波線	縄文中期後半 曾利II~III式	
112	32	16	1区	縄文土器	深鉢				体部小片	ナデ			明赤褐 5YR5/6	雲母、長石	良好	地文条線文	縄文中期後半 曾利II~III式	
113	32	16	1区	縄文土器	深鉢				体部小	ナデ			明赤褐2.5Y5/6 にふい橙 7.5YR6/4	粗砂粒、白色粒	良好	地文刺突文	縄文中期後半 曾利III~IV式	
114	32	16	1区	縄文土器	深鉢				体部	輪積痕、ナデ			明赤褐5YR5/6	粗砂粒、白色粒	良好			
115	32	16	1区	縄文土器	深鉢		(4.8)		底部1/2	ナデ			明赤褐 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒	良好			
116	32	16	1区	縄文土器	浅鉢				口縁小	ナデ			にふい赤褐 5YR5/3	細砂粒、白色粒	良好	地文刺突文	縄文中期後半	
117	32	16	1区	縄文土器	鉢		(27.6)		口縁~体部	ナデ			橙 5YR6/6	粗砂粒、白色粒、 雲母	良好	地文縄文、頸部隆帯波状	縄文中期 曾利後半	
118	32	16	1区	縄文土器	壺				口縁小	ナデ			にふい橙 5YR7/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒、雲母	良好	縦位2本単位平行波状隆帯 摩滅著しい(水流によるか)	縄文晩期	
122	33	16	2区	土師器	蓋(身)				体部小	ナデ			明赤褐 5YR5/6	細砂粒、赤色粒、 白色粒	良好	須臾器蓋の残破	古墳後期	
123	33	16	2区	土師器	高坏				体部	ナデ			明赤褐 2.5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		古墳後期か	
124	33	16	2区	須臾器	蓋				体部	当具痕(同心円)			灰 N5/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期~後期	
125	33	16	2区	須臾器	蓋				体部小	当具痕(同心円)			灰褐 10YR4/1	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期~後期	
126	33	16	2区	須臾器	蓋				体部小	ロク口整形			灰白 10YR7/1	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期~後期	
127	33	16	2区	須臾器	壺		(13.4)		口縁小~頸部				褐灰 7.5YR6/1	細砂粒、黒色粒	良好	腹の可能性あり	古墳後期	
128	33	16	2区	土師器	蓋				口縁部小	ハケ目			にふい橙 7.5YR6/4	粗砂粒、長石、 赤色粒	良好		古墳中期か	
129	33	16	2区	須臾器	蓋				体部	当具痕(扇状)			灰 N4/0	粗砂粒、長石	良好		古墳中期~後期	
130	33	16	2区	須臾器	蓋				体部	タタキ目(平行)			灰 N6/0	細砂粒、長石	良好		古墳後期か	
131	33	16	2区	灰釉陶器	壺				底部	ロク口ナデ			灰白 5Y7/1		良好		奈良・平安	
132	33	17	2区	土師器	台付蓋				脚部	ケズリ、ナデ			明赤褐 5YR5/6	雲母	良好		古墳前期 4C後~5C前	

*法量()は復元表測値、()は残存値である。

表6 出土遺物観察表5 (土器類) 5

報告 番号	挿図 写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位	整形・調整技法			胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代
						A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)	底部	内面	外面				
133	17	2区	SD2	土師器	直口壺	(8.8)		(2.8)	ナデ	ミガキ		にふい縄 7.5YR5/3	にふい縄 7.5YR5/3	雲母	良好		古墳中期 5C中葉	
134	17	2区	SD2	須恵器	甕		(5.7)	当具痕(磨状)	タタキ目(格子)		灰 5Y4/1	襷灰 7.5YR6/1		良好	外) スス付着	古墳中期 5C後~6C前		
135	17	2区	SD4	土師器	甕		(3.8)	指頭痕・輪稜痕	ハケ後ヘラミガキ		襷灰 7.5YR4/1	襷灰 7.5YR5/4	雲母・長石	良好		古墳中期 5C前葉か		
136	17	2区	SD4	須恵器	酒杯 (蓋)		(3.6)	ロク口成形	沈線		襷灰 7.5YR5/1	襷灰 7.5YR5/1		良好		古墳中期~後期		
137	17	2区	SD4	須恵器	甕		(4.8)	当具痕(磨状)	タタキ目(平行)		襷灰 7.5YR4/1	襷灰 7.5YR4/1		良好		古墳中期~後期		
138	17	2区	SD5	土師器	台付甕 (S字状口縁)	(11.0)	(6.2)	ハケ後ヘラケズリ 指頭痕	ハケ目		明赤縄 5YR5/6	明赤縄 5YR5/6	雲母	良好	S字状口縁(D類)	古墳前期 4C後~5C前		
139	17	2区	SD5	須恵器	坏	(4.6)	(0.7)	ロク口成形	ヘラ削り		黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1		良好		古墳中期~後期		
140	17	2区	SD5	須恵器	甕		(7.2)	当具痕(磨状)	タタキ目(平行)		襷灰 10YR5/1	襷灰 10YR5/1		良好		古墳中期~後期		
141	17	2区	遺構外 (第1面)	縄文土器	深鉢		(3.9)	ナデ	沈線		襷	襷	長石	良好	有刻摩線	縄文後期前葉 堀之内2式		
142	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	塊または鉢	(16.4)	(3.8)	ヘラミガキ	ヘラケズリ ハケ目		襷	襷		良好		古墳前期		
143	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	小型丸底鉢	(12.0)	(3.2)	ヘラミガキ	ヘラケズリ ナデ		にふい縄 7.5YR6/4	にふい縄 7.5YR6/4		良好		古墳前期 (4C後~5C前)		
144	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	器台		(4.6)	ヘラケズリ	ミガキ		襷	襷		良好	脚頂部に穿孔	古墳前期		
145	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏		(2.2)	ケズリ後ミガキ	ナデ		明赤縄 5YR5/6	明赤縄 5YR5/6		良好		古墳前期		
146	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏		(8.6)	ナデ	ヘラミガキ		襷	襷		良好		古墳中期 5C前葉か		
147	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏		(3.8)	指頭痕 ヘラケズリ	ヘラケズリ		襷	襷	長石	良好				
148	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏		(3.2)	ヘラケズリ	ヘラミガキ		にふい縄 7.5YR5/4	にふい縄 7.5YR5/4		良好	穿孔あり	古墳前期		
149	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏	(20.0)	(1.8)	ロクロナデ	ヘラミガキ		明縄	明縄	雲母	良好	穿孔あり	古墳前期		
150	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏	(11.0)	(2.2)	ヘラケズリ	ヘラミガキ		襷	襷		良好	穿孔あり	古墳前期		
151	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏	(11.0)	(2.7)	ヘラケズリ	ヘラミガキ		襷	襷		良好		古墳前期		
152	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	高坏	(9.0)	(2.9)	ナデ	ナデ		襷	襷	雲母	良好		古墳中期		
153	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)	(13.6)	(3.2)	ナデ	ハケ目		襷	襷		良好	S字状口縁(D類)	古墳前期 4C後~5C前		
154	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)	(14.0)	(2.1)	ヘラナデ	ケズリ、ナデ		にふい黄縄 10YR5/4	にふい黄縄 10YR5/4		良好	S字状口縁	古墳前期		
155	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)	(15.0)	(1.7)	ヘラケズリ	ナデ		襷	襷	雲母	良好	S字状口縁	古墳前期		
156	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)	(15.4)	(1.9)	ナデ	ナデ		灰襷	灰襷		良好	S字状口縁	古墳前期		
157	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)	(15.8)	(2.0)	ナデ	ハケ目		襷	襷	雲母	良好	S字状口縁 外) スス付着	古墳前期		
158	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)		(2.8)	ナデ	ハケ		襷	襷	長石	良好	S字状口縁台付甕(B類)か	古墳前期(4C中)		
159	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)		(3.5)	ナデ	ハケ		10YR4/4	7.5YR6/8		良好	S字状口縁台付甕(B類)か	古墳前期(4C中)		
160	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)		(3.4)	ナデ	ハケ		10YR6/3	10YR6/3	雲母	良好	S字状口縁台付甕(B類)か	古墳前期		
161	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)		(8.4)	ナデ	ハケ目		にふい赤縄 5YR5/4	にふい赤縄 5YR5/4	雲母	良好	S字状口縁(D類)か	古墳前期		
162	17	2区	遺構外 (第1面)	土師器	台付甕 (S字状口縁)		(3.7)	ナデ	ハケ目		5YR5/4	明赤縄 5YR5/6	雲母	良好	S字状口縁	古墳前期		

*法量()は復元測値、< >は残存値である。

表7 出土遺物観察表6 (土器類) 6

報告 番号	写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位		整形・調整技法		胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代
						A	B	C	内面(裏面)	外面(表面)	底面	内面	外面					
163	35	17	2区	土師器	台付甕 (S字状口)			(3.0)	体部小片	ナデ	ハケ目	明赤褐 2.5YR5/6	縞 5YR6/6		良好	S字状口縁か	古墳前期	
164	35	17	2区	土師器	台付甕 (S字状口)		(16.1)	(2.3)	脚部小	ナデ	ナデ	明赤褐 5YR5/6	縞 5YR5/6	雲母	良好	S字状口縁か	古墳前期	
165	35	17	2区	土師器	台付甕 (S字状口)		(5.6)	(2.7)	脚部小片	ナデ	ナデ	縞 7.5YR6/6	縞 7.5YR6/6	雲母・長石	良好	S字状口縁か	古墳前期	
166	35	17	2区	土師器	甕			(2.7)	口縁部小	口クロナデ ハラケズリ	口クロナデ ハラケズリ	縞 7.5YR6/6	縞 7.5YR6/6		良好	外) スス付着	古墳中期～後期	
167	35	18	2区	土師器	直口壺	(16.0)		(3.4)	口縁部小片	ミガキ	ハラケズリ ナデ	にぶい縞 7.5YR5/4	縞 7.5YR5/4		良好		古墳前期～中期	
168	35	18	2区	土師器	直口壺	(10.6)		(6.0)	口縁部小	ミガキ	ミガキ	黄縞 7.5YR7/8	縞 7.5YR7/8	赤色粒	良好		古墳前期 4C中	
169	35	18	2区	土師器	直口壺			(3.6)	体部小	ミガキ	ミガキ	縞 7.5YR7/6	縞 7.5YR7/6		良好		古墳前期	
170	35	18	2区	土師器	壺			(7.3)	体部小	口クロナデ	ミガキ	縞 7.5YR6/6	縞 5YR5/8	雲母・長石	良好		古墳中期～後期	
171	35	18	2区	土師器	小壺	(8.0)		(3.4)	口縁部小片	ハケ目 ハラケズリ	ハラケズリ	明赤褐 5YR5/6	縞 5YR5/6	雲母	良好		古墳前期～中期	
172	35	18	2区	土師器 (手捏ね)	小壺	(5.2)	4.0	8.3	口縁部1/3～ 底部完	ナデ	ハラケズリ	縞 5YR6/8	縞 5YR6/8		良好		古墳後期	
173	35	18	2区	土師器 (手捏ね)	小壺			(5.9)	体部小片	ナデ	ハラケズリ	明赤褐 5YR5/6	縞 5YR5/6	雲母	良好			
174	35	18	2区	須置器	甕			(3.1)	頸部1/8	口クロナデ 当具痕、指跡痕	口クロ ナデ	灰 N5/	縞 N5/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期	
175	35	18	2区	須置器	甕			(6.5)	体部小	当具痕(同心円)	タタキ目(楕円)	灰 N4/	縞 N4/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期	
176	36	18	2区	須置器	甕			(5.9)	体部小	当具痕(扇状)	タタキ目(平行)	赤灰 5Y3/1	縞 2.5YR4/1	細砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		古墳中期～後期	
177	36	18	2区	須置器	甕			(4.3)	体部小		タタキ目	灰 N7/	縞 N7/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期	
178	36	18	2区	須置器	甕			(2.8)	体部小	当具痕(扇状)	口クロ後 タタキ目(平行)	赤灰 5Y3/1	縞 2.5YR4/1	細砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		古墳中期～後期	
179	36	18	2区	須置器	壺			(6.3)	口縁部小	口クロナデ	楕型波状文	灰 N4/	縞 N4/	細砂粒、白色粒	良好		古墳中期～後期	
180	36	18	2区	縄文土器	深鉢			(3.6)	体部小	ナデ		褐灰 10YR4/1	縞 5YR5/6	粗砂粒、長石	良好	地紋刺突文、沈線渦巻弧文	縄文中期後半 曾利川式	
181	36	18	2区	土師器	高坏			(3.8)	脚部	ナデ	ハラナデ	明赤褐 5YR5/6	縞 5YR5/6	細砂粒、長石	良好		古墳前期	
182	36	18	2区	土師器	高坏			(2.5)	脚部	ナデ	ハケ目	縞 5YR6/6	縞 5YR6/6	細砂粒、長石	良好	穿孔あり	古墳前期	
183	36	18	2区	土師器	台付甕			(2.8)	口縁部	横ハケ目	横ハケ目	縞 5YR6/6	縞 5YR6/6	細砂粒、長石	良好	口縁部にキザミ	古墳前期 3C後～4C前	
184	36	18	2区	土師器	甕			(2.7)	口縁部小	ナデ	縦ハケ目	縞 5YR6/6	縞 5YR6/6	細砂粒、石英	良好		古墳前期 4C後～5C前	
185	36	18	2区	土師器	壺			(3.1)	口縁部小	横ミガキ	縦ハケ目	縞 5YR6/6	縞 5YR6/6	細砂粒、長石	良好		古墳前期 4C前	
186	36	18	2区	須置器	甕			(5.0)	体部小	当具痕(扇状)	タタキ目(楕目)	褐灰 10YR5/1	縞 10YR5/1	粗砂粒、長石	良好		古墳中期～後期	
187	36	18	2区	縄文土器	深鉢			(5.1)	体部小			にぶい黄縞 10YR7/3	縞 5YR4/6	粗砂粒、白色粒	良好	地紋刺突文、沈線渦巻弧文	縄文中期後半 曾利川～V式	
188	36	18	2区	土師器	台付甕 (S字状口縁)			(1.9)	口縁部小	台付甕 ハケ目	ハラナデ ハケ目	灰縞 7.5YR4/2	縞 5YR4/2	細砂粒、白色粒	良好	S字状口縁	古墳前期 4C後～5C前	
189	36	18	2区	土師器	台付甕			(2.8)	脚部	ナデ	ハケ目	明赤褐 5YR5/6	縞 5YR5/6	粗砂粒、石英、 長石	良好		古墳前期	
190	36	18	2区	土師器	甕			(2.9)	口縁部小	横ハケ目	縦ハケ目	にぶい赤縞 5YR5/4	縞 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		古墳前期か	
191	36	18	2区	土師器	甕			(2.9)	口縁部小	横ハケ目	横ハケ目	にぶい赤縞 5YR4/4	縞 5YR4/4	細砂粒、白色粒、 黒色粒	良好		古墳前期	
192	36	18	2区	土師器	甕			(3.4)	口縁部小	ナデ	斜ハケ目	明赤褐 5YR5/6	縞 5YR5/6	粗砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		古墳前期か	

*法量()は復元推測値、()は残存値である。

表8 出土遺物観察表7 (土器類) 7

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	調査区	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位	整形・調整技法		胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代
							A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)	内面	外面				
193	37	18	2区	遺構外 (第2面)	土師器	甕			(4.0)	口縁部小ハ	横ハケ目	縦ハケ目	にふい赤褐 5YR5/4	にふい赤褐 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		古墳前期か
194	37	18	2区	遺構外 (第2面)	土師器	甕		(9.0)	(3.7)	底部1/3	横ハケ目	ヘラナデ	にふい褐 7.5YR7/3	にふい褐 7.5YR7/3	粗砂粒、白色粒、 赤色粒	良好		古墳中期 5C中
195	37	18	2区	遺構外 (第2面)	土師器	壺			(4.8)	体部小	ハケ目	ミガキ	にふい褐 5YR5/4	にふい褐 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		
196	37	19	2区	トレンチ3	縄文土器	深鉢			(5.0)	口縁部	ナデ	沈線、ハケ目	縹	7.5YR7/6	霏母・長石	良好	縄文中期後半 曾利III~IV式 古墳前期 4C後~5C前	
197	37	19	2区	トレンチ3	土師器	小型丸底鉢	(13.5)		(3.2)	口縁部	ミガキ	ナデ	縹	5YR6/6		良好		
198	37	19	2区	トレンチ3	土師器	台付甕		(9.0)	(4.1)	脚部	ナデ	ハケ目 ヘラケスリ	縹	7.5YR5/3	霏母	良好		
199	37	19	2区	トレンチ3	土師器	甕	(12.0)		(4.0)	口縁部	ハケ目、キザミ	ハケ目、キザミ	縹	7.5YR6/8	霏母・長石	良好	古墳中期 5C中	
200	37	19	2区	トレンチ4	土師器 (手摺ね)	小壺	(4.2)		(4.3)	口縁~体部	ナデ	ナデ	縹	7.5YR7/6	霏母・長石	良好	古墳中期	
201	37	19	2区	トレンチ5	土師器 (S字状口縁)	台付甕			(4.2)	体部	ハケ目	ヨコナデ ナナメハケ目	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	霏母	良好	S字状口縁台付甕 (B類) か	古墳前期 4C中
202	37	19	2区	トレンチ5	土師器	壺			(2.8)	体部	ナデ	ナデ	にふい褐 7.5YR6/4	縹	7.5YR6/8	良好		古墳中期か

*法量 () は復元測定値、〈 〉 は残存値である。

表9 出土遺物観察表8 (石製品)

報告 番号	挿図 番号	写真 図版	調査区	出土地点	分類1	分類2	法量(cm)			重量(g)	特徴・備考
							A	B	C		
12	23	10	1区	SK5	黒曜石	石錐?	(2.0)	(1.8)	(0.55)	1.62	先端部欠損
20-2	24	11	1区	SK9	石製品	小玉	(1.3)	(0.7)	(0.4)	0.26	凝灰岩製 内窪部に穿孔時の擦過痕
50	27	13	1区	NR2	石製品	打製石斧	(18.9)	(10.0)	(2.2)	491.9	
51	27	13	1区	NR2	石製品	打製石斧	(4.6)	(3.2)	(0.7)	11.9	
52	27	13	1区	NR2	石製品	磨+敲石	15.6	5.4	3.8	444.3	
53	27	13	1区	NR2	石製品	磨+敲石	12.7	8.8	4.9	996.3	
90	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	11.6	4.7	1.2	89.5	
91	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	(8.2)	(4.9)	(1.2)	57.5	
92	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	11.5	4.1	2.6	164.8	粘板岩
93	30	15	1区	NR3	石製品	打製石斧	8.8	2.9	1.4	59.4	
119	32	16	1区	遺構外 (第2面)	石製品	打製石斧	8.4	6.3	2.0	131.3	
120	32	16	1区	遺構外 (第2面)	石製品	磨製石斧	5.1	2.1	0.8	17.1	
121	32	16	1区	遺構外 (第2面)	黒曜石	剥片石器	(2.4)	(1.8)	(1.0)	3.17	

*法量 () は復元測定値、〈 〉 は残存値である。

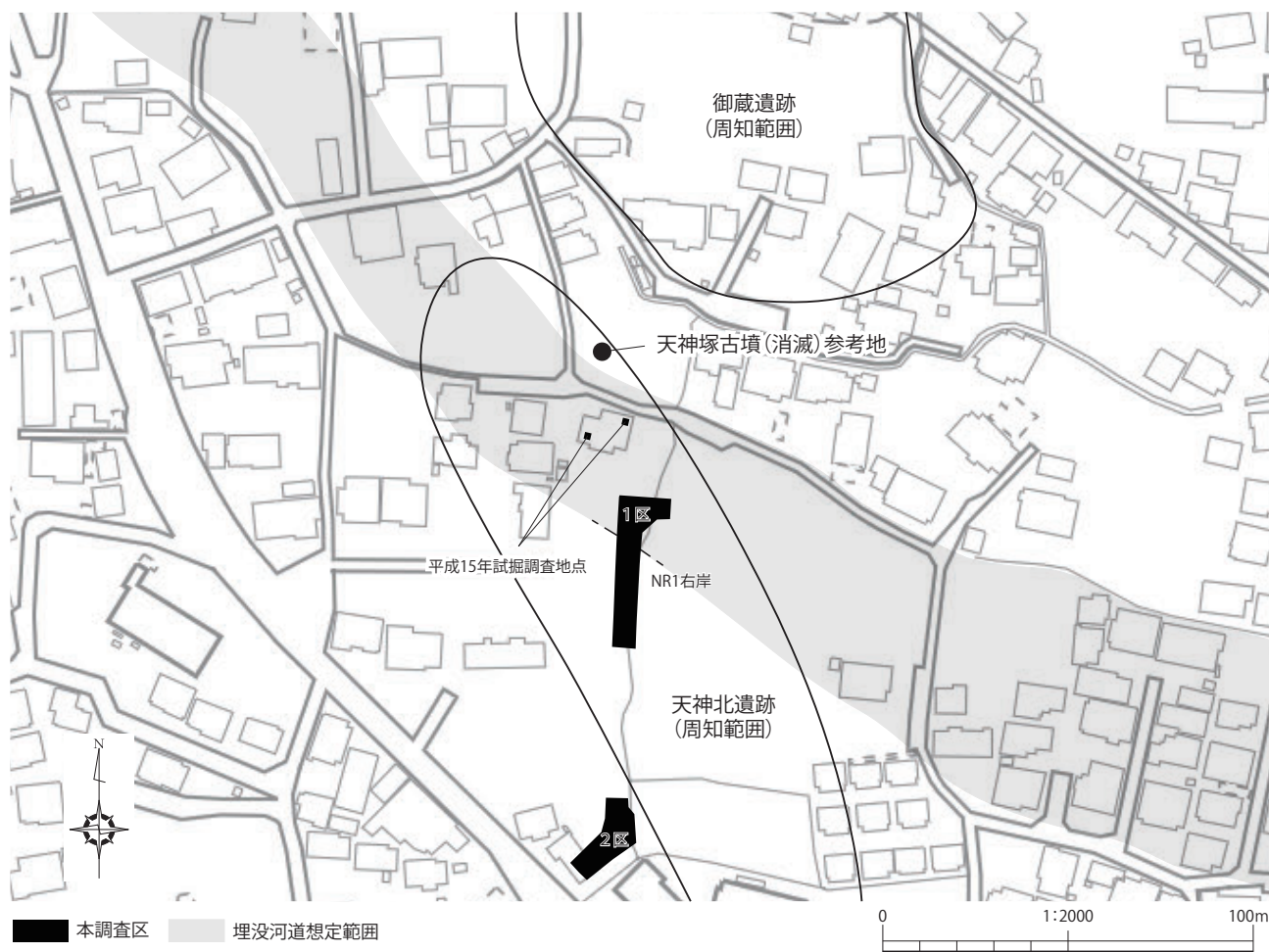
第5章 総括

天神北遺跡では、過去に2度の試掘調査が実施されたのみで、今回の調査が初の本格的な発掘調査であった。発掘調査の成果や近隣住民への聞き取りで得られた情報をまとめ、今後の調査への一助としたい。

第1節 1区の調査成果と今後の課題（第38図）

本調査で検出した平安時代の竪穴住居S I 1は埋没河道の上に構築され、遺構の埋土状況からS I 1もまた洪水により一息に埋没したと考えられる。天神北遺跡のほぼ中央に位置する1区においてS I 1以南からは同時期の遺構を一切検出できないことから、本調査で検出したS I 1は天神北遺跡における最南端の平安時代の住居である可能性があり、集落の中心は北側に展開することが想定される。天神北遺跡北側に隣接する御蔵遺跡は古墳・平安時代遺跡と周知されているが、調査事例は皆無であり、今後実施される発掘調査によってS I 1と同時期の集落が発見される可能性に期待したい。その際、現在周知されている天神北遺跡範囲の北端においては、平安期の遺構確認面直上の遺物包含層に該当する堆積土が「遺物が皆無に等しい分厚い砂層」である可能性が非常に高いため、分厚い砂層を地山と誤認したり、旧河道の下に遺構が遺存する可能性を排除してしまわないよう注意が必要である。平成15年の試掘調査では現地表下約30～60cmと約60cm以下に続く2層の砂層が確認されており、これらは本調査におけるV・VI層に該当する可能性がある。

近隣住民への聞き取りから「地域の古老が言うには天神北遺跡の北端を横断する道路はかつて河道であったと伝わる」といい、恐らく1区北端で確認したNR1がこの河道右岸の立ち上がりと考えられる。調査では最大幅約15mを測ってなお、左岸の立ち上がりが確認できなかったことから、幅30mを超える大規模な河道であったことが想定される。このような大規模河道であったからこそ、その存在が今日まで伝わった可



第38図 埋没河道想定範囲

能性と、当該道路直下には名残となる川筋がある程度後世まで存続していた可能性がある。

調査区の所在する千塚地域の西側縁辺を沿い南流する荒川は、『甲斐国志』に「荒ノ言ハ暴ナリ其ノ水暴流スルヨリ起リシ名ナルベシ」とある暴れ川であり、「河灘汎クコレヲ飯田河原ト称シタリ（略）」と称された範囲に千塚地域は属している。また、「武田ノ時大ニ防河ノ役ヲ興シテ横流ヲ治ム（略）」と信虎、信玄の甲斐国統治期に大規模な水害対策を行っているとの事がある。このように荒川は上流の荒川ダム完成以前は古くから水害をもたらしていたと伝わる。今回の調査では、縄文時代の遺構を埋没河道の下で検出し、この河道を埋没させた砂層から検出した平安時代の住居もまた河川氾濫土により埋没していることから、洪水被害と切り離せない土地柄であったことを再確認することとなった。

第2節 2区で確認したXI層と溝跡の関連性（第3・4・28・39図）

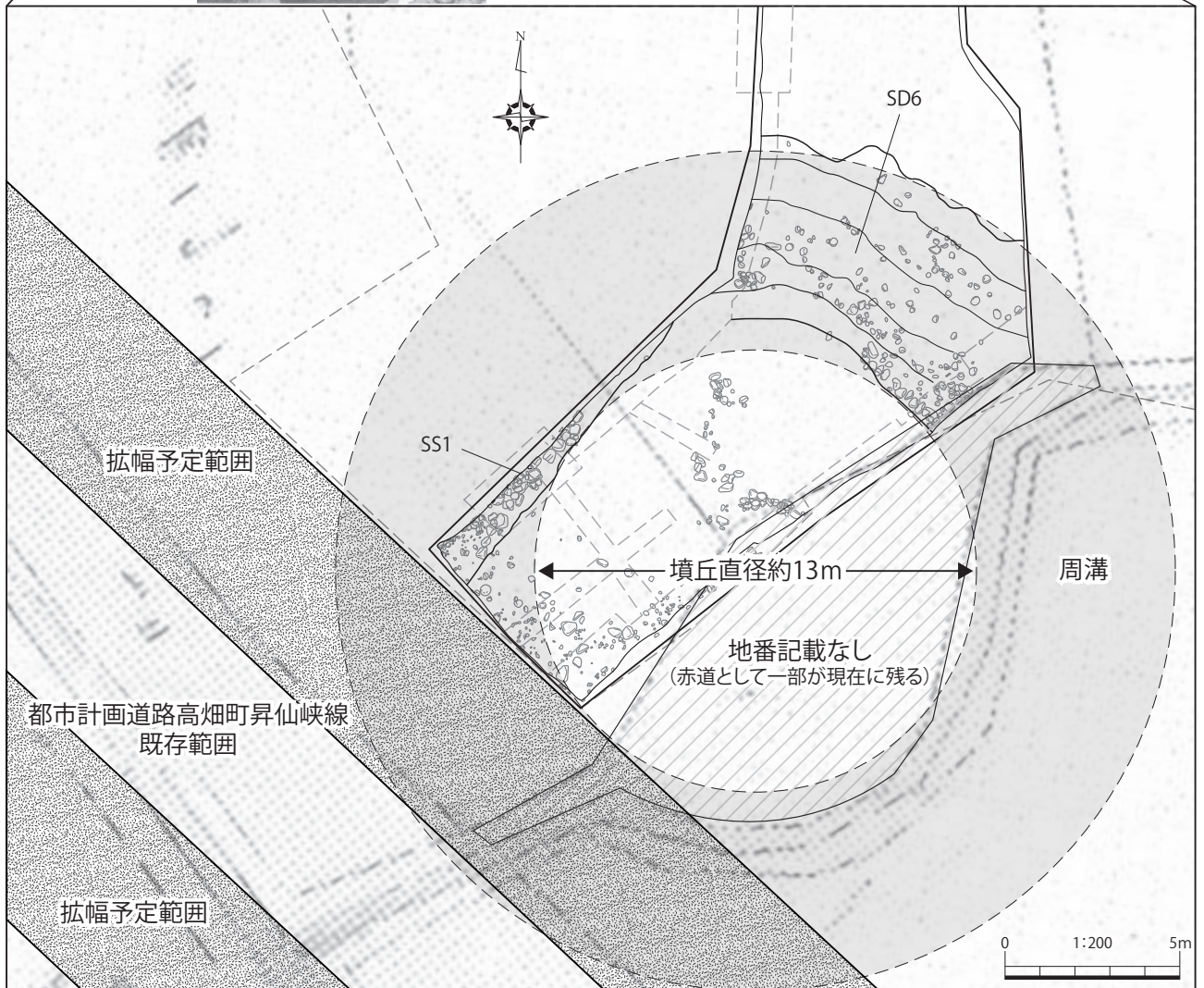
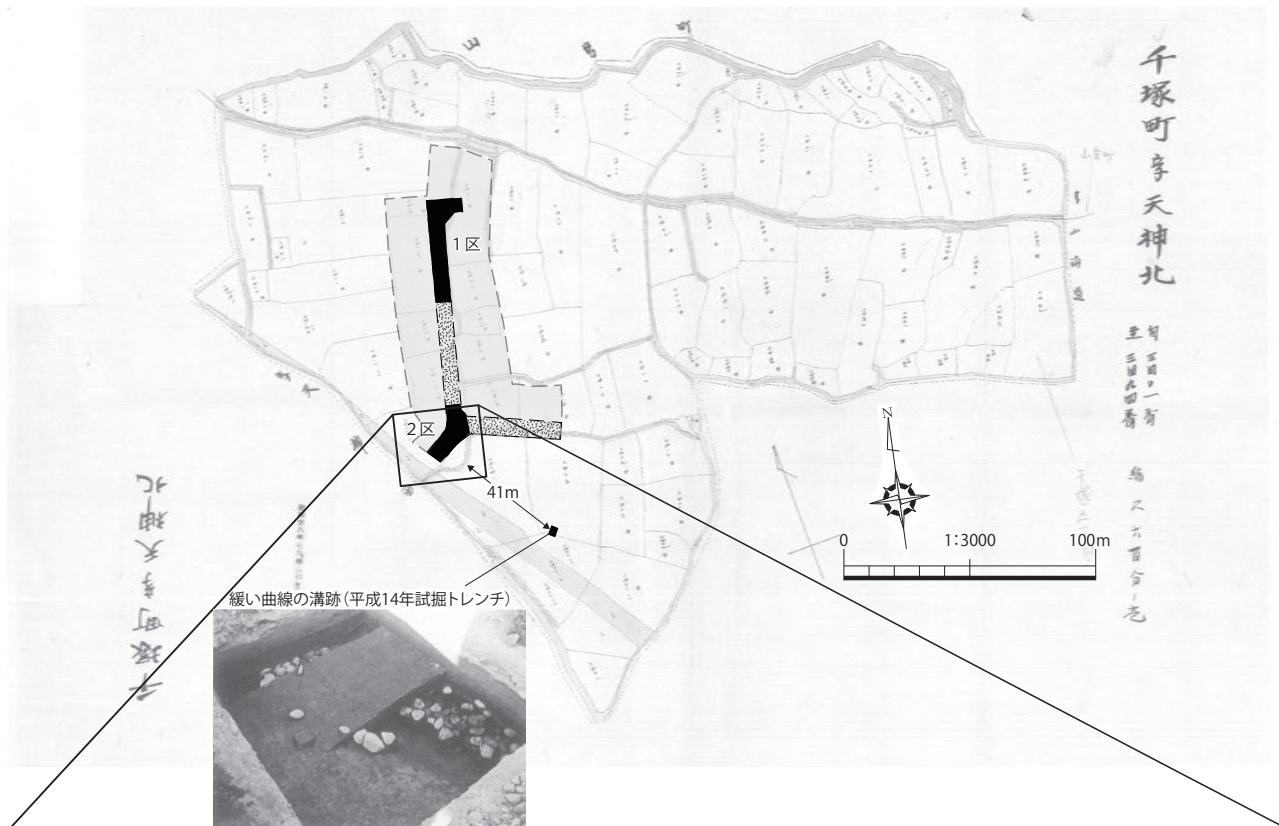
2区においては、甲府市教育委員会実施の試掘調査トレンチ9で水田床土（Ⅲ層）直下より古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器を含む堆積層が確認されたことから、本調査ではⅢ層までを表土掘削の対象とした。しかしながら、試掘トレンチ9付近で行った人力による包含層掘削では、Ⅲ層直下層からはS字状口縁台付甕（S字甕）や器台・有透孔高坏といった古墳時代前期の遺物を主体に包含する堆積層（XI層）が広がり、XI層直下より須恵器などの古墳時代後期の遺物を伴う遺構を検出するという矛盾が生じている（第3・4図）。2か所のサブトレンチ4・5を設定して堆積土層を観察した結果、各々層厚5～20cm程度の良く締まる堆積層が少なくとも3層以上重ねられていることと、層末端部に土止め状の礫を伴うことを確認した。このことから、このXI層は版築により人為的に盛り上げられた層であると考えられる（第21図）。なお、試掘トレンチ9で確認された古墳時代後期の遺物を含む堆積は、礫を伴う溝SS1の埋土であった。

SD6（第19・20図）は、埋没状況から2段階に分けられる溝跡で、上部の2段階目にあたる緩やかな弧を描く溝は、内径側立ち上がりに沿って石列状の礫群を伴うという特徴がある。遺構埋土の観察により、下層部の黒褐色粘土はゆるやかに沈殿した有機堆積で流水の形跡が認められないことから、周溝のような単体で完結する溝と考えられる。検出範囲から算出した溝の延伸部の予測線は内径約13m、外径約24mとなり、この予測線内にはSD6第2段階と同様にやや弧を描き並ぶ石列状の礫群を伴う溝SS1とサブトレンチ5（N-52°-E）14層が納まる（第21図）。2区の堆積土層は、計4条の擁壁と暗渠によって分断・有段化されていたため同時期の遺構でも標高差が生じていたが、遺構埋土や遺物内様からSD6第2段階とSS1は互いに延伸部の関係である可能性がある。このような版築を見せるXI層や弧を描き単体で完結する溝SD6・SS1などは古墳の存在を窺わせる。

同地域に所在する加牟那塚古墳は、古墳時代後期の横穴石室をもつ円墳で外部施設として葺石が確認されている。このことから、SD6の内径やSS1に見られる礫も古墳の葺石である可能性があるが、残念ながら今回の調査では埴輪などの古墳と決定づける遺物が出土していないため、あくまで溝跡としての報告とした。しかし、昭和20年複写の地籍図（第39図）において、半円形をした地番未記載地とSD6の延伸部予測線が重なることから古墳が存在した可能性は大いにあり得る。その場合の規模・形状は墳丘直径約13mで幅約5mの周溝を伴う円墳を想定している。

本調査で検出したSD6・SS1や平成14年の試掘調査で確認された溝跡は「緩い弧を描く」「礫を伴う」という共通点を持ち、出土遺物から古墳時代後期の円墳の周溝の可能性を窺わせるが、一部分のみの検出にとどまるため確証を得るものではない。また、平成14年試掘検出の溝については、古墳周溝と当時の考察もあるが地籍図と重ねると地境と重複することから、区画溝の可能性も有している。

本調査区の西側に面する都市計画道路高畑町昇仙峡線では、道路拡幅等の街路事業に伴う発掘調査が平成25年から順次実施されている。本調査区付近においても既存道路の両袖が幅約5mずつ公有化が進んでおり、これら「緩い弧を描く」「礫を伴う」溝の延伸部が発掘調査の対象範囲に含まれることは確実と言えることから、今後実施される調査によって検出されるであろう溝跡の持つ可能性の一つとして古墳を提示し、



第39図 古墳の位置と推定規模 (『千塚町字天神北地籍図 (昭和20年複写)』に加筆)

いずれ遺構の性格が解明されることを期待する。その際は、本地点で古墳時代前期の遺物も少なからず出土しているため、周囲に古墳時代前期の遺構が存在する可能性も考える必要がある。

引用・参考文献

論文・地誌等

- 秋山敬 2003 『甲斐の荘園』 甲斐新書刊行会
磯貝正義 1984 「古代の甲府 - 青沼・表門二郷を中心として -」
『甲府市史研究 創刊号』 甲府市市史編さん委員会
小林健二 2015 「甲斐の古墳時代と土器 - 編年と移動を考える -」
『山梨県考古学協会誌 第23号 特集: 移動を考える』 山梨県考古学協会
一蓮寺過去帳刊行会 2006 『影印対照 一蓮寺過去帳』 地人館
こうふ開府 500 年記念誌編集委員会 2019 『甲府歴史ものがたり』
甲府市水道局水道史編さん委員会 1988 『甲府市水道史 歴史編』
甲府市市史編さん委員会 1991 『甲府市史 通史編 第一巻 原始 古代 中世』
甲府市市史編さん委員会 1992 『甲府市史 資料編 第一巻 原始 古代 中世』
甲府市市史編さん委員会 1993 『甲府市史 別編Ⅲ 甲府の歴史』
甲府市文化財調査審議委員会編 1981 『甲府の歴史と文化』
甲府市役所 1918 『甲府略誌』
編集委員会 (編集委員長 石原孝徳) 2018 『千塚・湯村温泉の歴史～遺跡 (史跡) と文化遺産～』
松平定能 文化 11 年 (1814) 『甲斐国志』 (大日本地誌体系 [雄山閣版 1968-1982] 収録 『甲斐国志』 第一～五巻)
山梨教育会西山梨郡支会 1926 『西山梨郡誌』
山梨県 1998 『山梨県史 資料編 1 原始・古代 1 考古 (遺跡)』
山梨県 1999 『山梨県史 資料編 2 原始・古代 2 考古 (遺構・遺物)』
山梨県考古学協会 2021 『曾利式土器とその周辺 (山梨県考古学協会 2021 年度研究集会 資料集)』
山梨県立博物館 2018 『文字が語る古代甲斐国』

報告書

- 甲府市教育委員会 2006 『甲府市内遺跡Ⅲ』 甲府市文化財調査報告 31
甲府市教育委員会 2007 『甲府市内遺跡Ⅳ』 甲府市文化財調査報告 35
甲府市教育委員会 2008 『甲府市内遺跡Ⅴ』 甲府市文化財調査報告 38
甲府市教育委員会 2009 『甲府市内遺跡Ⅵ』 甲府市文化財調査報告 41
甲府市教育委員会 2010 『甲府市内遺跡Ⅶ』 甲府市文化財調査報告 49
甲府市教育委員会 2011 『甲府市内遺跡Ⅷ』 甲府市文化財調査報告 59
甲府市教育委員会 2018 『甲府市内遺跡Ⅸ』 甲府市文化財調査報告 98
甲府市教育委員会 1973 『上石田遺跡 - 甲府盆地底部の中期縄文遺跡 - 発掘調査報告書』
甲府市教育委員会 2001 『米草遺跡 - 山宮町土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 14
甲府市教育委員会 2006 『八幡東遺跡 - 宅地造成に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 77
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2016
『榎田遺跡 - 計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 84
甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2016
『榎田遺跡 - 計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 91
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2017
『榎田遺跡 - 宅地造成工事に伴う甲府市千塚 5 丁目 3001-1・3002 番地の発掘調査 -』 甲府市文化財調査報告 95
甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2018
『榎田遺跡 - 計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 100
甲府市教育委員会 2004
『塩部遺跡Ⅰ - 山梨県都市計画道路「塩部開国橋線」道路改良工事に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 24
甲府市教育委員会 2005
『塩部遺跡Ⅱ - 山梨県都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良工事に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 30
甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2019
『塩部遺跡Ⅲ - 学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校建設に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 105
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2019
『緑が丘二丁目遺跡 - 県道天神平甲府線道路改良に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 104
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2022
『食糧工場遺跡 - 都市計画道路太田町逢沢線外 2 路線街路事業に伴う発掘調査報告書 -』 甲府市文化財調査報告 124
財団法人山梨文化財研究所 2002
『平石遺跡 - 都市計画道路「愛宕町下条線」道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
韮崎市教育委員会 1988
『坂井南 - 山梨県韮崎市坂井南遺跡発掘調査報告書 -』
北杜市教育委員会 2008
山梨県教育委員会 1984 『穂坂路』 山梨県歴史の道調査報告書 第 1 集
『梅之木遺跡Ⅶ - 縄文時代中期の集落遺跡確認調査報告書 -』 北杜市埋蔵文化財調査報告 第 26 集
山梨県埋蔵文化財センター 1993
『東山北遺跡 - 第 1～3 次調査 -』 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 79 集
山梨県埋蔵文化財センター 1996
『塩部遺跡 - 県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書 -』 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 123 集
山梨県埋蔵文化財センター 1997
『西田遺跡 - 第 2 次発掘調査報告書 -』 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 138 集



1区1面 全体完掘状況 (オルソモザイク写真)



1区1面 S11 礫検出状況・土層断面 北から



1区1面 S11 カマド検出状況 北西から



1区1面 S11 カマド支脚・遺物 (9甲斐型長胴甕) 出土状況 北西から

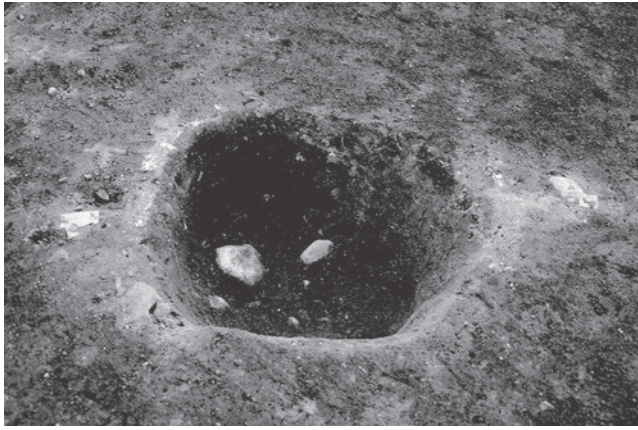


1区1面 NR1 (河道) 埋没土除去状況・北壁断面 南から

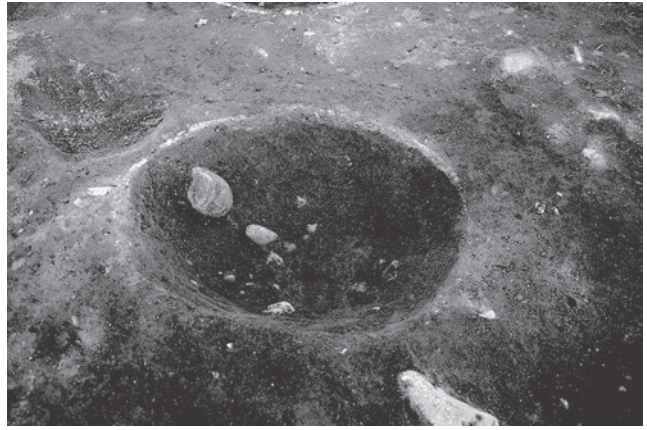


1区1面 S11 完掘状況 東から

図版2



1区1面 SK1 完掘状況 北東から



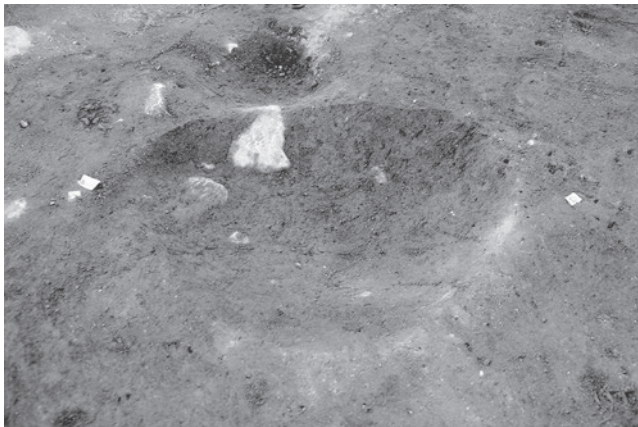
1区1面 SK2 完掘状況 北西から



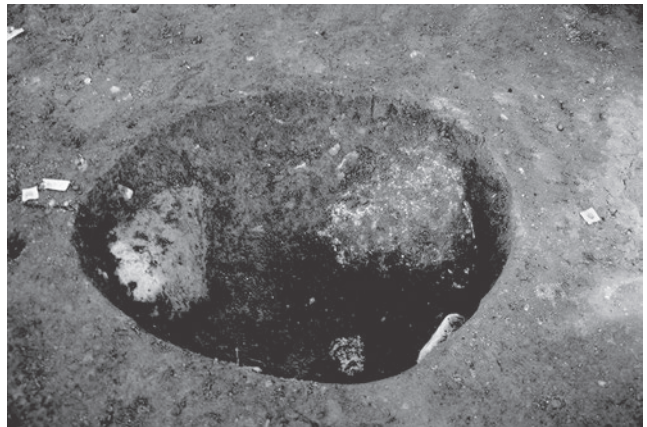
1区1面 SK3 完掘状況 北東から



1区1面 SK4 完掘状況 南から



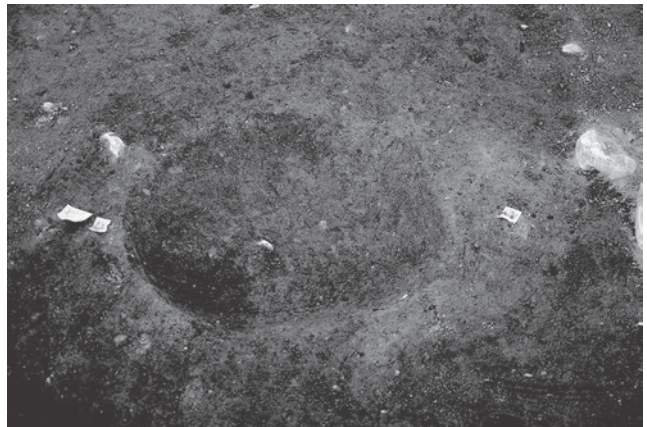
1区1面 SK5 完掘状況 南東から



1区1面 SK6 完掘状況 西から



1区1面 SK7 完掘状況 南西から



1区1面 SK8 完掘状況 西から



1区2面 全体完掘状況 (オルソモザイク写真)



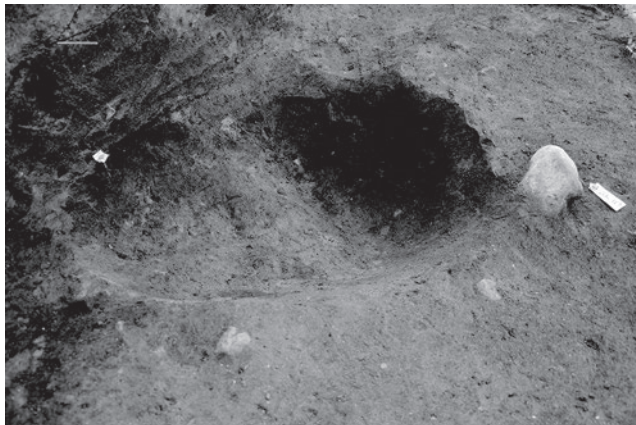
1区2面 SK9 土層断面 北から



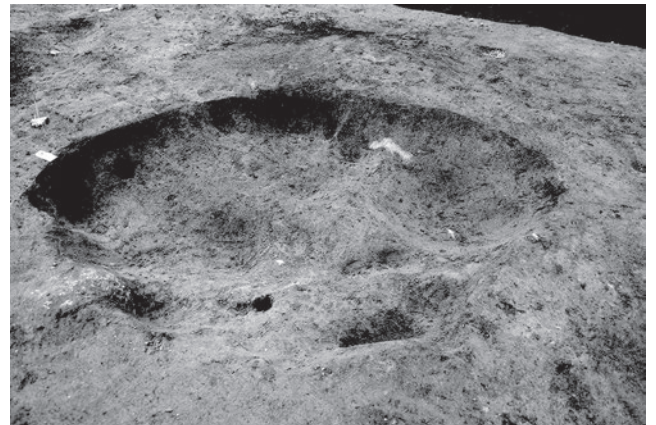
1区2面 SK9 埋甕内土壌除去状況 北から



1区2面 SK9 完掘状況 北から

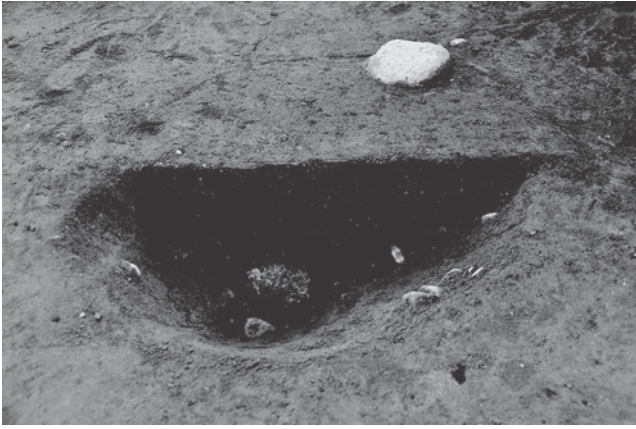


1区2面 SK10 完掘 北から

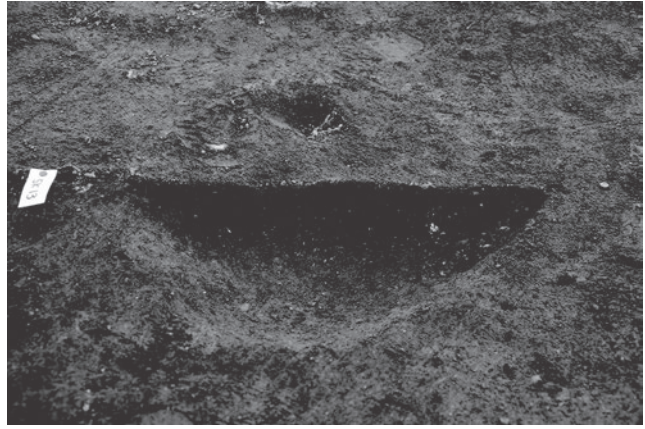


1区2面 SK11 完掘 東から

図版 4



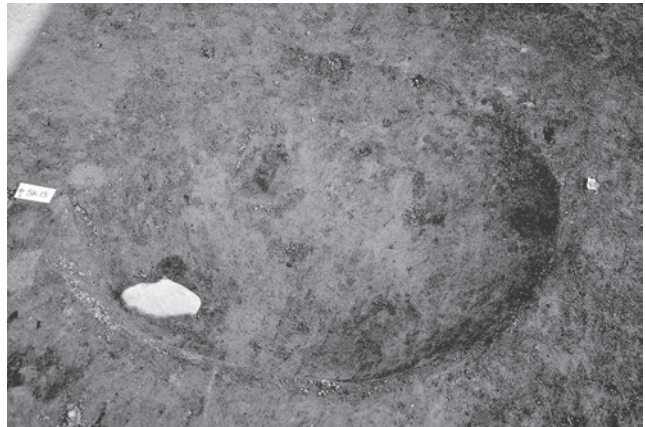
1区2面 SK12 半截状況 東から



1区2面 SK13 半截状況 南から



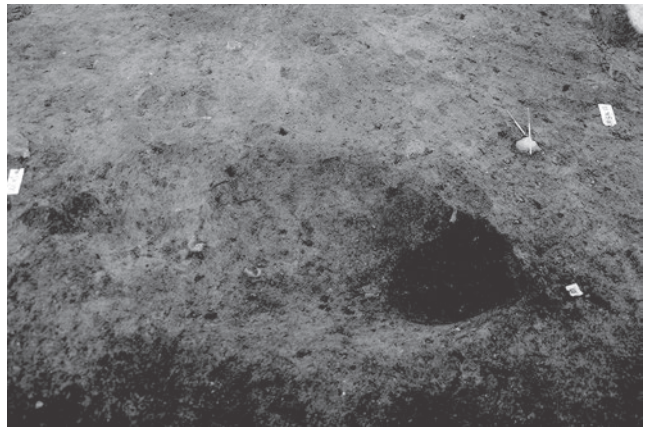
1区2面 SK14 半截状況 東から



1区2面 SK15 完掘状況 東から



1区2面 SK16 半截状況 北から



1区2面 SK17 完掘状況 南から



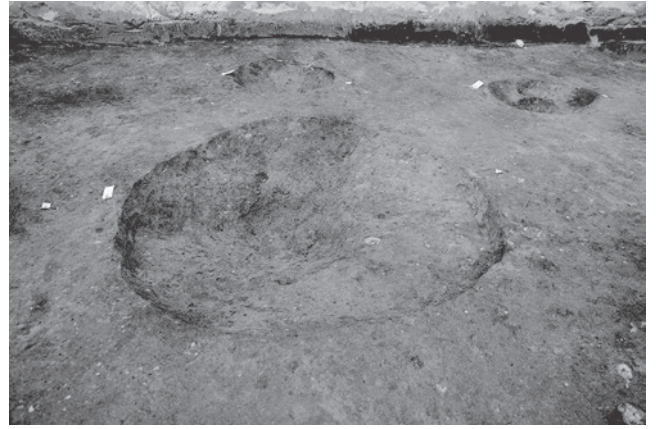
1区2面 SK18 完掘状況 南から



1区2面 SK19 完掘状況 南から



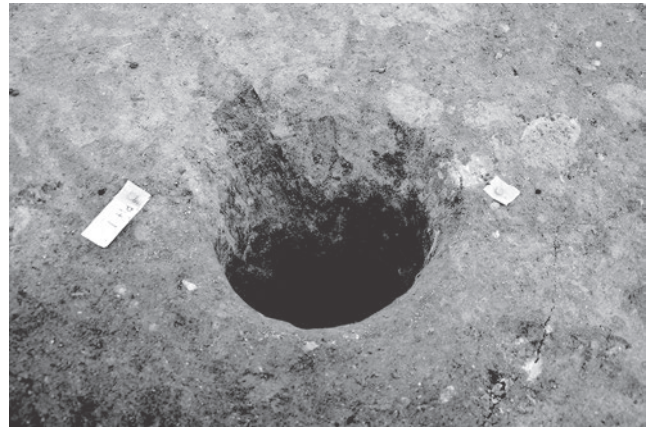
1区2面 SK20 完掘状況 南から



1区2面 SK21 完掘状況 南から



1区2面 SK22 完掘状況 南から



1区2面 SP1 完掘状況 南から



1区2面 NR2 遺物出土状況 北西から



1区2面 NR3 遺物出土状況 北西から



1区2面 NR3 下層確認 東から



1区2面 完掘状況 南東から



2区1面 全体完掘状況 (オルソモザイク写真)



2区1面 SS1 礫検出状況 西から



2区1面 SS1 土層断面 東から



2区1面 SS1 遺物 (127 須恵器壺) 出土状況 南東から



2区1面 SS2 礫検出状況 南から



2区1面 SS3 礫検出状況 北東から



2区1面 SK1 完掘状況 南東から



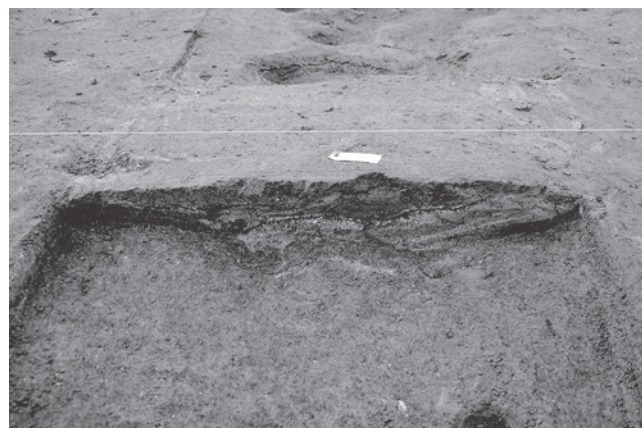
2区1面 SK2 完掘状況 北西から



2区1面 SD1~5 完掘状況 南東から



2区1面 SD1・5 土層断面 南東から



2区1面 SD2 土層断面 南東から



2区1面 SD3 土層断面 南東から



2区1面 SD4 土層断面 南東から



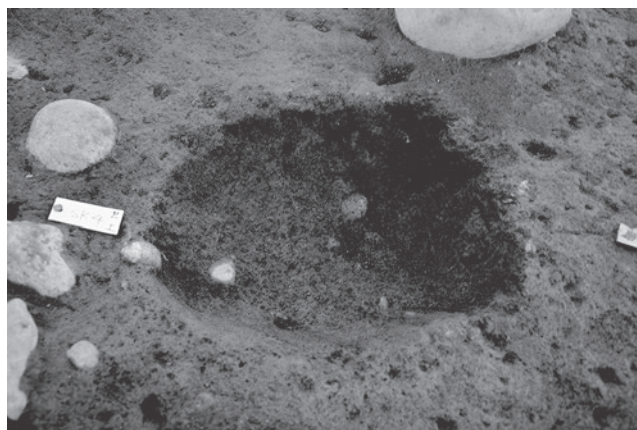
2区1面 サブトレンチ4 土層断面 南から



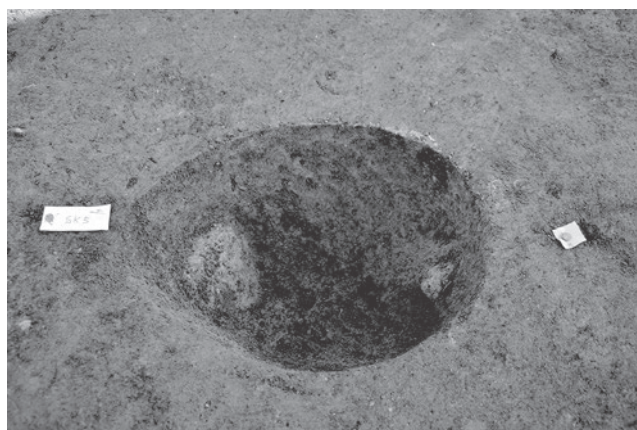
2区1面 サブトレンチ5 土層断面 西から



2区2面 全体完掘状況 (オルソモザイク写真)



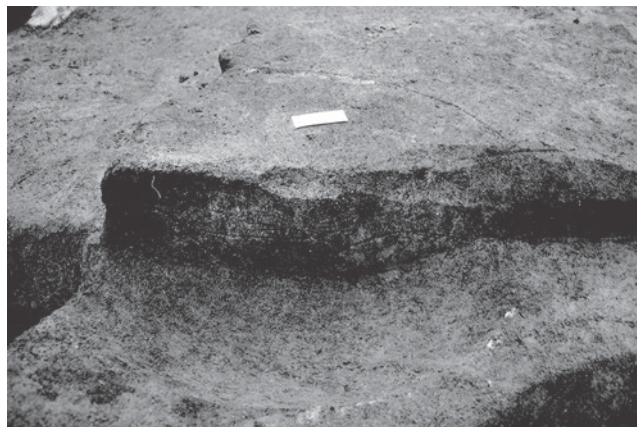
2区2面 SK4 完掘状況 南から



2区2面 SK5 完掘状況 北西から



2区2面 SK6 完掘状況 北東から



2区2面 SK7 半截状況 南から



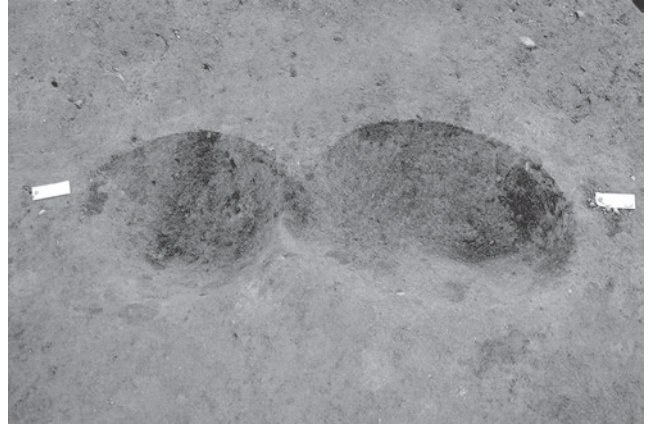
2区2面 SK8 完掘状況 北東から



2区2面 SK9 (左)・10 (右) 半截状況 東から



2区2面 SK11 半截状況 北から



2区2面 SK12 (左)・13 (右) 完掘状況 北から



2区2面 SD6 第2段階土層断面 東から



2区2面 SD6 第2段階礫検出状況 南東から



2区2面 SD6 第1段階(河道)土層断面 東から



2区2面 SD6 完掘状況 南東から



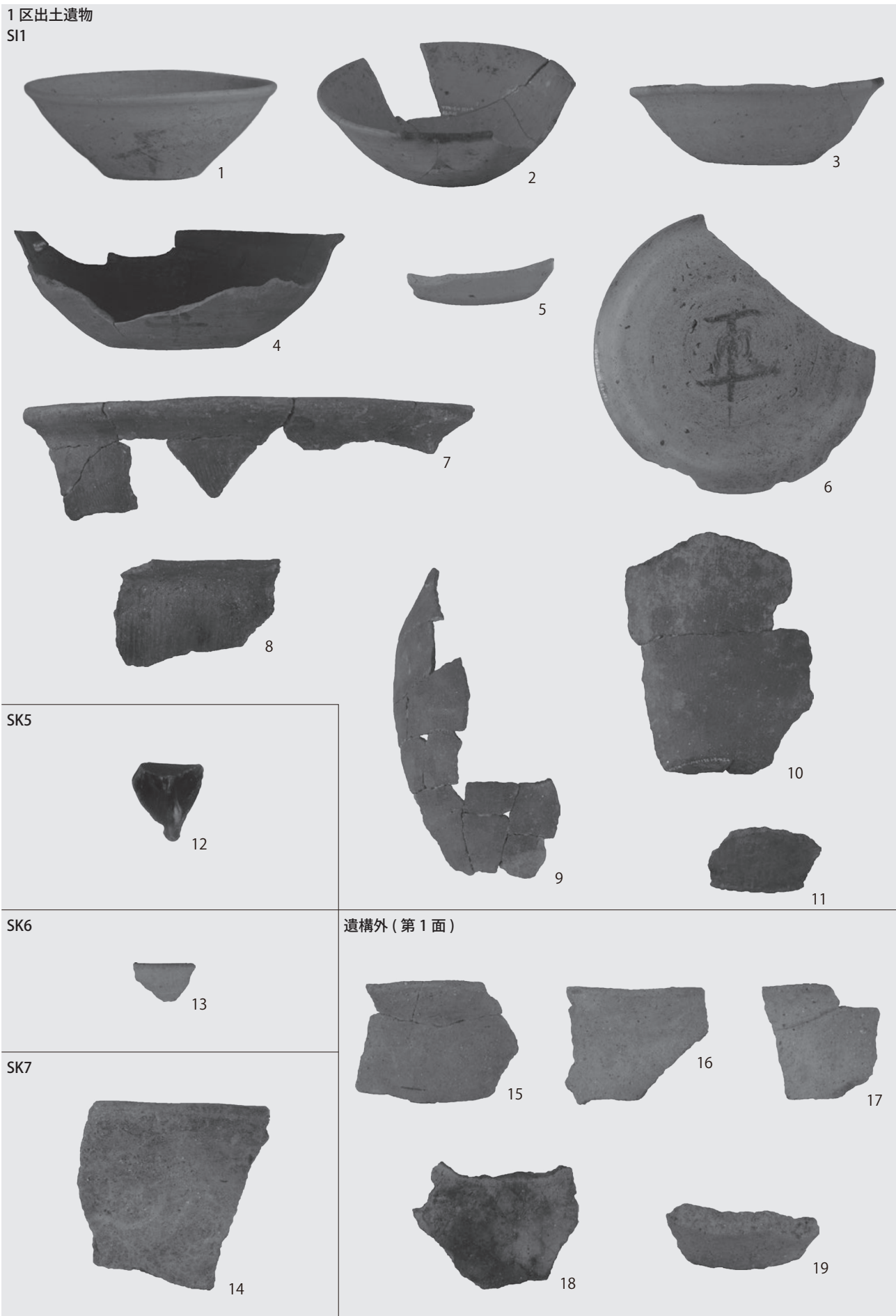
2区2面 SD6 南壁土層断面 北から



2区2面 完掘状況 南東から

図版 10

1区出土遺物
SI1



1 区出土遺物
SK9



20-1

20-2



23



25



24



21



26



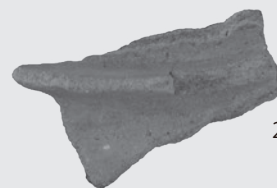
27



28



22



29

图版 12

1区出土遺物
SK14

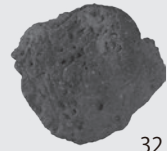
SK16



30



31



32

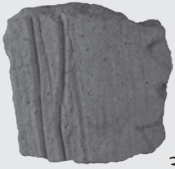
NR2



33



34



35



36



37



38



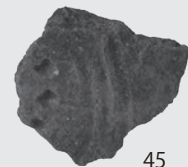
39



41



43



45



40



42



46



44

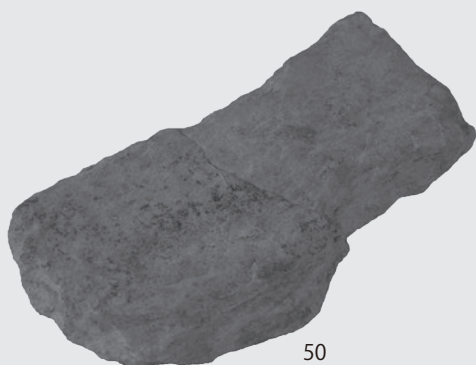


47

1 区出土遗物
NR2



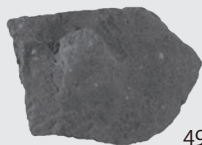
48



50



52



49



51



53

NR3



54



55



56



57



58



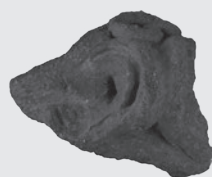
60



61



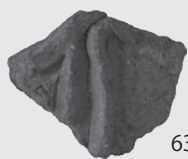
64



59



62



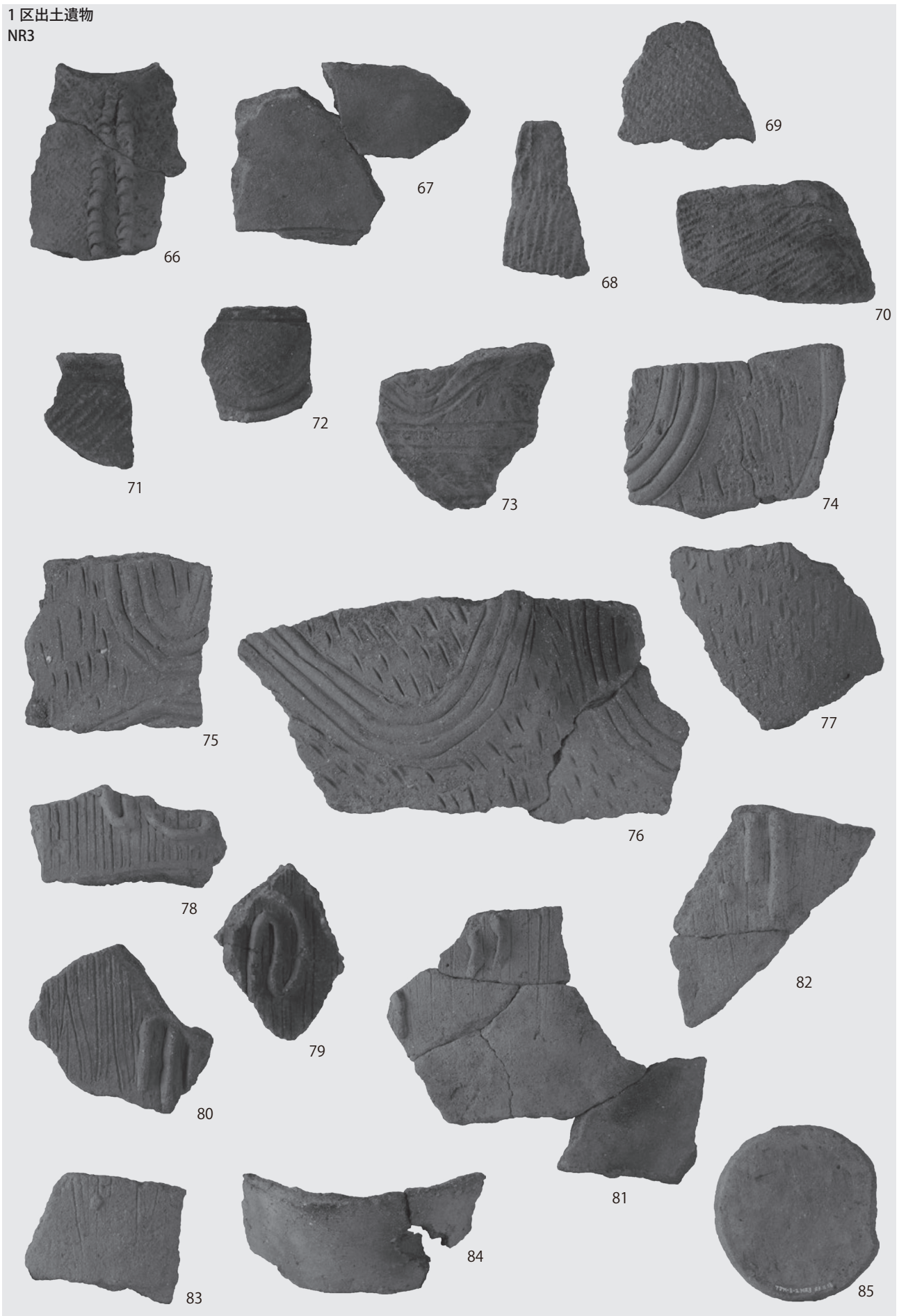
63



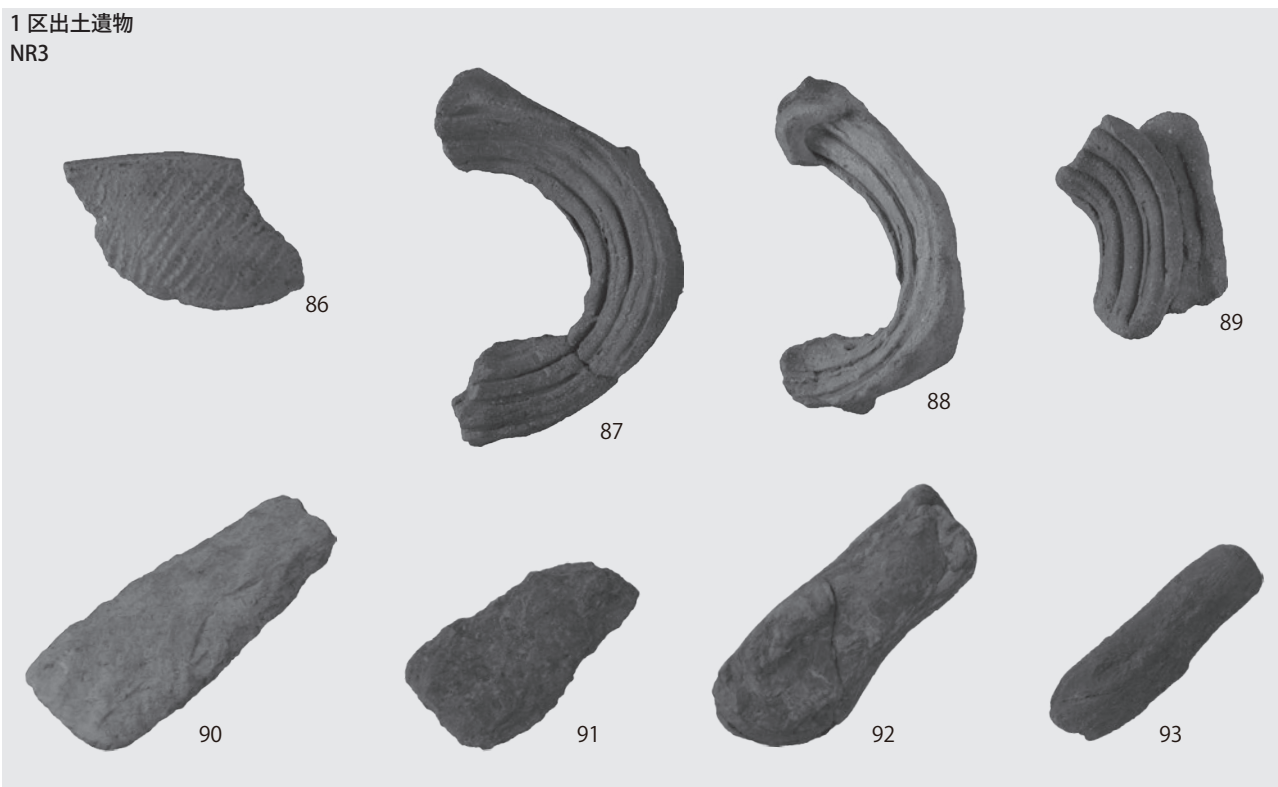
65

图版 14

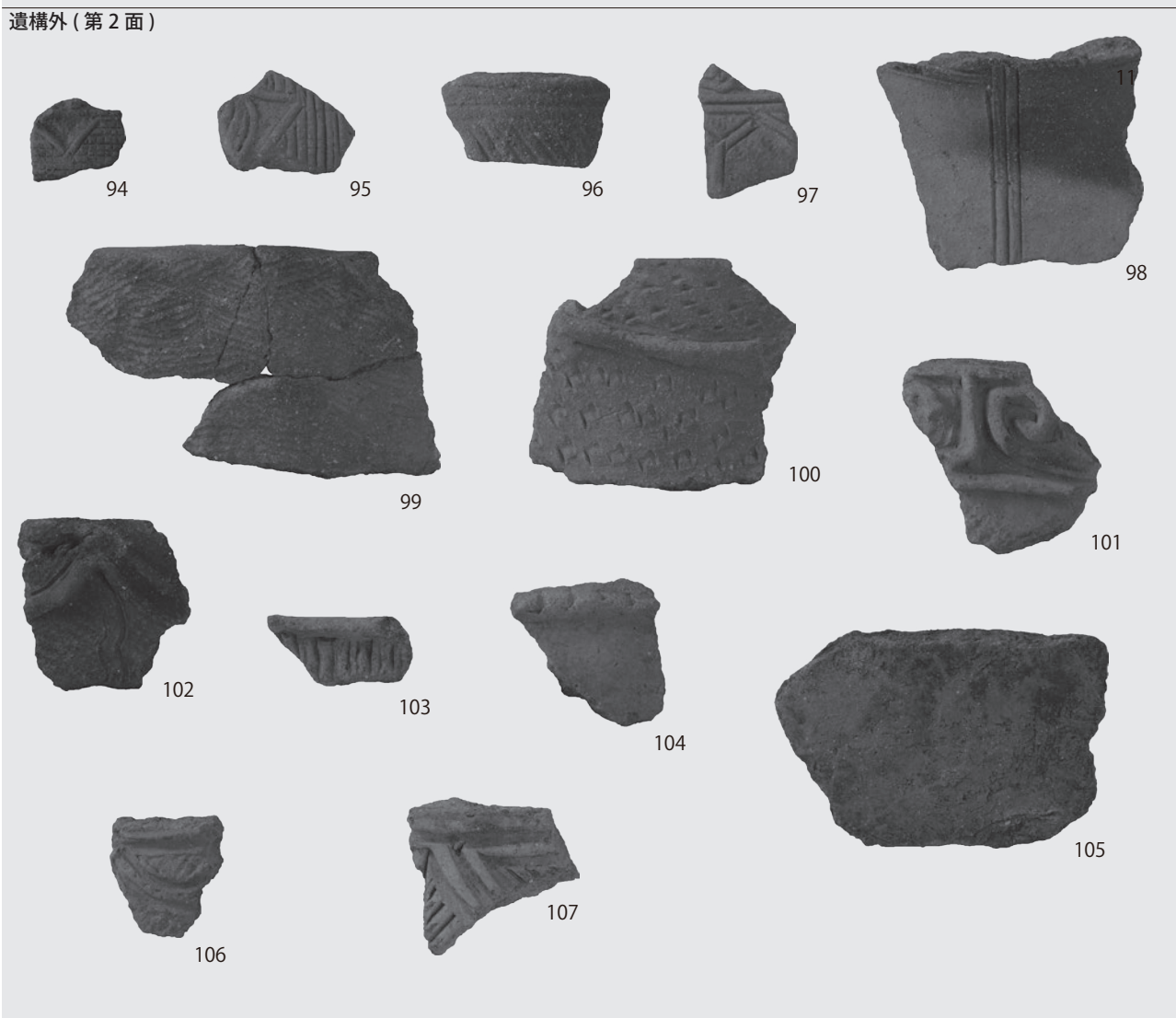
1区出土遺物
NR3



1区出土遺物
NR3

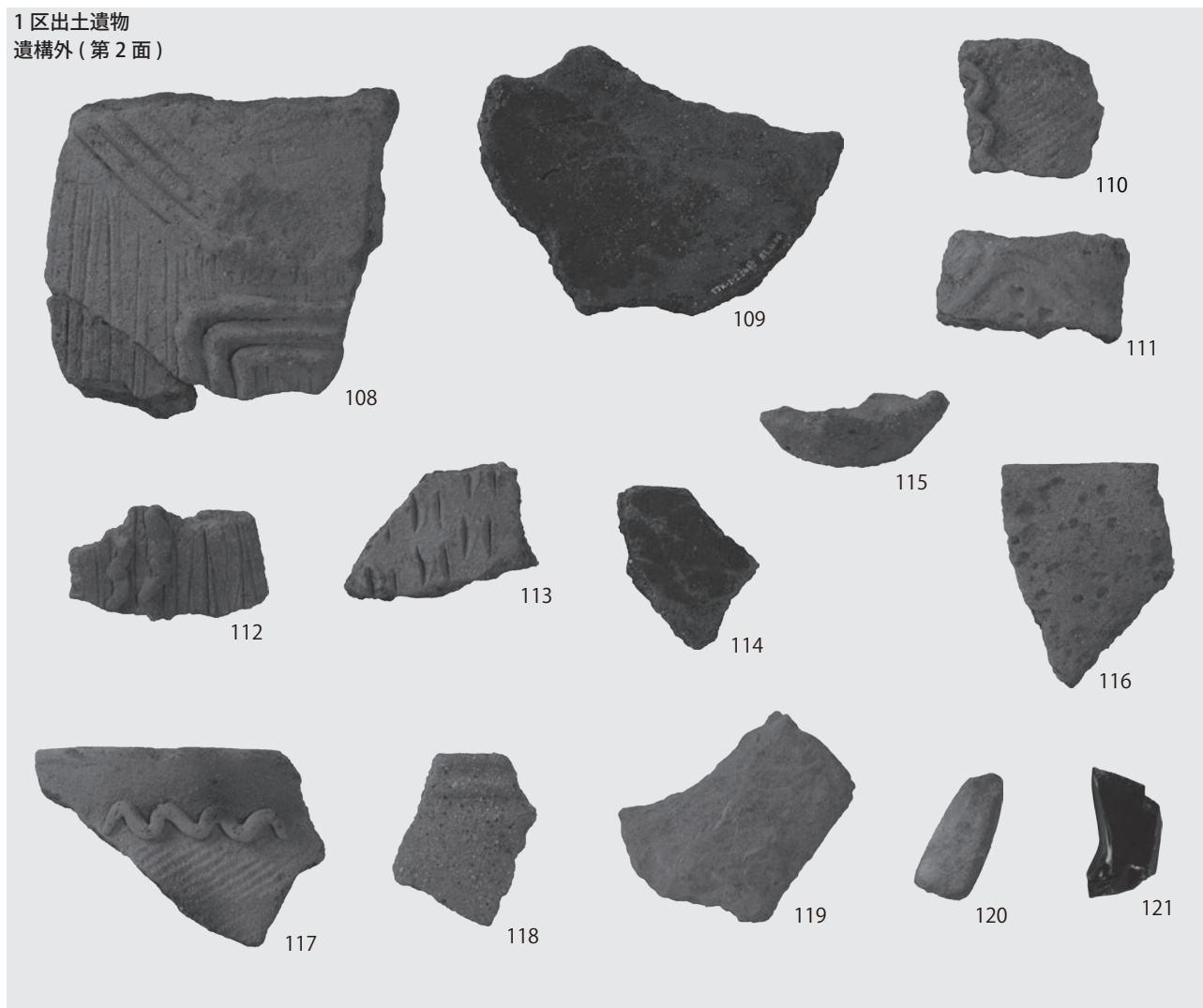


遺構外 (第2面)

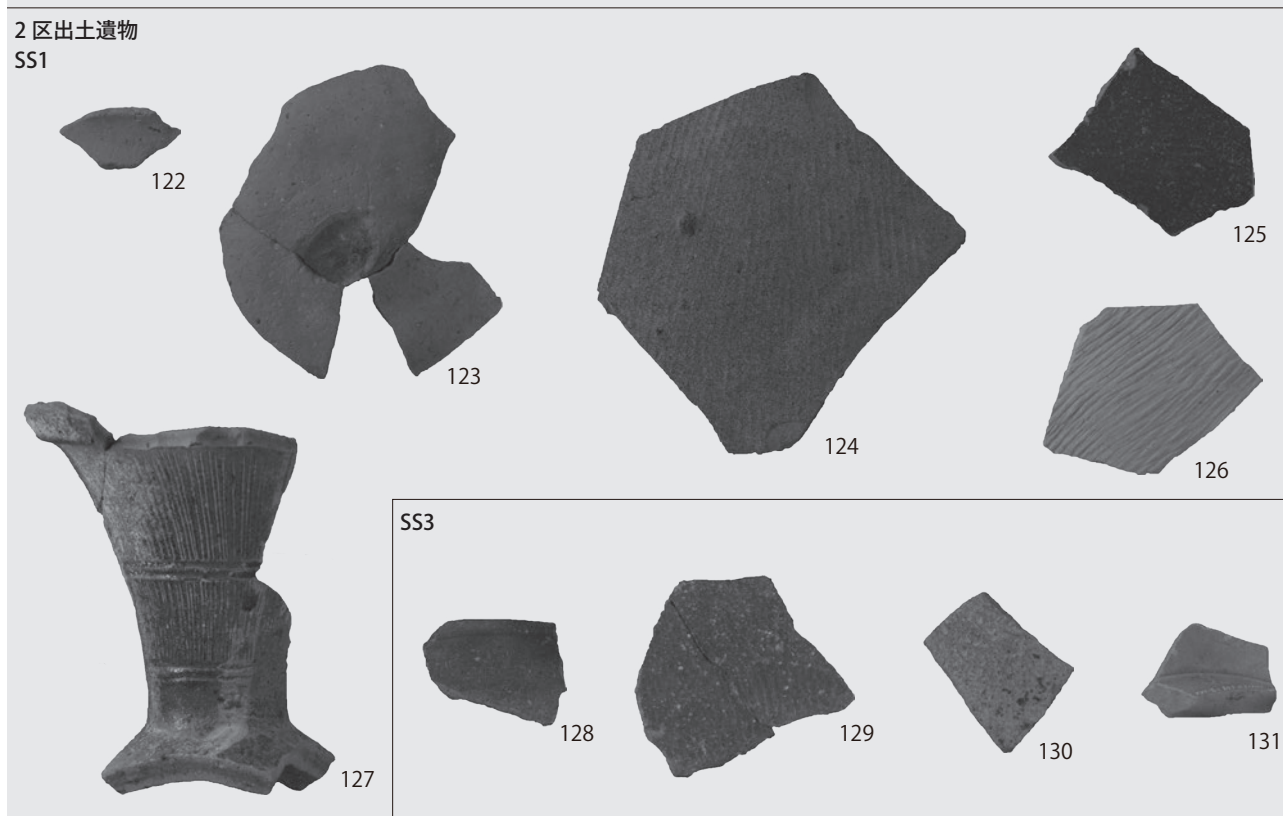


图版 16

1 区出土遺物
遺構外 (第 2 面)



2 区出土遺物
SS1

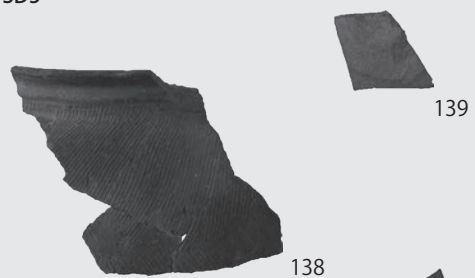


2区出土遗物

SD2



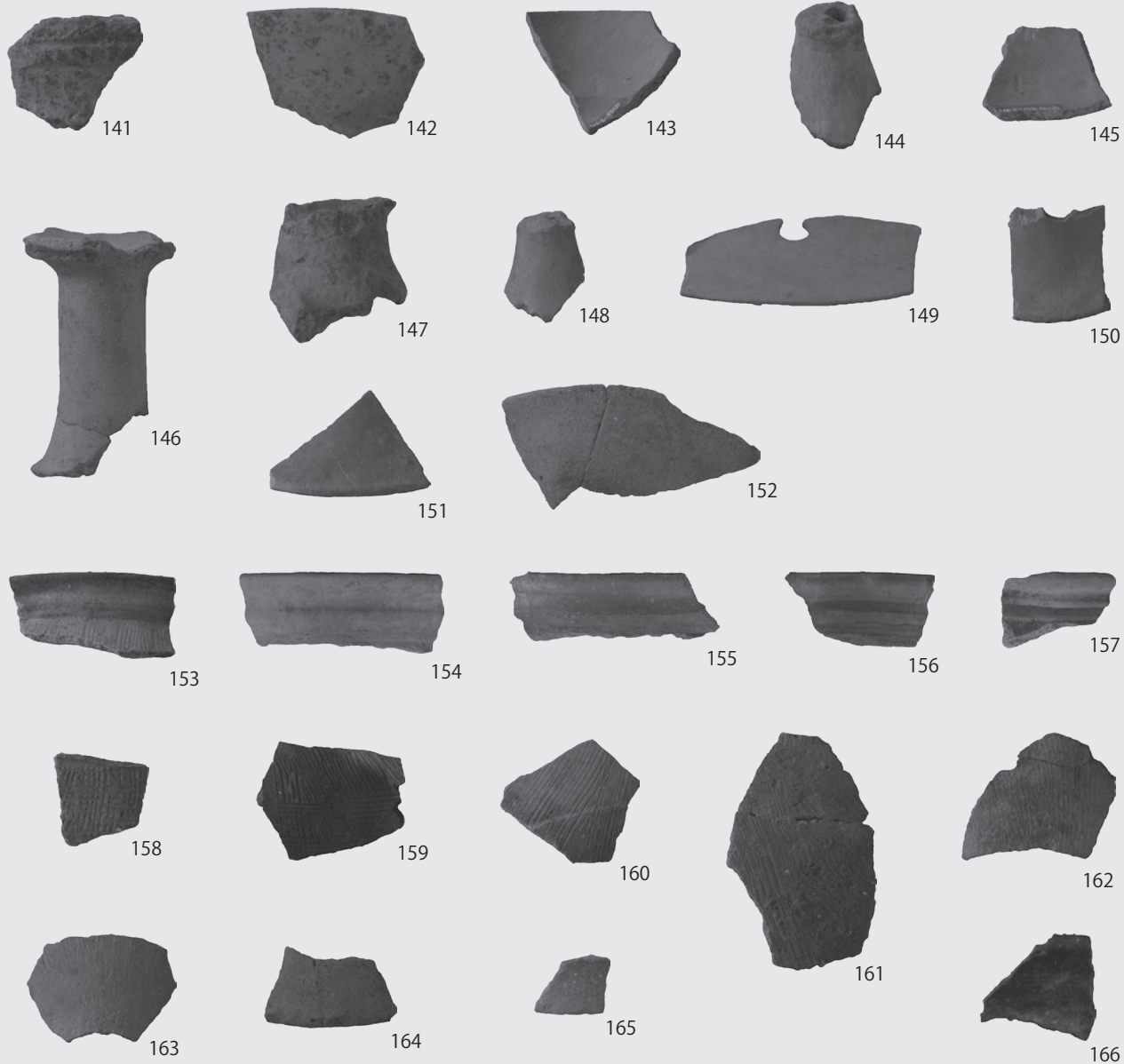
SD5



SD4

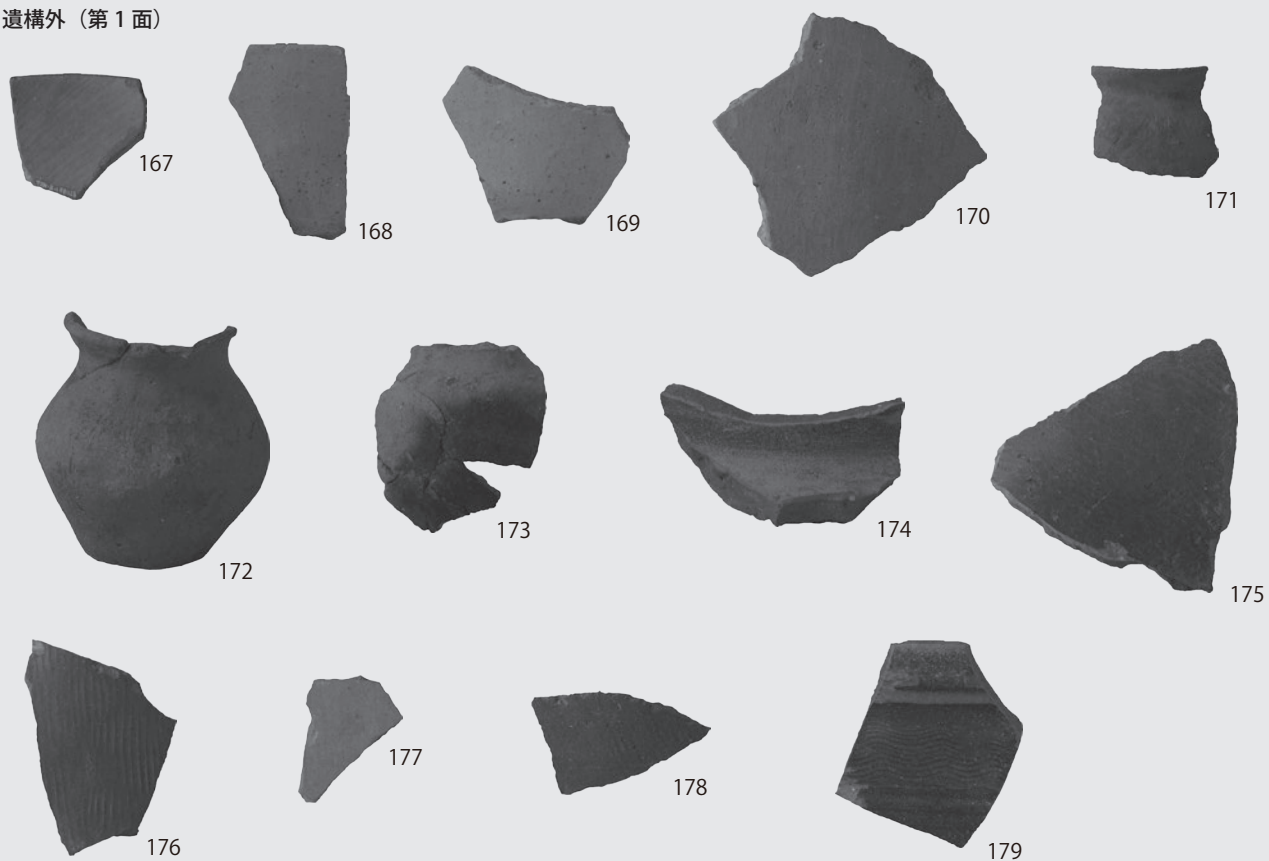


遺構外 (第1面)



图版 18

2区出土遺物
遺構外(第1面)



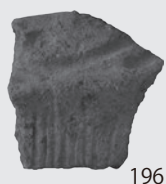
SD6



遺構外(第2面)



2区出土遺物
サブトレンチ 3



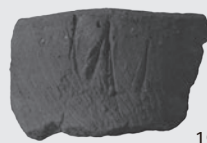
196



197



198



199

サブトレンチ 4



200

サブトレンチ 5



201



202

報告書抄録

ふりがな	てんじんきたいせき（やまなしけんこうふしちづか5ちょうめ3416ばん3ほかちてん）
書名	天神北遺跡（山梨県甲府市千塚5丁目3416番3ほか地点）
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	130
著者	望月健太・志村憲一
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2022(令和4)年9月30日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
てんじんきたいせき	やまなしけんこうふしちづか5ちょうめ3416ばん3ほか	19201	15	35° 41' 17"	138° 32' 06"	20211022 ～20211220	約495m ² 1区：約330m ² 2区：約165m ²	宅地造成工事
天神北遺跡	山梨県甲府市千塚5丁目3416番3ほか							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神北遺跡	散布地	縄文時代 古墳時代 平安時代	埋甕・土坑・小穴 竪穴住居・溝跡 旧河道	縄文土器・石製小玉 打製石斧・磨製石斧 土師器・墨書土器 須恵器	天神北遺跡における初の本格的な発掘調査。

要約	<p>甲府市西端に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である天神北遺跡の発掘調査である。天神北遺跡ではこれまで2度の試掘調査が行われたのみで、今回の調査が初の本格的な発掘調査となる。</p> <p>1区では、縄文時代中期の埋甕・土坑、古墳時代後期の土坑、平安時代中期初頭の竪穴住居のほか、計3条の旧河道を確認した。縄文時代の埋甕は曾利Ⅱ式のX字状把手付大甕を正位で埋納したものであり、甕内部下層から石製小玉が出土したことから埋葬または祭祀に関わる可能性がある。また、洪水被害により廃絶した平安時代の竪穴住居は、埋没河道に堆積する砂層を掘り込み構築されていた。</p> <p>2区では、古墳時代前・中期の土坑・溝跡、古墳時代後期の土坑・溝跡・石列・集石を確認した。緩やかな曲線を描く古墳時代後期の溝跡は単体で完結する内径約13m外径24mの円形をした周溝状と推定され、内径側立ち上がりに沿う石列と、円中心付近では版築状の堆積層が認められた。推定される規模が地籍図に見られる半円状の地番未記載地と重複することは、当地に古墳時代後期の墓石を有する円墳が存在した可能性を窺わせるものである。</p>
----	--

甲府市文化財調査報告130

天神北遺跡

（山梨県甲府市千塚5丁目3416番3ほか地点）
—宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2022(令和4)年9月30日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 西甲府住宅株式会社・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所